



現世においては旅人であり

寄留の身である

小さき兄弟会
会憲第四章に基づく
生涯養成のための資料

ローマ2008年

小さき兄弟会

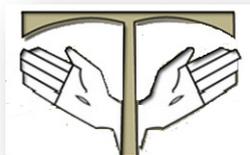
現世においては旅人であり
寄留の身である

会憲第四章に基づく
生涯養成のための資料

ローマ2008年

目次

はじめに.....	5
前書き	9
1 小さき者であること	15
2 正義と平和の推進者	49
3 被造物の擁護者	89
4 何一つとして自分のものにしてはならない.....	129
5 貧しき者の中の貧しき者	163
6 忠実かつ献身的に働く	199





はじめに

本兄弟会の創立800年祭を祝うにあたり、「現世においては旅人であり、寄留の身である」(1 Pt 2, 11; RB6, 2) と題した会憲第四章についての考察の書を皆様のお手元にお送りするのは私の喜びとするところであります。本書は、総理事会の審査と認可を受けております。

本書を準備するにあたっては、以前に出版した「フランシスカン・アイデンティティー」(1993年)、「祈りと献身の精神」(1997年)、「あなた方はみな兄弟」(2004年)の三冊の本の作成のために使用したのと同じガイドラインを用いています。本書の主たる目的は、生涯養成のための材料を兄弟各人および兄弟共同体に提供することです。このことを心に留め、この考察の書を最大限に活用するために必要な時間と方法を見出されるようお勧めします。

本書のタイトル「現世においては旅人であり、寄留の身である」は、私たちの偉大な霊性のテーマへと私たちを導きます。本書が重点を置いているテーマとは、小さき者であること、正義と平和の促進、被造物への配慮、何物も自分のものとしなないこと、貧しい人々と共に生きること、忠実かつ献身的に働くことです。これらのテーマは、聖福音によって示しを受け、支えられたもので、私たちが神との、他者との、そして物との新しい関係を築くのを助けてくれます。

私たちは旅人としてまた寄留者として、超越のしるしとなるように、そして、今私たちに与えられ、時間と空間の限界を越えて到達している豊かさのしるしとなるように招かれています。それは新しい関わりの世界であり、私たちが現在住んでいる世界とは必ずしも対立したり、矛盾したりするものではありません。それどころか、私たちの現状から始まり、永遠の完成へと向かう意義ある世界なのです。その意味で、これからお読みいただければ分かることですが、「家」と「旅」をイメージすることは、天の国の一部である内在性、透明性、超越性の側面を調和させるのに役立つと思います。「家」をイメージすることによって、私たちの社会的、文化的、物理的現実がすでに兄弟的な出会いと生活にふさわしい空間であることを理解することができます。「家」は、すべての人間を受け入れる普遍的な兄弟共同体のしるしとなるような形で、建てられ、管理されなくてはなりません。「旅」をイメージすることによって、私たちの最終目標があらゆる文化的な条件を越え、あらゆる論理的で正当な違いを越えたところにあることを思い起こすことができます。それは、独特な方法で主が私たちと共に歩まれ、私たちと共に語られる場なのです。エンマウスの弟子たちに対してなさったように（「主は道々わたしたちに話してください」2006年臨時総集会総括文書5-6参照）。

そのように考えれば、**小さき者であること**は、あらゆる傲慢な態度とあらゆる権力欲を捨てるという意味になります。私たちがそうするのは、すべての偏見や疑念を持たずに自分と異なる人々に接することができるためであり、その人々を大切な兄弟として、

友人として受け入れる心の準備をするためです。私たちは他者に対する時、劣等感を持ったり、幼稚な者であったり、ウブな者であったりしてはなりませんし、盲従するような態度をとってはなりません。フランシスコは、単純さと知恵を、従順と愛徳を、清貧と謙遜を調和させるすべを知っていました（SV 1-3 参照）。

私たちを取り巻く文化的・宗教的な世界に傍観者としてではなく、行動する者として身を置くためには、正義と平和の推進者となり、人間的で兄弟的な関係を築き、対話と積極的な非暴力を通して緊張と争いを解決し、軍備競争に特別な注意を払いながら、あらゆる形態の拷問や死に断固反対することが必要です。私たちはまた、この世界において、被造物に配慮する責任があります。この世界を単なる商品とみなすような態度を決して取ってはなりません。そのような態度は、容赦のない搾取につながります。私たちはむしろ、人類が被造物の中に神の善意と叡智と美を再発見できるように、この世界のシンボリックな宗教的価値を取り戻すことに力を貸すべきです。

人々や物との関係が深まるにつれ、私たちの霊性は所有権の放棄へと私たちを導き、それによって、自由と賜物と寛大さと連帯の重要性をさらに発展させることができます。さもなければ、人間や物を所有しようとする人々は結局、逆に所有されてしまいます。私たちが現在暮らしているこの世界では、貧しい人々の境遇が私たちの当然の生き方でなくてはなりません。貧しい人々と共に生きることによってこそ、彼らと歩み、連帯することができるのです。彼らは、神の子らにふさわしく、もっと兄弟的な関係と

もっと人間的な生活境遇を求めてもがいているのです。また、仲間である人間および宇宙それ自体との関わりをもってこの世界に生きるということは、アシジのフランシスコが勧めているように、自分の労働によって生活し、忠実に献身的に働くことを意味します。肉体労働であれ、知的労働であれ、働くことによって自らを養い、個人としてまた共同体として充足し、他者に喜んで仕えることができるのです。

最後に、本書を企画・出版するにあたり、編集や翻訳などの専門技術で協力してくださったすべての兄弟に、心からの感謝を表したいと思います。特に、ヴィンセンツォ・ブロカネッリ、ルイス・カブレラ、ヴィセンテ・フェリペ、デイヴィッド・フラッド、ジョハネス・フレイヤー、マッシモ・フサレリ、ハヴィエル・ガリド、ジョン・ハーディン、ホセ・アントニオ・メリノ、ジョー・ロザンスキー、ビル・ショート、ネスター・シュワルツ、チェザレ・ヴァイアニに感謝いたします。会のすべての兄弟に対するあなた方の素晴らしいご助力に、神様が報いて下さり、祝福してくださいますように。

2008年8月2日、天使の聖母の祝日に、ローマにて

総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバリヨ、ofm

前書き

総理事会は、これまで14年間にわたり、1987年の会憲への理解を深め、実践のよすがとなる資料をいくつか出版してきました¹。2006年に総理事会は、小さき人々のための章である会憲の第四章についての資料を作成することを決定いたしました。総理事会は、この作業の調整を、J P I C（正義と平和、被造物の保全）総担当室に委ね、この作業は、養成学問担当総本部事務局および福音宣教事務局の協力を得て行われました。

会憲第四章のタイトル「現世においては旅人であり、寄留の身である」は、フランシスコが兄弟たちに「何物も自分のものとせず」、信頼をもって施しを求めて行くようにと頼んだ「裁可会則」の表現を借りたものです。フランシスコが会則で使った「旅人であり、寄留の身である」という言葉は、聖書的な表現で、ペトロの第一の手紙に基づいています。この表現（1Pt2:11）はヘブライ人への手紙（Heb 11:13）や創世記（Gn 23:4）にも似たような表現があることを思い起こさせます。創世記では、アブラハムは「**土地を求める寄留者**」として描かれています。この聖書的な考えから、会則のそれに呼応する表現を解釈するヒントが与えられています。フランシスコは、異教徒のもとに赴くキリスト者の態度と振舞いについて述べた使徒ペトロの言葉を引用しています。私たちの場合、対象となっているのは、人々のもとに赴く、もしくは

¹ 「フランシスカン・アイデンティティ」、「会憲のための学習ガイド」ローマ、1993年「祈りと献身の精神」ローマ、1996年、「あなた方はみな兄弟」ローマ、2002年

は、赴かなければならない兄弟たちのことです。本当の意味で福音的であるためには、兄弟たちはイエスに倣い、旅人として寄留者として、何も持たず、家も持たず、経済的安定もなしに忠実かつ献身的に働いて、施しを求めて生きねばなりません。

会憲には、兄弟たちの外部との関わり (relations ad extra) の生活について述べた章が二つあり、第四章はその一つです。もう一つの章は第五章で、福音宣教についてのものです。従って、「現世においては旅人であり、寄留の身である」は、一般の人々や社会や世界との関わりにおける兄弟たちおよび兄弟共同体の在り方を要約したものです。その態度の模範となっているのは、地上に生きておられた時のイエスです。その態度があればこそ、兄弟たちは誰をも拒否することなく、すべての人、特に社会的にも精神的にも疎外された人々と共にいるように励まされながら、神の国の到来に寄与することができるのです。

会則では、旅をしながらあちこち移動することは、小さき者であることのしるしとなっており、キリストの生き方を直接に示すものです。フランシスコは、私たちが現代に即した形で「旅人となり、寄留者となる」ことを最重視しましたが、会憲は、それを再確認しています。フランシスコの時代にそうであったように、現代においても、世界を巡り、人々を求めて彼らと共に生きることは、福音を宣べ伝える人々の内面から湧き上がる関わりと交わりへの欲求の表現です。だからこそ、旅することと、フランシスコ的・不安定さは、謙遜と清貧と正義と平和の福音的な証しを見事に表現していると言えます。そのような生き方を証しするこ

とは、極めて預言的であり、福音的です。

本書に示されるテーマは、**会憲の第四章**の重要な側面を発展させることを目的としています。すなわち、小さき者であること、正義と平和の推進者となること、エコロジーの保護者となること、何も自分のものとしないうこと、貧しい人々と共に貧しく生きること、そして、忠実かつ献身的に働くことです。

各テーマは次のような構成になっています。

各テーマを扱った**会憲の条項**。

- I. フランシスカンの靈性に詳しい専門の兄弟たちが準備したこれらの条項についての「**考察のために**」
- II. 私たちの召命のこれらの側面を独特なやり方で実践している世界中の兄弟共同体の具体的な実例を出しながらの、「**体験の分かち合い**」。
- III. このプロセスの非常に重要な部分である「**実行**」。この資料の目的は単に会憲に対する知識を深めることではなく、会憲を現代の教会と世界においてより意義ある形で実践するのを助けることです。このセクションでは、「**個人の養成と兄弟共同体の集まり**」（修道院会議、黙想会、研修会、フランシスカン家族の集まりなど）についての提案を掲げており、生涯養成にも初期養成にも役立つはずで、提案は次のプロセスに基づいています：考察—祈り—約束の更新—生活とミッションの実行。これらの側面をすべて統合させることは、私たちの養成を下記のようなイエスとフランシスコに倣ったやり方で

真の回心にするためにとても重要です。

- a. 会が提供した小冊子に書かれている方法を「**レクチオ・ディヴィナ**」(御言葉の奉読)のために使うことができます。聖書を読むことは、兄弟共同体においては不可欠です。なぜなら、神の御言葉を聞くことと信仰の分かち合いは、キリスト者の生活とフランシスカンの召命の中心をなすものだからです。
- b. 「**生活の見直し**」は修道院会議や黙想会で行うことができます。そのやりかたについては、以下を参考にするとよいでしょう。
 - 修道院長またはこのテーマの司会者は、修道院会議の数日前に、読むべき箇所を提示する。
 - 集まりを始める前にふさわしい歌や聖歌を歌うとか、聖書の一節を読むとか、フランシスカンの資料を読むとか、教会の社会教説を読むと良い。
 - 司会者はテーマを簡単に紹介し、考察すべき点や体験の重要な部分について述べる。参加者の兄弟たちは、自分が感じたことを述べ、これまでの体験、あるいは現在の体験を話す。
 - 兄弟たちは、会憲のこの部分をどのように実践しているかについて考え、改善すべき点について提案し、それらの点を共同生活のプロジェクトに取り入れるように心掛ける。
 - 集りの終わりに、成果を感謝する祈りを唱え、歌を歌う。
- c. 考察と祈りを無駄にしないために、六つのテーマごとに、兄弟共同体で使える「**しるしとジェスチャー**」が与えられています。これらのしるしとジェスチャーが御言葉を読むことと、兄弟共同体の生活を変えることから生まれることが大切です。明らかなことは、私たちの召命の持つこれらの価値を実際に

生きることが、異なる社会文化的背景と教会的な背景の中で、異なった形で行われるという点です。

- IV. 「更なる考察のために」このセクションでは、神の御言葉や教会の公文書、フランシスカンの源泉資料、会の公文書からの引用を扱います。それによって、各テーマをより深く研究することができます。これらの公文書、特に勉学綱領と養成綱領の扱うテーマを研究するということは、生涯養成を行うこととつながります。なぜなら、それらは私たちの生き方の根本にかかわることだからです。

1 小さき者であること

会憲

第 64 条 「死にいたるまで、へりくだって従う者となった」¹ イエス・キリストに倣う者として、また、小さき兄弟となる自己の召命に忠実な者として、兄弟たちは「喜びとほがらかさをもって」² すべての人のしもべ および臣下、平和を愛する心の謙遜な者として³ 世の中を巡る。

第 65 条 兄弟たちは、「人は 神の御前にあるだけの者であって、それ以上のものではない」¹ ことを自覚しつつ、神こそ最高、唯一の善であることを認め、常に、すべてにおいて神を喜ばせるよう努力し、自分が無価値で、愚直で、軽んずべき者とみなされることを、平然と受けとめる²。

第 66 条 (1) 救い主がご自分を無とされたことをより忠実に模倣し、より輝かしく示すために¹、兄弟たちは、社会においては取るに足りないと言われる人々の生活と境遇を受け入れ、常に彼らの間で、小さきものとして生きる。この社会的境遇から兄弟たちは神の国の到来のため働く²。

(2) 兄弟たちはその生き方として、共同体としても個人としても、誰をも、とりわけ通常は社会的、霊的に見捨てられている人々を、拒むことのないようにする。

第 67 条 兄弟たちは、常に自分を捨て¹、神への絶えざ

る回心において、自分の生き方を模範として現代の「偽りの価値観」を非とする予言的姿を明らかに示す²。

I-考察のために

聖フランシスコは、キリストに従う決意をした人々に的確な名称を与えました。「この兄弟の集まりは、小さき兄弟会と呼ばれるべきである」²。それゆえに、小さき兄弟会は私たちを定義づける名称となったのです。私たちは貧しい兄弟でも、謙遜な兄弟でもなく、むしろ、小さき兄弟なのです。

会憲は、小ささについてのフランシスカンの用語を復活させています。会憲は源泉資料や「私たちの先達」の伝統や現代の文書、特にメデリンやマドリッドの総集会とバヒヤの総評議会の文書を頻繁に活用しています。用語は「ニュートラル」なものではありません。たとえば、ある兄弟のことを長上とか、神父様とか、修道院長、議長とか言うのと、奉仕者、しもべ、兄弟とか小さき者と言うのとでは、全く違います。その称号の裏には、現実認識とそれに対する関わり方への認識があり、その結果、現実そのものに大きな影響が及んでいます。

1967年の会憲が、兄弟たちの生活における「兄弟性」を最重要視したとするならば、現行の会憲は、それをさらに具体化する努力をし、1987年の会憲は小ささを重視したと言えます。「兄弟性」も「小ささ」も、互いに相関的な用語です。「小さい」

² 1 チェラ 38

(minor) という言葉が、「いかにして」兄弟となり、「いかにして」生き、福音を説くかの模範を示すものであることは確かです。つまり、小ささは、生き方のプランを、神と他者と被造物との関わりに対する理解と表現の独特な仕方を、そして、教会と世界に対する私たちの奉仕の仕方を定めているのです。

1. カリスマ的なインスピレーション

小さき者としての私たちの召命は、フランシスコとその兄弟たちの召命の物語にその起源があり、後に会則に明記されています。

事実、フランシスコの回心においては、主の救いの恵みの体験をハンセン病患者との出会いと切り離して考えることはできません。フランシスコとその弟子たちは、社会の小さき人々と共に生きる小さき者であったのです。主に忠誠を尽くすために、フランシスコは自分の「身分」を捨てて、疎外された人々と共に生きる道を選び、自らもその一人となりました。

兄弟たちを与えられた時のフランシスコの生活様式は、「遺言³」に記されています。ところが、その同じ「遺言」に、フランシスコが感じていた緊張をも見て取ることができます。それは、本来の意味での小ささに憧れる気持ちと、兄弟会が発展するにつれて生じた諸問題のことです。教会の下で独自のステイタスを保とうとする修道会には、常に構造的と言っても良い問題がありました。

³ 遺言 14-24 参照

結局のところ、会則によれば、大半の兄弟が社会的にも教会的にも本当に小さき者であったのです。⁴ しかし初期の伝記作家たちは、会が劇的に発展したと述べています。⁵

第二バチカン公会議以降、兄弟会はその本来のカリスマ的なインスピレーションを取り戻すべく努めて来ました。このことは、会憲の第四章に詳述されています。会の歴史的な発展を考えれば、私たちに求められている小ささの選択は決して簡単なことではないことがわかります。しかし、現代の新しい社会・文化的な条件と小さき者となる召命に対する兄弟たちの新たな感性が交わるのを見るのは喜ばしいことです。

2. 私たちの生き方

会憲の条項は、私たちの個人として、共同体として、また管区としての生き方を説明するための貴重な総合判断を提供してくれています。各条項は、それぞれ別の側面に重点を置いています。たとえば、第64条は、小ささが私たちの召命の中心であることを思い起こさせます。つまり、イエスに従うことであり、イエスのケノーシス（ご自分を空しくされたこと）が、私たちのアイデンティティーの中心となっているのです。小ささのうちに、私たちは福音の真福八端の精神と態度を生き、世界における自分の使命を果たすのです。⁶

⁴ 未裁可会則 7,14; 裁可会則 3 参照

⁵ AC 58,74,106; 2 チェラ 145-149 参照

⁶ 未裁可会則 16 章以下参照

別の条項は小ささから生まれる結果を示しています。それらの条項によれば、私たちは自分を社会的にも小さきものとする生き方を選択すべきなのです。このようなあり方、貧しい人々の生活条件を自分のものとする生き方は、天の国のしるしであり、それが私たちの使命の重要な要素であることは疑う余地がありません。⁷

また、この小ささの召命に忠実であるためには、自分を捨てること、特に、所有権の放棄と生涯にわたる絶えざる回心が求められます。この自己放棄によってもたらされる実りは、神が求めておられる新しい人間のしるしとなります。私たちは、神の国の価値観に対立するものを捨て去ることによって、現代文化に対抗するしるしとなることもしばしば求められます。⁸

これらの条項の中で全体的に私たちが認識しなければならないことは、霊的な体験や実践や人生の選択を統合する活力であり、私たちの召命の霊的な起源への忠実さであり、現代世界における貧しい人々の状況であり、小ささの様々な側面、すなわち神学的、キリスト論的、社会的、宣教者的な側面が互いに関連し合っていることです。

3. 小ささの様々な側面

私たち小さき兄弟たちにとって、小ささが貧しい人々や謙遜なキリストに従う手段であるならば、小ささには、父なる神との関

⁷ 会憲 65-66 条参照

⁸ 会憲 67 条参照

係や人間関係や貧しい人々との関わり方も含まれなければなりません。このテーマの大きさを考え、最も重要と思われる四つの側面に焦点を当てます。

a. 小ささと神との生活

フランシスコにとって小ささが特別なものではなく、イエス御自身を示す愛によってかたどられた生き方となっているのは、クリスマスと受難と御聖体の神秘を思いめぐらすことによるものです。また、小さき者であり、罪人である自分に注がれる神の慈しみを思いめぐらすことによるものでもあります。

ゆえに、フランシスコに自分の小ささを意識させているのは、己を有限の存在とする宗教哲学ではなく、見事に自分を主に捧げきる自己奉獻にほかなりません。フランシスコの「なぜ、私なのですか」という叫びは、真情あふれたしるしとなったのです。小さき兄弟が己の真実はこの自己奉獻にあるということを理解しないならば、どうして祈ることができるでしょうか。

b. 小ささと兄弟的な生活

未裁可会則の4－6章を読んでもみると、兄弟性と小ささとを結びつけるつながりがわかります。

- 自分のことを他人よりも上だと思ふ人は兄弟ではない。
- 兄弟愛とは、利己的でない時に聖霊から来るものである。
- 利己的でない愛の証しは、兄弟的な従順である。
- 兄弟共同体においては、小さき者ほど大切にされる、たとえば、病人、高齢者など。
- すべての兄弟の中で最も小さき者とは、兄弟たちのしもべ、

すなわち総長、管区長、修道院長である。

- 究極の模範は常に、謙遜に他者の足を洗われたイエスである。

c. 日常生活の在り方

小ささの態度が本物となるのは、それが生活全体に及ぶ時です。たとえば、

- 家事の分担。
- 社会から「低レベル」と思われている仕事を好む。
- 物質的な貧しさ、それも、個人的な苦行としてだけでなく、貧しい人々との連帯としての貧しさ。
- 神から賜物としていただいたものを他者のためにいつでも捧げる。

d. 小ささとミッション

- 貧しい人々の中に兄弟共同体を置くことを特例と考えてはいけない。
- 福音宣教の対象は、特に小さき人々と単純な人々であるべきである。
- 疎外された人々の尊厳を守るために、真剣に働くことが必要である。

4. 理想と現実

小さき者であるようにとの私たちの召命について、上に述べたことは、賜物と視点のことです。しかし、人々の現実生活から生

じる諸問題や構造的・集団的な面での私たちの限界を無視するならば、それは、近視眼的な見方と言えるでしょう。人々や集団の生きているプロセスを尊重しながら、理想を持続させる知恵こそは、私たちフランススカンの生活の最も重要な課題の一つなのです。

a. 心理的な諸問題

社会から認められ、承認されることは、すべての人の基本的な欲求です。小さき者であるようにとの召命に応えるためには、次のことが必要です。

- そうした欲求を積極的に受け入れること。
- そうした欲求に依存しないでいられるように、内面の自由を育むこと。
- 私たちの生活に自己実現を越えた土台を与えてくれるような神学的回心。
- イエスの模範に従い、最後の者となることを選ぶべきだと確信させてくれるような十字架の知恵。

以上のことは、意志の力だけで、あるいは、理想を追い求めるだけで実現するものではありません。

b. 社会・文化的な諸問題

現実的であるためには、次のことを認識しておかなくてはなりません。

- 兄弟たちの大半は中流階級の生活をしていること。
- 私たちの歴史や養成は必ずしも、私たちが共にしたいと願っている小さき人々に近い者となるのに役立つわけでは

ないこと。

- 私たちの組織としての構造が、貧しい人々の世界に自分も身を投ずるのを妨げるような義務を抱えていること。

以上のことは、小さき者であるようにとの召命を幻想にしてしまうような妨げとなるでしょうか。それとも、私たちは、これらの困難を事前に受け入れて、個人としても共同体としても回心し、個人とグループのプロセスを尊重しながら、理想に向かって邁進するようにとの招きを受けているのでしょうか。

c. 実存的な問題

聖フランシスコの霊的な旅を思いめぐらしてみると、彼は主の御旨のリズムに従って、予期せぬ形で示される小ささというものを学ばなければならなかったように思えます。

彼が新しい生活を始めた最初のころは、小さき者として生きることを選ぶということは、主の呼びかけに応えることであると同時に、自分自身の心からの願いに応えることでもありました。総長の職務を引き受けなければならず、有名になり始めた時、彼が最初のころに選んだことは、新しい状況を優先させるために後回しになりました。晩年になって、学識と影響力のある一部の仲間たちと自分の考えが違うと感じた時、小さき者であることは、最初のころに選択した生活様式とはかなり違っていったものの、フランシスコにとっていっそう現実的なものとなりました。

小さき兄弟は、誓願を立てて、小さき者となることを選びます。しかし、その方法を示してくださるのは神の摂理なのです。

d. 霊的な問題

無条件の特性を持つ生き方について論じる時、特に、主イエス・キリストの足跡に従うこと⁹について論じる時、初期の熱意と、初期の選択を持続するのに必要な霊的生活の質との間のずれは典型的です。

小ささへの召命が神学的な基盤を持たず、イデオロギーの基盤の上に立っているならば、いくら福音によって正しいとされていても、私たちの生き方の選択にはやがて矛盾が生じるでしょう。

会憲の第四章が会に求めている小ささへの召命は、一方で、非常にラディカルなものなので、現在の私たちはそれを具体的に実行するほんの初期の段階にいるにすぎないことを認めなければなりません。

II－体験の分かち合い

小ささには関係性の側面もあります。「小さい」(minor)という言葉は、フランシスコが福音書(マタイ 20, 25-27、ルカ 22, 26)から取ったもので、関係性を表す言葉です。つまり、他者との関係においてより小さい者であるという意味です(LSR, 28)。小さい者であるとは、神の御前に「より小さく」された人のことです。つまり、自分が出会う人に対して、その人「より小さい」ということであり、自分の生活している社会状況の中で「より小さい」

⁹ 未裁可会則 1、裁可会則 1 参照

ということなのです。従って、小ささは、他のある人、ある場所、ある使命と「関わり」を持ちます。人は独特な状況の中で、独特な方法で「小さく」なります。「小さい」と言っても、社会の中で疎外されているのか中流階級にいるのかで違ってきますし、学問的な背景なのか、小教区なのか、労働者階級にいるのかによっても違ってきます。また、既存の教会環境の中でなのか、それとも宣教過程にある教会の中でなのか、によっても違ってきます。

小ささは、フランシスカンのあり方であり、行動様式です。それは、フランシスカンのキリストへの従い方であり、聖フランシスコの模範に倣うことです。それは、あらゆるフランシスカンの価値（祈りと献身の精神、兄弟的な交わり、清貧、福音宣教）を特徴づける様式なのです。ゆえに、小ささは、さまざまな時代に、さまざまな場所で、さまざまな生活の条件下で、「新しく生かされる」ことを必要とします。そのいずれの場合も、独特の雰囲気を持っています。

小ささはさらに、兄弟たちに「優先的な選択」をすること、すなわち、他の何物にもまして、ある生活様式、仕事、人々を優先することを選択するように要求します。

たとえば、モロッコのようなイスラム教の環境では、小ささは、自分たちを受け入れてくれる人々に対する謙遜な尊敬を表して生きることとなります。つまり、自分たちとは異なる他の宗教を積極的に受け入れることであり、性急な結果を求めずに、忍耐し自制することなのです。しかし、小ささは、無邪気だとか天真爛漫

であるという意味ではなく、主の御声に心を開き、人々に仕えるために己を一段と低い者とするにほかなりません（以下に述べる第一の体験を参照のこと）。

移民の多いイタリアの環境においては、小ささは、他者との友好的な関係を育もうとしながら、そこに築かれ、新しい生活を打ち立てようとする家族の困難と希望を分かち合う兄弟共同体の生活様式となっています（以下に述べる第二の体験を参照のこと）。

フランスのある都会の多民族・多文化の環境においては、一つのごく普通のフランスカンの兄弟共同体が周囲に溶け込み、周囲の人々と同じような生活をし、彼らをありのままに受け入れ、彼らの持っているものを共有することによって、小ささを具現しようとしています。これこそは、「目に見えるシンプルな形で証しすること」を望むフランスカンのあり方です（以下に述べる第三の体験を参照のこと）。

これらの体験（私たち一人一人には別の体験もあるでしょうが）は、フランスカンの生活の具体的な側面としての小ささというものを理解する助けとなります。この小ささを私たち一人一人が自分の置かれた時と場所で、しっかりと生き抜くためには、絶えざる識別と適応が必要です。

1. イスラム教徒の中で小さき者であること

モロッコのメクネスという古いアラブの街の中心地には、若い

モロッコ人のためのセイアントニオ・センターという放課後のセンターがあります。建物の正面の古い出入り口の上に、石の十字架がそびえています。この十字架は、この場所がかつては移民のための教会として使われていたなごりです。イスラム世界の真ん中で、兄弟たちの心の中には、サラセン人のもとに赴く兄弟たちに送った聖フランシスコの言葉が響いています。フランシスコはこう言いました：「**口論や争いをせず、神のためにすべての人に従い、自分はキリスト者だと宣言すること。主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えること。**」

このイスラム世界で小さき者であるということは、自分がキリスト者であることを宣言しながら、自分を霊的な客人として受け入れ、迎え入れてくれる人々に謙遜に従うことを意味します。彼らは私たちの霊的な宿主なのです。私たちは支配された人のように従うのではなく、他者を尊敬することが人々に近づくことと相互理解を可能にするのだという信念をもって従うべきです。

若い学生たちは、私たちの信仰のこうしたシンプルなるしのもとに来ては去って行くのです。あの石の十字架は、日々成長する関係を静かに見守る証しとなっています。主は仕えられるためではなく、仕えるために来られました。これこそは、小さき兄弟たちの生き方であるとフランシスコは言っています。兄弟たちの日々の仕事は、神から頂いた平等の感覚を常に探りながら、他者との絆を強める奉仕なのです。

ムスタファ、カディジャ、ムーニール、ナディア、マリアム、

ルドゥアン、そして多くの人々が自分自身の信仰によって生まれ、成長してきました。彼らの信仰は、数え切れないほど多くの世代を生き継がれてきた生命である血と共に発展してきたのです。私たちの知っている同じ神がこの生命である血を与えてくださったとはいえ、彼らの信仰は私たちの信仰とは違います。小さは彼らの信仰とそれを宣言する兄弟姉妹を受け入れます。小さは、彼らの道を、それが自分の道とは違っていても、正しい道として受け入れます。小さは、そうした彼らの信仰が、日々私たちの小さな聖堂で割られ、分け与えられる同じ神へと自分たちを導くのだということを認めることです。

小さは、私たちの慣れ親しんだ神の御言葉を声高に、詳しく告げ知らせることがいつもできるとは限らないということの意味しています。小さは、御言葉を告げ知らせるのにふさわしいタイミングを辛抱強く待つことです。小さは、その間、御言葉をその人なりのやり方で体現し、これらの若いイスラム教の人々がそのメッセージを容易に読み取ることができるようにするので

このようにして機会が訪れます。小さは単に無邪気であることではなくて、より小さい者となること、純朴な者となり、たとえいつも理解されるわけではなくても、私たちの中に住まわれる神とはどのようなお方であるかをいつでも示すことができることであることを、私たち兄弟は知っています。

月日が経ち、若いイスラム教の人々が相変わらず私たちの敷居

をまたいでやってきます。私たちがここにいるのは彼らの信仰を変えるためではなく、ただ彼らに仕えるためだということを彼らはよく知っています。日々の生活の中で彼らと接することによって、私たちは互いのことを学びます。小ささとは、努力の結果がすぐに実るわけではないこと、しかし、いつかは別の世代がその実りを味わうことになるということを受け入れることです。このことは、フランシスコがサラセン人に初めて出会った時に望んでいたことではないでしょうか。

2. イタリアのプラートの兄弟共同体

「出会いの母マリア」という小さな兄弟共同体が、2003年から2006年までフィレンツェ郊外のジプシーのキャンプ内にできていました。

兄弟たち（大体2名から4名くらいの）がこのジプシーの共同体と共に「小さき兄弟」として暮らし、不安定な生活を分かち合っていて、彼らやすべての人と共に「小さき者」として関わることを心に誓っています。その兄弟たちは、何も特別な奉仕をしているわけでも、特別な「仕事」をしているわけでもありません。ジプシーの家族たちとの兄弟的な関係を大切にしながら、交わりと祈りの生活を送っているだけです。

その兄弟共同体は、敢えてシンプルなライフスタイルを維持し（車やテレビやパソコンを持たないようにし、住居は小屋付きのトレーラーです）、賃仕事や神から与えられたと思われる仕事をす

ることで生計を立てています。

また、その地域の小教区主任司祭（教区司祭）からの素晴らしい理解と協力が得られています。兄弟たちはその小教区のミサに毎日与り、ジプシーのキャンプ近くに住む低所得の高齢者たちを訪問しています。

2006年11月から、管区会議の決定により、その兄弟共同体は人口の20パーセント以上を移民が占めるプラートの町に引っ越しました。そこには有名な中国人共同体があり、2万人以上が正規の移民ですが、それ以外に不法滞在者たちも大勢います。また、東欧人やナイジェリア人、パキスタン人のグループも見過ごすことはできません。

中国人のほとんどは、工場の倉庫で過密状態で暮らしています。彼らは非人間的な労働条件で働き、大変気の毒なことに、多くの人々は奴隷のような暮らしを余儀なくされています。

このような環境の中で、兄弟共同体は隣人たちと同じような場所（中国人に交じって小さな倉庫用の建物）で生活することに決めました。兄弟たちは上に述べたような生活様式を守り、そのようにして、貧しい主イエスとの絶えざる深い交わりの体験を維持していることを示し、まず生活によって、次に言葉によって、イエスを証ししているのです。

3. 普通の兄弟共同体で小さき者として生きること

私たちの兄弟共同体は、フランスのリヨンの町に近い人口12万人のビュールバンヌ近郊に居を構えています。1996年、その共同体は新しいビルに囲まれた築100年位の古い建物の中に開設されました。

私たちが住んでいるリヨンの東部地区は、20世紀になってから、地域の産業化に伴い開発されたものです。私たちの地区に完全に同化した多くの家族はイタリアからの移民です。従って、ビュールバンヌは古くからの住民と新しい住民、低所得の人々と中流階級の人々が混在していることとなります。住民の特徴は、社会的流動性が高いことです。外国人（ヨーロッパ人、アフリカ人、アジア人、ラテンアメリカ人）を除けば、小教区の日曜日のミサに出席する人の数は少ないという現実を強調したいと思います。町の広場や大通りで、週に三回開かれる市場では、何でも見つけることができます。果物や野菜類の価格の安さは他のどこにも引けを取りませんし、衣類の多さはマグレブの市場を思わせるほどです。

私たちの住居は増改築し、聖堂と人々を受け入れるための部屋を設けました。共同体の66名の兄弟のうち、現役を退いた一人の兄弟は、常に在宅するようにし、あとの5名の兄弟は外に働きに出かけます（生活の糧を得るためには働かねばなりません）。それでも、隣人のためには、まだまだ為すべきことがたくさんありそうです。多くの人々は、問題を抱えていますし、孤独や暖かい人間関係の欠如に苦しんでいます。彼らには何らかの精神的な明

かりが必要です。たとえば、祈りや沈黙のひと時を他の人々と共に過ごすといったことです。お祝いのチャンスや、異なるグループとの交流を促すとか、異なる宗教間の対話を促進するチャンスなどたくさんあるはずです。人々はすれ違うだけで出会いがなく、そんな状態で時間が過ぎて行きます。私たちはこうした人々の熱意に応えたいと思います。

隣人たちのただなかに自分の身を置くにはどうすればよいでしょうか。人々を私たちの日々の祈り、特にミサに迎え入れます。また、乞われれば、食物を提供することもあります。ある兄弟たちは、洗礼志願者の指導をしたり、水曜日の夕方にミサを挙げたり、日曜日の「小教区の午後」にさまざまな活動を通して出会いを体験する場を提供したりして、小教区の生活の中で活発に働いています。また、他の兄弟たちは、人々の問題を扱い、近隣の居住者たちの集まりを促進する組合のような「ご近所委員会」に参加しています。こういった活動を始めて何年か経ちますが、今では、町を歩くと必ずと言ってよいほど、知り合いの人に出会い、立ち止まっておしゃべりをします。私たちは人々の傍に居たいし、すべての人を温かく迎え入れたいと思っています。私たちは、活動とか組織とか効率をあまり気にしていません。なぜなら、私たちの兄弟共同体それ自体が一つのしるしであると信じているからです。すべての小さき兄弟が知っている表現を使うならば、「兄弟共同体それ自体が福音宣教している」のです。

フランスの教会は政情が非常に不安な時代をくぐりぬけて来ましたので、キリスト教徒たちもそれに順応せざるを得ませんでし

た。兄弟たちは多くの歴史的な修道院から退去しなければなりませんでした。反聖職者主義は、教会の勝利主義を変えました。修道院内の生活は人々の生活とかけ離れているかのように見えました。兄弟たちは人々にもっと近づくために、パン生地のエーストとなるべく、小規模な共同体を人々の間に設けました。こうした試みは、本来的に、永続的なものではありません。そして、そうした試みは、引き起こした問題がなかったわけではありませんが、兄弟たちが人々の真ただ中で神の現存を証しする助けとなったのです。そしてまた、兄弟たちをより深い小ささへと導くことにより、兄弟たちが自らを福音化する助けともなりました。状況の変化は速く、文明化の危機は現代の私たちに対して深い疑問を投げかけています。それらは、たとえば、大衆の宗教離れとか、前例のない召命の減少とか、新興宗教やセクトの台頭などの形で現れます。際立った変化は認めなければなりません。同じようなことは、程度の差こそあれ、近隣諸国でも起こっています。フランスの教会はこのような体験を、それはある意味で思いがけない幸運でもあるのに、生かすことができずにいます。私たちは当然のことながら、奉仕の精神と教会の福音的な証しに与るように招かれていると感じています。そのような状況下で召命を生きているので、自分たちの未来にさらに世俗化した生活が待っているとは思っていません。それどころか、目に見えるシンプルな証しを立てたいと私たちは願っているのです。これこそ、私たちがビュールバンヌでやりたいと思っていることです。

III－実行

個人の養成のために

1. 各人は自分が会の指針に沿って生活しているか、また、どのように生活しているかを確かめることができます。
 - a. 「すべての兄弟たちは、自分を、旅する巡業の旅をする者と心得るべきです。もはや私たちの召命に一致せず、また今日の教会、及び人類の緊急な必要にも合致しない思想、行動、儀式や機構などいつでも捨て去ることができるようにしておくべきです。」（1997年～2003年の優先課題、P15）
 - b. 「すべての人に仕える者として、すべての人に従い、平和を愛する心の謙遜な者として、兄弟たちは、あらゆる形の原理主義を避け、互いを知り、受け入れ合うように努めなければなりません。」（2003年～2009年の優先課題、P26）
2. それぞれの兄弟がどのように小さき者として生きているかを確かめなさい。たとえば、貧しい人々にどのように接しているか、どのような社会階層の人たちと付き合いたいと思っているか、各人の「個人的な生活プラン」において小さきの側面はどのような位置を占めているか、小ささをそれぞれの生活や使徒職に導入し、発展させてゆくにはどうすればよいか、など。

兄弟共同体の集まりのために

A. 御言葉を祈りをこめて読むこと

「最も小さき人々」に仕える福音の精神を自分のものとし、イエスを自分の模範とするために、兄弟共同体は、次の福音書の箇所を祈りをこめて深く考えるとよい。マタイ 20:17-28。

B. 生活の見直し

修道院会議や静修日や研修会などで、「今、ここで」小さき者となるにはどうすればよいかについて、兄弟たちが深く考えると良いと思います。その際、次のような手順を踏んで行ってはどうでしょうか。

- 院長や担当者は、集まりの数日前にマタイによる福音書の25章をそれぞれが読んでおくように勧める。
- 集まりを始める時に、パウロのフィリピの信徒への手紙 2:5-11 の、キリストがご自分を無にされ、そのちに高く上げられたことについて書かれた箇所、あるいは、似たような箇所を読むと良いと思います。
- それから、だれかがフランシスコ会の資料の一つを読みます。
- 別の兄弟にこのテーマについて、考えたことや体験したこと、重要なポイントを思い出しながら、語ってもらいます。その他の兄弟たちは、考察を続け、自分が体験したことや現在体験していることについて話します。
- 次に、兄弟共同体は、会の指針をどのように受け止めたか

を検討します。

- a. 「管区は、最も困窮した人々と連帯して生きるために財産の所有権放棄を効果的にする具体的な方法を見つけるべきです。そうすれば、私たちの存在と私たちの持てるものを貧しい人々と分かち合うことができるでしょう。」
(1997年～2003年の優先課題、P15)
- b. 「すべての兄弟的共同体は年に一度、小さき者・清貧・連帯の生活に対して引き受けた関わりへの誠実さを評価判断すべきです。」(1997年～2003年の優先課題、P15)
- 兄弟共同体は、自分が小さき者であることを具体的に表現する新しい方法をどうやって取り戻すか、あるいは作り出すかについて考えると良いと思います。そうすれば、共同体が生活している場で意味のある証しを立てることができるでしょう。たとえば、地域の教会や使徒職の実践にあたって、「小さき者」であるにはどうすればよいか、共同体の「兄弟的な生活プラン」の中でどうやって小さき者であることを示すか、そして、どのような「優先的な選択」をし、それを実践することができるかについて自らに問うてみることです。
 - 集まりの終わりに、主からいただいた恵みに対する感謝の祈りを捧げると同時に、各人が自分の受けた恵みを分かち合い認める祈りを捧げると良いと思います。

C. 小さき者であることを示すしるし、またはジェスチャー

兄弟共同体が小さき者であることに忠実なことを示すしるしやジェスチャーが上記の生活の見直しや御言葉の奉読からあふれ

出ることが大切です。下記に二つの模範を例示します。

- 兄弟共同体の中や管区の中で、生涯養成のための時間を割くこと。それは、小さき者としての在り方を「再発見し」、それを具体的に実践する方法をさぐるためです。
- 管区の中で、「地域に根ざした共同体」を始めること。

D. 祈り

ラ・ベルナで聖痕を受けた聖フランシスコよ、
世界は、十字架に付けられたイエスの似姿であるあなたを切望
しています。

世界は、神と人類に向けられたあなたの心を、
あなたの傷ついた素足を、
刺し貫かれて、天に乞い求めるあなたの手を
必要としています。

世界は、あなたのか弱き声を、
しかし、福音の力によって強められた声を慕っています。
フランシスコよ、現代の人々を助けてください。

彼らが罪悪の害を認め、
悔い改めのうちにその害から清められるように。
彼らが、現代社会を苦しめる罪の構造から
逃れることができるように、助けてください。

国を治める人々の意識を目覚めさせ、
国家間と民族間の平和が緊急に必要であることを
悟らせてください。

若者たちに、あなたの命への憧れを燃え立たせてください。
彼らが、死の文化の畏にはまらないように、

助けてください。

あらゆる種類の悪意によって傷ついた人々に、

フランシスコよ、

ゆるすことを知るあなたの喜びを教えてください。

苦悩や飢えや戦争によって十字架に付けられている人々に、

再び希望の扉を開けてください。

アーメン。

(ヨハネ・パウロ 2 世、聖フランシスコへの祈り、1993 年 9 月
17 日、ラ・ベルナの聖痕の聖堂にて)

IV—更なる考察のために

聖書から

1. (24)また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。(25)そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。(26)しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者ようになり、上に立つ人は、仕える者ようになりなさい。(27)食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。(ルカ 22:24-27)

2. (12)さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。(13)あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。【新約・195 頁】(14)ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。(15)わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。(ヨハネ 13:12-15)

3. (5)互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。(6)キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、(7)かえって自

分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、(8)へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。(9)このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(フィリピ2:5-9)

教会の公文書から

1. 互いの足を洗い合うことは、自分を与える愛の生き方を示しています。

「イエスは、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。・・・イエスは立ち上がって、・・・弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた(ヨハネ 13:1-2, 4-5)。弟子たちの足を洗うことによって、イエスは人類に対する神の深い愛を明らかにしました。イエスにおいて、神は御自分を人類に奉仕するものとしたのです。同時に、神はキリスト者の生活の意味を明らかにし、さらには奉獻生活の意味を明らかにして奉獻生活が自分を与える**愛の生き方**であり、実際の思いやりのある奉仕の生活であることを示しました。「仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マタイ 20:28) 人の子に従う生き方において、奉獻生活は、少なくともその長い歴史のほとんどの時代を通じて、この「足を洗うこと」によって、すなわち、とくにもっとも貧しく困窮している人々への奉仕にその特徴がありました。奉獻生活が、一方で御父の懐にある御言葉(ヨハネ 1:1 参照)の崇高な神秘を観想するものであるなら、それは他方で、自らを低くして、他者に仕えるためにへりくだって肉となった御言葉(ヨハネ 1:14 参照)に従うことです。今日もなお福音的勧告

の道を歩んでキリストに従う人々は、キリストが赴いたところに行き、キリストが行ったことを行おうと努めています（奉献生活75）。

2. 自分自身を小さくすることは、キリスト者としての成熟の証しです。

現代文化においては、大人であるということは、完全に自由であることと同義のように思われます。現代人にとっては、大人は他人から独立しており、何かに対処したり、何かを作ったりするのに誰にも縛られず、誰の力も必要としません。大人であるということは、伝統や啓示から脱却する理由でもあります。大人は、あらゆる規定を越えて、自分だけの判断力で物事を決めたいという願いを持っています。

しかし、福音書に見られる態度はこれとは違います。福音書的な考え方で、大人であるということ、つまり、偉大であるということは、自律とか生産能力で測られるものではありません。むしろ、大人度は、**自分自身を小さくすること**、そして、すべての人の**僕**となることによって測られます。もっとも偉大な人とは、もっとも小さき人であり、あなた方の中でもっとも偉大な人になりたければ、あなた方の僕とならなければなりません。小さき者となることと僕となることというこの二つのイメージの中にこそ、キリスト者としての成熟の基本があります。それは、父なる神に全幅の信頼を置き、神の御言葉と、兄弟姉妹である人々の要求に完全に心を開くことなのです。それはまた、「見よ、わたしはあなた方を遣わす」と私たちに語りかける声に耳を傾けることがない

ならば、私たちの生き方は不完全であるとする態度でもあります。それは、神から来る愛の完全な表現としての他者への完全な奉獻を意味しています。

消極的な生き方が受け入れられていると思われる社会では、イエスのご提案のラジカリズムは、魅力的で大きな挑戦と受け取られています。このラジカリズムは私たちに、自分に対して全面的に責任を持つことを求め、御父と兄弟姉妹の人々に完全に自分を捧げることを求めています。私たちは、個人としてまた共同体としての存在の基盤を、有限で当てにならない人間の努力にではなく、聖霊の無限の豊かさに置くように求められているのです（ヨハネ・パウロ2世、1992年7月14日の第35回イタリア司教協議会総会での講話）。

3. フランシスカンの小さな小ささ

小さき者であるためには、開かれた心が必要であり、寛大で、謙遜で、優しく、単純でなければなりません。イエスはこれらの態度を勧められ、フランシスコはそのように生きました。こうした態度を身につけるためには、完全に無私無欲であることと、神と兄弟姉妹に対して完全に心を開くことが必要です。本当に小さき者として生きるということは、武力に頼らず、しかも相手の敵意を取り除くような力を、教会と世界において霊的な形で持っていることです。そして、それだけではありません。本当の小ささは、心を解放し、その心を兄弟的な愛に対して開くのです。兄弟的な愛はますます本物となって行きます。本当の小ささは、外に

向かって開かれ、多様な典型的行動様式の中で示されます。たとえば、単純さと誠実さ、自発性と具体性、謙遜さと喜び、無私無欲と率直さ、親しみと奉仕といった態度で特徴づけられた行動様式を育み、それは、すべての人、特にもっとも小さい、もっとも困窮している人々に対して示されます(ヨハネ・パウロ 2 世、2003 年 10 月 29 日のイタリア・カプチン会の幕屋の集會に寄せられたメッセージ)。

フランシスコ会の資料から

1. 小さき兄弟会

「彼は会則の中で、『彼らは小さい兄弟でなければならない』と書き、そしてこの言葉が語られた時、同じように彼は、『この兄弟の集まりは、小さき兄弟会と呼ばれるべきである』と言っております。事実、彼らは小さい兄弟でした。つまり、どんな人にも服従し、いつも低い地位に留まろうとし、また面倒な仕事に取り組むことで、自分たちが真の謙遜の土台となるにふさわしい者となり、その実り豊かな計らいを通して己の中にあらゆる善徳の靈的建物を築こうとしたのです。」(1 チェラ 38)

「・・・祝福されたフランシスコは司教(オスチアの枢機卿)に言った。『司教様、私の兄弟たちは、ちょうど自分たちが偉い者だと思わないように、“小さき者”と呼ばれているのであります。このような召命によって、彼らは、いつも低い所にとどまり、謙遜なキリストのみ跡に従うことを教えられています。それによって“聖人たちの前では”、他の者よりも高く見られるでしょう。司

教様、もしも彼らが教会においてよき実を結ぶことをお望みならば、彼らをその召し出しに従って置かれた地位に、そのままとどまるようにしてください。また、それを望まない兄弟がいれば、その低い所に戻るようにしてください。司教様、わが師父よ、どうか、兄弟たちが、その貧しさを忘れ、高ぶって、他人を見下ろすことがないように、彼らに聖職の高位に上げられることを、お許しにならないようお願いいたします。』（2 チェラ 148）

2. ご自分を空しくされた主を観想し、主に倣うこと

「だれも院長 (prior) と呼ばれてはならない。皆おしなべて小さき者と呼ばれるべきである。そして互いに足を洗い合わねばならない。」(未裁可会則 6, 3)

「すべての兄弟は、私たちの主イエス・キリストの謙遜と清貧につき従うよう努め、…卑しくて見捨てられている人々の間や、貧しくて体の不自由な人々、病人、ハンセン病者、道ばたで物乞いする人々の間で生活する時、喜ぶべきである。必要なら、施しを乞いに出なければならない。そしてこれを恥じることなく、むしろ、全能の生ける神の子、私たちの主イエス・キリストが顔を硬い石のようにして、恥じられなかったことを思い出さねばならない。」(未裁可会則 9, 1-4)

3. 派遣されて宣教する使命に生きる小さき者

「私は主イエス・キリストにおいて忠告し、戒め、勧める。兄弟たちはこの世をめぐる時、争ったり、口論したり、他人を裁いたりせず、小さき者にふさわしく、柔和で、平和をもたらし、慎

み深く、温和、謙遜であり、すべての人に対して、礼儀正しい言葉を用いて話すようにと。また、差し迫った必要や病気のために、そうせざるを得ない場合を除いて、馬に乗ってはならない。」(裁可会則 3, 10-12)

4. 小さき者の持つ主の霊

「神のしもべが主の霊を持っているかどうかを、次のようにして知ることができます。主がそのしもべを用いて何かの善をなされた時、彼の肉がそれを誇らず、一というのは、肉はあらゆる善に逆らうものだからです。かえって、彼の目に、自分がますますつまらない者に映り、他のすべての人より小さい者と思うなら、主の霊を持っています。」(訓戒の言葉 12)

「しかし、過失や罪が犯される事柄においては、だれもどんな人にも従順によって従うべきではありません。従順によって命じる権能がゆだねられている人や、一番偉い者とみなされている人は、一番年の若い者のようになり、他の兄弟たちのしもべとなるべきです。自分が同じような状態にいるなら、自分にしてもらいたいと望むはずの憐みを、各々の兄弟に行い、抱かなければなりません。」(全キリスト者の手紙 II, 41-43)

5. 小ささに背く誘惑

小さき兄弟であるあなた方は、もう微笑んではいけません。なぜなら、涙こそが今やふさわしいからです。あなた方の生活はその名前と一致していなければなりません。小さいというのがあなた方の名前なのですから、それを行動にも反映させてください。

困難には元気に耐えてください。忍耐が傲慢さに打ち克つことができますように。まことに、心こそは臆病を懲らしめ、忍耐こそは不純なものを浄化します。だれかがあなたを正そうとするなら、その人のことを守護者と考えなさい。その人は、あなたを憎んでいるのではなく、あなたの犯す悪を憎んでいるのです。このように粗末な衣服を纏い、豚にふさわしいような食物と寝床を用いている自分のことを、あなたは何者と考えているのですか。ハビットを着ることによって、言っていることと行いが矛盾しているなら、あなたはすべてを失ってしまいます。あなたは小さき兄弟の影にすぎず、兄弟とは名ばかりで、行動が伴っていないからです。（エクレストンのトマスが書いた「イギリスにやって来た小さき兄弟たち」37の中のパーフォードの兄弟ヘンリーの言葉）

小さき者であるための生涯養成

1. 小ささは神との関係においてもまたフラテルニタス内部、あるいは他者との関係においても、私たちの兄弟としての生活の特徴づける。生涯養成と初期養成は、兄弟や入会志望者たちを、彼らが『喜びと朗らかさをもって』すべての人に仕え、平和を愛する心の謙遜な者として世界に出て行く」ように養成すべきである（養成綱領 77）。
2. フランシスコは、完全に福音を守ることを渴望した。「受肉の謙遜と受難の愛は、彼の記憶をほとんど独り占めし、他のことなど考えようとは思わないほどでした」。生活に対するフランシスコの解釈は、謙遜で貧しく十字架にかけられたイエス

の自己を無にした姿に完全に染まっていた。その結果、フランシスコは小さき者になること、更にもっと取るに足らぬ者になることを望んだ。そしてフランシスコは兄弟たちが「小さき者」と呼ばれ、真にそうなることを望んだ。

小さき者になることは、貧しく十字架にかけられたキリストの姿にかたどられ、そして段々に自己を脱ぎ捨てることで、どんどん小さき者になり、そうすることで、もともと神のものであるすべての良きものを神に返すことである。

私たちの特別の召命は、小さき者になることである。しかし誰も今でかつて決定的に「小さき者」になった者はいない。私たちは「常に自分を捨て、神への絶えざる回心において」「すべての人のしもべおよび臣下」となって、最も貧しい生活状態を共にし、「常に彼らの間で小さき者として生きる」ことで、毎日を過ごすよう努めている。

兄弟は、「ますます小さき者」へとなる道程を前進するために、常に「変わらない聖性への憧れ」を維持するために、忍耐、内なる平和、靈的喜びを持つ必要がある（「小さき兄弟会における生涯養成」34）。

2 正義と平和の推進者

会憲

第 68 条 (1) 兄弟たちは、善を行うことによって悪に打ち勝ち²、この世界で正義の擁護者、平和の先駆者および働き人¹として生きる。

(2) 口で平和を告げ知らせ、心にはより深い平和を保って、兄弟たちは、誰も怒らせたり、憤慨させたりせず、かえって自分たちを通して、すべての人に平和、柔和さ、優しさを取り戻させる³。

第 69 条 (1) 抑圧された人々の権利を擁護するに当たって、兄弟たちは、暴力的行為を斥け、より弱い者にも使えるその他の手段に訴える¹。

(2) 人類を脅かす大きな危険をも認識して、兄弟たちは、あらゆる形での戦争行為および軍備競争が、世界にとって最悪の災難であり、貧しい人々に最大の痛手を負わすものとして、強く非難する²。そして労苦をいとわず、平和な神の国を築くために働く³。

第 70 条 自分が選んだ清貧によってあらゆる恐れから解放され、神の約束に基づく希望を抱いて喜びのうちに生き¹、人々の間に 相互の受容と好意を推し広めつつ、兄弟たちは、イエス・キリストの十字架によってもたらされた和解の道具となる。

I- 考察のために

フランシスコ自身、「遺言」の中でこう述べています。「主は私に平和の挨拶の言葉を啓示してくださいました。私たちはこう言うべきです。『主があなたに平和を与えてくださいますように』¹⁰ フランシスコの生涯について書かれた重要な伝記のすべては、これらがフランシスコ自身の言葉であると言明しています。それらの伝記を読むと、兄弟たちが当初から、さまざまな形でこの挨拶をどのように用いてきたかがわかります。¹¹ 「アシジ編纂（ペルーシア伝）」と「完全の鑑」は、平和の挨拶の啓示と「小さき兄弟会」という会の名称に関する啓示とを一つに結びつけています。¹² その結果、これらの原典によると、名称と平和の挨拶が与えられることによって、兄弟たちがフランシスコの周りに集まることは一つの運動となったのです。このことを心に留めて考えると、次の四つの要素がフランシスコとその兄弟たちの自分自身に対する見方を特徴づけたのではないかと思えます。つまり、小ささ、悔い改めの生活、兄弟としての共同生活、そして平和の挨拶です。初期の兄弟会が本当の意味で新しいと言えたのは、その小ささだけでなく、その小ささが平和の挨拶と結びついていたことによるものです。この挨拶は、兄弟たちが世を巡り、あらゆる争いを避けるために必要な平和的で非暴力の手段を与えてくれていま

¹⁰ 「遺言」23。平和の問題については、H. Von der Bey の”Der Herr gebe Dir den Frieden”:Eine franziskanische Friedenstheologie, DCV, Werl, 1990 を参照。

¹¹ 「三人の仲間」26、AC101、「大伝記」III,2、「完全の鑑」26 参照。

¹² AC67、「完全の鑑」26。

す。¹³創立当初から、フランシスカンとなる召し出しには、正義の追及が含まれていました。兄弟たちは平和を告げ知らせ、促進しました。善い行いをすることによって、兄弟たちはいつでも、戦争という悪や、多様な形態の搾取と排斥、破壊と抑圧に対抗しました。¹⁴戦争やテロ、社会的な不正と飢饉に悩まされている現代の世界においては、私たち小さき兄弟は、行動を伴う平和を訴えて行かねばなりません。

1. 和解という賜物

平和の働き手としての私たちの使命は、私たちの心の平和から来るものです。その土台となっているのは、ゆるしと憐みと寛大さの実体験です。自分がゆるされ、憐れみをかけられ、惜しみなく与えられる体験をしたことによって、私たちは自由になり、同じような行動をとることができるようになりました。敵対心や苦悩に満ちた環境の中で、非暴力で友好的なやり方で正義を追及して行く力を、私たちは体験から身につけるのです。まず手始めに、怒りや憎しみ、嫉妬心、偏見、悪意に満ちた固定観念を自分の心から取り払わなければなりません。私たちはそうした否定的な感情を抱きがちで、失望したり、傷ついたりした時に、そうした感情に支配されることがしばしばあります。私たちはそうした否定的な感情の原因を突き止め、自分自身を癒してこそ、人をゆるすことができ、自分自身の中に、そして、日々の生活環境の中に平和をもたらすことができるのです。そうして、兄弟姉妹に対する

¹³ 未裁可会則 11、14、未裁可会則 3,10-13 参照。

¹⁴ 会憲 68,1、2 チェラ 108、AC84、LFI XI 参照。

怒りや恨みの心を癒し、解放することができた時に初めて、善を行う力を自分の中に蓄えることができます。¹⁵私たちはまず自分自身の心の中で和解を体験する必要があります。

ここで、観想と平和的な生き方の間には深いつながりがあることが分かります。フランシスカンの観想が中心とするのは、御子を通してこの世と和解された神です。イエス・キリストによってすべての被造物が救われるようにというのが神の御意志なのです。イエス・キリストは、神の救いをこの世にもたらし、すべてを新しくするために、自らを犠牲にする愛を告げ知らせ、生き抜かれました。惜しみなく与えられた神の救いの賜物は、私たちを罪から解放してくれるだけでなく、贖われた世界の平和と神の国の正義というものをもたらししてくれるのです。観想することによって、私たちは神の救いを少しずつ理解し、すでにこの世で、キリストに従うように導かれ、神の国の平和と正義のために働きます。

「平和とすべての善」というフランシスカンの挨拶は、平和と神が私たちに与えてくださった救いとをはっきりと結びつけています。¹⁶ 平和と神の救いの賜物は、観想と祈りを通してもたらされ、それが、日々の活動へとつながって行くのです。そういう意味で、観想と祈りは、政治活動や社会活動とも緊密なつながりがあります。武器の販売や軍事作戦、資源開発が結局は人々の貧困

¹⁵ 会憲 68,2 参照。

¹⁶ ドイツ語では、これを”Friede und Heil”と言い、平和と救いという意味です。この表現の裏には、ラテン語の”Pax et Bonum”、すなわち、平和と善があります。

化を招くことに気づいた人は、修道院の中でただひたすら靈的に祈るだけの信心深い生活には満足できません。彼は福音書の教えに注意を払わなければなりません。それは、デモに参加したり、公に宣言したり、非暴力の抗議行動をとることによって可能です。彼はその抗議の意思を、日々の生活の中で素朴な形で、貧困に苦しみ助けを求めてくる人々に手を差し伸べることによって、何度も何度も表明するのです。彼の抗議は具体的な愛のしるしとなります。

2. 積極的な平和づくり

私たちは施しや慈善的援助で満足してはなりません。自分の置かれた社会環境、国、地域の中で、不正な構造を勇氣をもって排除するために、真剣に働く義務があります。だからこそ、世界の紛争地域で生活し、耐えている兄弟や人々に連帯感をもって手を差し伸べるのが特に必要なのです。主の霊とその聖なる働きを持つ時に初めて、私たちはいかなる侵略行為もせず、力に頼ることもせずに働くことができます。¹⁷主の霊とその聖なる働きは、悪を克服し、むしろ敵をも愛するようにと私たちを導きます。敵をも抱きしめるこの愛を、ただひたすら我慢するとか、気乗りはしないけど従うといった受身の姿勢と混同してはなりません。むしろ、主の霊は積極的に、しかし力に頼ることなく言葉と行いによって、頭をもたげた悪と戦うように私たちを励ましてくださいます。私たちは悪それ自体と力で戦って、エネルギーを消耗するようなことはしません。そうではなく、イエスの霊に満たされて、

¹⁷ 未裁可会則 10,8-12 参照。

悪をそこから追い払い、善を行うことにより、また、異なる行動をとることにより、悪を超えるのです。¹⁸その過程において、聖霊は、和解に基づくまことの平和と正義を促進するような預言的な言葉と行動を生み出してくれます。そのような預言的なしるしは、私たちの日々の生活習慣を乱し、預言的な傾向をもった兄弟を仲間の間でトラブルメーカーと考える一因となりがちです。しかし、彼らこそは、私たちの特別な支えを必要としているのです。そうすることによって、私たちは平和をもたらすという務めを果たすことができるでしょう。¹⁹

フランシスカンの平和の概念は、社会政治的なことや、特定の政党の利益に対して関心がありません。フランシスカンの平和は、その土台を聖書的な平和に置き、謙遜で忍耐強くあられたイエス・キリストの生き方からヒントを得ています。私たちは、仕えるために来られ、そしてご自分の命を人類のために渡してくださった主と共に歩む人として、平和と正義を追及するのです。²⁰力に訴えないということは必ずしも容易なことではないことはよく分かります。不正な状況というものは往々にして極めて非道であり、それに対して本能的に力で対抗したいとの思いを抱かせるからです。しかし、暴力や争いの連鎖を断ち切ることのできる本当の力は、見たところは無防備で非武装の、いつでも助けようとする愛にあるのです。力に対して力で対抗することは、短期的に見れば悪を制し、悪を働いた人を罰する効果があるかもしれませんが。

¹⁸ 未裁可会則 16,10-20 参照。

¹⁹ 1 チェラ 24、この中でチェラノのトマスは、「平和の使節」(pacia legationem) について述べている。

²⁰ マタイ 5:9、訓戒の言葉 13,15 参照。

しかし、それによっては、人々が互いに相手を尊重しながら、平和に生きるための土台がつくられることは決してないのです。だからこそ、私たち小さき兄弟は、自分で自分を守ることでできない人々と共に、積極的な非暴力の姿勢を貫くのです。²¹そうすることによって、私たちは、更なる不正を誘発するにすぎないいかなる手段に訴えることも避けることができます。だからといって、手をこまねいて、悪に屈するわけではありません。むしろ、未来の神の国の人間的な価値を自らの指針として受け入れながら、新しい世界を証しするような行動を起こすのです。そうして、開いた傷口を癒し、真理が語られるのを聞き、正しい秩序が再びもたらされるように努めます。あらゆる種類の傷が癒され、真理による支援が公然となされ、行われた不正に対して良心が責任を負うようにならない限り、永続的な平和はないからです。それから、すべての当事者間の和解の上に平和を築きます。しばしば見られることですが、不正が行われたのに平和のために敗北を受け入れざるを得なかった人々の側に立つ時でさえ、私たち小さき兄弟は、論争中の当事者の間に立って調停する任務を持っています。会の歴史の中で度々繰り返された平和の調停は、小さき兄弟たちの最も崇高な任務の一つです。調停者の役割は、傍観者として中立を保つということではありません。調停者は、行われた不正を突き止め、告発し、不和の原因を明らかにしなければなりません。調停者は明らかにプロセスに関わっているのです。²²その間ずっと、彼は不正に加担した側に、不正から手を引く道を開き示さなくてはなりません。非暴力の庇護のもとにあってこそ、そのような調

²¹ 会憲 69,1 参照。

²² 会憲 69,2 参照。

停者の役割を果たすことができます。

私たちは、不正と不和や紛争の原因を告発するというフランシスカンの伝統に導かれています。平和を調停し、正しい秩序を回復するという私たちの責務はそこから来るのです²³。そのような任務を、私たちのフランシスカンとしての生活を成り立たせる他の多くの要素の一部として引き受けることはいたしません。それは、世界の貧しい人々、疎外された人々、戦争の犠牲者、飢えに苦しむ人々の側に立つことこそ、小さき兄弟としての私たちの生き方であると考えているからです。私たちは声を大にして、彼らのために訴え、正義の世界をもたらすことを願って、平和と希望と新たな未来を実現するために力を尽くします。兄弟は、自分の生活をこの世の苦しむ人々の中におられるイエスのご生活にしっかりと重ね合わせることによって、今日のキリストのご生活とご受難に与ることができます。今日のグローバル化によって、ますます多くの人々が貧困に陥っています。彼らは、多国籍企業のせいで仕事を奪われ、尊厳まで失っています。国の富が一握りの優遇された人々に搾取されているために、大勢の人々が疎外され、死に追いやられています。原理主義者の怒りが、神の名のもとに戦争を引き起こし、憎しみを誘発し、全世界を更なる危機に追い詰めているために、多くの人々が殺されています。このような混乱状態を調べるにつれ、私たち兄弟は、こうした不運な人々のためにただ祈るだけでは満足できません。私たちは祈りから、召命による正しい行いを実行する力を引き出し、可能な限り彼らを急いで助けなければなりません。なぜなら、キリストが彼ら一人一

²³ 小さき花 21 参照。

人の中で苦しんでおられるからです。そのような荒廃した状態を目にしながら沈黙し、事態の解決を神お独りに任せて傍観してはなりません。神は御子イエスがなされたような行動をとることを、私たちに求めておられます。このような場合、私たちの靈性は政治的なものとなります。私たちには靈的生活、観想、祈りが与えられているのですから、言葉の本当の意味で、私たちの取るべき態度は主の靈に導かれているのです。福音に基づいて、私たちが声を大にして語っている正義とは、不運な人々にかろうじての生存を約束するだけではなく、人間としての尊厳ある生活、あらゆる脅威からの解放をも約束するものです。そのような正義があつてこそ、平和をもたらず助けとなることができます。そのような状況になれば、だれも失うことも、抑圧に苦しむこともなくなります。むしろ、すべての人が同等の権利と責任を持つパートナーとなるでしょう。なぜなら、平和とは、対立や戦争のない状態のことではなく、他者をありのままにしかも快く受け入れて、その人に共通の未来のために意見を述べる場と生活する場を提供する確固たる態度のことだからです。

そのような生活態度こそ、私たち小さき兄弟に求められていることです。それを実現するにあたっては、何らかの形で服従しなければならぬこともしばしばあります。このような形で平和と正義のために働く人は、防御を緩め、自分自身が弱き者となるのです。彼は多くのものを危険にさらし、ある人々はその命さえも賭けます。そのような場合、その人は聖書に記されたようなキリストの苦しみに本当の意味で与ることになります。そのような奉獻と苦しみは、福音的な結末として、未来の神の国で 100 倍もの

実を結ぶでしょう。

3. 清貧と単純さ：平和の基本

正義と平和の問題に関して、単純さと清貧ということが、神の国を垣間見させる、新しい世界の預言的なしるしとなります。フランシスカンの生き方である清貧と単純さは、この場合、富や所有物、権力の放棄というよりはむしろ、貧しく謙遜であられたキリストの足跡を辿る生き方であり、それは、自由と独立の一つの形であって、私たちにこの世で福音を告げ知らせるメッセンジャーとして働かせてくれます。自由の基本としての清貧と単純さには様々なレベルがあります。たとえば、所有物を持たずに行動する清貧は、自分の財産を他者から守る必要から解放してくれます。また、社会的身分を持たず、特権を拒絶する清貧は、地位や肩書や名声を失う恐怖から私たちを解放してくれます。私たちは物質的あるいは精神的な所有物に頼るのではなく、神の御言葉に信頼するのです。私たちの生き方である清貧と単純さは、私たちを小さき兄弟として恐れから解放してくれます。私たちには失う物がないからです。私たちは自分が何者で、何を持っているかを心配する必要がないのです。²⁴自分自身のことや、自分の物質的あるいは精神的な所有物を守るために戦う必要がないので、私たちのフランシスカン的な生き方は、福音的な価値のために権力者や支配者やすべての人に対して勇敢に立ち向かうだけのエネルギーを与えてくれます。清貧と単純な生き方によって、ものにしがみつく危険を避けることができ、すべての人を尊敬し受け入れること

²⁴ 会憲 70 参照。

ができるようなあの自由とゆとりが生まれます。財産や地位や名声や特権を失う恐れから私たちを振りほどくことによって、清貧は十字架に付けられたイエス・キリストの御名において和解を追究するゆとりと確信を与えてくれます。その自由があるからこそ、私たち小さき兄弟は、人々の良心に訴え、彼らに変革を促し、他者に手を差し伸べるように、そして、互いを暖かく受け入れるようにと促すことができます。このような自由なくしては、そしてそのような預言的な和解の奉仕なくしては、私たちの語る清貧は、単なる偏狭な禁欲主義にすぎぬものとなり、現実の生活とかけ離れたものになってしまうでしょう。

従って、フランシスカンの清貧の表現として、より単純な生活様式を求める場合は、その結果生まれる自由をどのように和解の奉仕のために生かすことができるかを自らに問うてみる必要があります。私たちは、不和と争いの真の根をはっきり糾弾し、告発することによって、そのような自由を和解のために生かすことができます。そして、紛争という開いた傷口を癒すために働くことができます。私たちはいつでも自由に、間違いを犯した人にゆるしと憐みを差し出すのです。ということは、すなわち、まず、対立する者同士を互いに話し合いのテーブルに着かせ、行われた害悪について議論し、共に難局を打開する道を探らせるということです。その手助けをするにあたっては、偏見と性急な非難合戦が起こらないように配慮します。その間中、共通の未来に平和がもたらされる可能性を常に開いておきます。私たちがそのような困難な和解のために働くことができ、また、それに必要なエネルギーを得ることができるのは、十字架上で愛のために御自分を捧

げられたイエス・キリストによって、神からすべてをいただいているからです。

II-体験の分かち合い

正義と平和に関するこの部分で紹介した体験は、三つの特別な背景を持っています。一つ目は民族紛争の体験、二つ目はアパルトヘイトの問題、三つ目は貧しく疎外された「土地を持たない人々」に対する不正の問題です。これら三つの問題は、不正と残虐な暴力と社会的あるいは家族間、個人間の「分断」の状況をはっきりと示しています。これらの出来事に関わっている兄弟たちは、平和が和解とゆるしと正義と連帯の賜物であることを証しするのです。どの現実も非常に複雑なので、これを証しするのは容易なことではありません。平和と和解を樹立するためには、紛争の原因と行われた不正と当事者全員の責任をしっかりと見据えなければなりません。当事者双方の新しい関係を築くためには、まず傷の手当をし、教育上健全で、福音の教えに基づく方法を見つける必要があります。その方法がさらに求めていること、それは、犠牲者と加害者の双方が復讐の論理や暴力による解決を乗り越える決意をすることです。これから、私たちは、兄弟たちが単独で行動したのではなく、他の組織や善意の人々（新たな社会秩序を打ち立てようとする人々をも含めて）とどのように協力して働いたかを見て行こうと思います。

兄弟たちは私たちの霊性と、フランシスコと最初の仲間たちの模範と、フランシスカンの伝統という遺産に忠実でした。平和の

挨拶が主によってフランシスコに示されたという事実は、平和の証し人、使者、作り手となるようにと私たちを励ましてくれます。生き方と説教を通して平和を告げ知らせること、平和の挨拶を人々に投げかけること、平和と和解をもたらすために個々の紛争に介入することは、創立当初からフランシスカン運動の特徴です。この特徴は、会の伝統の中で維持され、刷新されてきました。

現代では、どこでも、何らかの軋轢や不正や暴力を抱えていますし、社会階層の間や民族間や家族間、個人の間にも何らかの社会的分裂が生じています。私たちは、自分の召命とミッションに対して創造的な忠実さを保ちながら、どこにいても、平和と和解と正義の証し人、先駆者、働き手となることができますし、また、そうでなくてはなりません。

1. ルワンダでの和解

1994年にルワンダで起きた大量虐殺では、100万人以上もの人々が犠牲になりました。その中には、私の父と兄弟とかなりたくさんのお親戚と、多くの友人隣人たちがいます。私たちの家と所有物はすべて破壊しつくされました。私はその時すでに修道会に入っていましたので、大量虐殺のさなかに他の兄弟たちと共に国外に逃げました。父や兄弟が死んだことを知っていたので、私の心は決して平和ではありませんでした。

大量虐殺の翌年1995年の7月に、私は惨劇の状況を体験するためにルワンダに戻りました。それはとても辛い体験でした。

私はかつて住んでいた場所に行ってみました。そこにはむき出しの地面しかなく、あるのはただ父が掘った井戸だけでした。私が初めて戻ったとき、村の人々は私に近づこうとしませんでした。私が復讐のために軍隊を引き連れて戻ってきたと恐れたからです（復讐の時だったのです）。私には彼らに会って話し、私が復讐を求めているのではないこと、殺戮を犯した人たちに会いたいのだということを彼らに分からせる必要がありました。殺戮者のうち一部の人々はすでに投獄されていましたし、また別の人々は姿をくらましていました。私は牢獄に彼らを訪ねる許可を求めました。彼らの中のある人々はかつては「友人」でした。中には自分の犯罪を認めない人もいましたが、私は彼らに、「あなた方は大きな罪を犯したのだよ、だから、回心して、まず神とそして生き残った人々と和解する必要があるのだよ」と言いました。そして、私としては彼らの罪をゆるしたいと伝えました。その後、私は父のために葬儀のミサを捧げ、その中で、私の家族にひどい仕打ちをした人々をゆるすと言いました。

しかし、その頃いたるところに、私たちのキリスト者共同体の中にさえ、憎しみと復讐の感情が再燃する兆しがありました。そこで見つけた解決策の一つが、異なった民族グループが集まって率直に語り合える小さな組織をつくることでした。こうしてできたのが、大量虐殺によって未亡人になった女性と、殺戮に手を貸したかどで投獄された夫を持つ女性たちの集まりでした。最初のうちは、集まりは困難でした。しかし、回を重ねるうちに、少しずつゆるしと和解の道に向かう方法を見つけることができました。

私たちフランシスカン家族の共同体の中には、事態が深刻すぎて、異なった民族グループと一緒に暮らせない場合もありました。そのために、私たちは会合を開いて、各参加者に虐殺の体験や、受け入れるのが難しいと思っていることについて語るように促し、最終的に一緒に暮らせるようになったのです。それだけでなく、最後を平和と和解の行進で締めくくる年次集会まで発足させることができたのです。2004年に政府が各地区に人民裁判所を設立して以来、そこですべての人々が大量虐殺について知っていることを話すように勧められています。この過程では大きな恐怖感が生まれ、和解にいたる道がしばしふさがれたようにも思われま
す。私たちはこの危機を乗り越える適切な方法を探さなくてはなりません。

2. 南アフリカにおける真実と和解

1984年から解放運動の解禁と最初の民主的選挙に至るまでの期間（選挙後の期間も含めて）は、不信と憎しみとひどい暴力と残虐さと殺戮に満ちていました。そうした傾向は監視体制をとっていたP・W・ボタ元大統領の抑圧政策によって助長されました。

政府は、最終的に国際共同体や諸教会、公民権を持たない貧しい人々の集団からの圧力に屈する前は、あらゆる政敵に対抗する大規模な運動を展開していました。治安部隊を使い、民族自決を理由にして、黒人同士の暴力を扇動していたのです。政府が「分割統治」の原則を貫いていたので、抑圧された人たちの間にすら、

疑念と不信感が高まっていました。

実際この期間には、大規模な抗議活動と流血とタイヤを首にはめて燃やすリンチと殺りくが繰り返されていました。黒人居住区では、犬でさえ、治安部隊を恐れて吠えることができませんでした。そんな中でも、怒りと殉教者精神と愛国心は築かれていったのです。そこには、黒人による政権奪還の考えをはねつけ、黒人同士でさえ敵になり得るということを示すねらいがありました。

しかし、新しい政治状況が展開し始めました。アフリカ民族会議が解禁となり、様々な交渉が行われ、ネルソン・マンデラ氏の指導の下に、統一政府を樹立する構想が生まれたのです。パラダイムシフト（枠組みの転換）を起こすことが絶対に必要であり、新しい政治用語が生まれる必要さえありました。このような状況下で、問題となったのは、どうやって抑圧された人々と抑圧した人々を同じテーブルに着かせるかということでした。そのために、「真実と和解のための委員会」が生まれたのです。

道のりはゆっくりとして長く、つらいものでした。それは、ある人々にとっては無駄な体操でしたが、他の人々にとっては、必要な治療体操でした。被害者に、加害者と対面して話し合う場が提供されました。ある人々にとっては、この道のりは、愛する人々の運命をつぶさに聞き、彼らがどこにどのように葬られたのかを知ることによって、過去の辛い体験を綴った本を閉じるチャンスとなりました。また、別の人々にとっては、「真実と和解のための委員会」は、アフリカの人々の体験をあざ笑うものにすぎず、黒

人居住区での残虐さと嫌がらせと大量殺戮の本当の首謀者たちは一度として委員会の前に姿を現すことはありませんでした。中には、P・W・ボタやウルター・バッソン博士のように、委員会を自国民を裏切るものだとして、最後まで無視する人々もいました。

諸教会はフランシスコ会も含めて、「真実と和解のための委員会」が用意したこの癒しのプロセスに与るようにと人々を促しました。教会の内外から、多くの支援団体が生まれました。「過去を認め、すべての人にとって新しい出発を」という言葉で、空気は満たされていました。

国中の多くの教会が、南アフリカのあらゆる異なった民族グループにとって、希望の光、思いやりと理解とゆるしと和解のしるしとなりました。オブレート会が世話しているソウェトのレジーナ・ムンディ・カトリック教会、およびフランシスコ会が世話しているニョロヘロのエバトンにある聖フランシスコ・ザビエル教会とヴァール・トリアングルにあるエンマヌエル・カトリック教会は、アパルトヘイト時代からずっと、この癒しのプロセスを実現するために門戸を開放してきました。ここには書かれていませんが、他にも兄弟たちが関わった正義と平和と和解のプロセスは数多くあります。ソウェトとヴァール・トリアングルを明記したのは、それらが国内でも最も紛争の多かった地域だからです。

フランシスコ会が先頭に立って諸教会が提案した主な態度とは和解の精神であり、これはすべての人にとって新鮮なスタートとなりました。教会とフランシスコ会は、地域社会の人々のために

献身的に働き、貧しい人々によって福音化されるようにとの召命を再確認するように求められたのです。

この期間に、「南アフリカ黒人司祭連帯運動」が起こり、それは教会内の壁、つまり、司教と司祭の間の、白人司祭と黒人司祭の間の、そして黒人司祭間の壁を取り払い、和解を推し進めたのです。

こうした運動を背景に、兄弟たちは自分たち自身も真実と和解のプロセスが必要であることに気が付きました。そのための最善の場所は、ヨハネスブルグ近郊の黙想の家「ラ・ベルナ」以外にないでしょう。そこは、すべての兄弟にとって非常に意義深く、歴史的な場所なのです。

「真実と和解のための委員会」が行った、創造的で積極的な対決と物語るプロセスは、国全体のためのものであったと同時に、兄弟たちのためのものでもありました。南アフリカで真実と和解によって明らかにされるべきことは、まだまだ沢山あります。元安全保障大臣のエイドリアン・ヴロク氏は、あるテレビ番組のインタビューで、「真実と和解のための委員会」は和解のほんの第一章にすぎないと述べました。確かに、癒しと和解に至る道のはゆっくりとして長く、つらいものですが、歩み続けなければなりません。なぜなら、自分の歩く道にはいつも雨が降っていて止むことがないと感じている人々がいるからです。

最後に、現代のハンセン病者をより具体的な形で抱きしめるこ

とができるためには、まず自分の過去を認めて、ゆるし、前に進むことが必要です。確かに、聖フランシスコの平和の祈りの次の言葉は、このことをうまく言い当てています：「主よ、理解されることよりも理解することを求めさせてください。」

3. ブラジルの土地紛争における平和の模索

ブラジルは多くの貧しい人々を抱えた豊かな国です。貧困と、一握りの金持ち（億万長者）と多くの貧しい人々との間のひどい格差の構造的な原因の一つは、土地が一握りの人々の手に集中していることにあります。こうした状況の中で、地方では400万もの家族が、社会の片隅で土地を持たずに、あるいは持っているもごく狭い土地で、非人間的な条件のもとにかたがたに暮らしています。ここ数年間に、田舎から大都会に移ってきた人々の数が増え、スラム街の規模も失業率も暴力の件数も増大しています。

1950年以降、ブラジルのカトリック教会は、フランシスカンの司教イノセンシオ・エンゲルケの要請を受けて、農地改革の必要性を主張してきました。それは、神の御言葉に忠実に、しかも教会の社会教説に促されて、行われたものでした。今日、田舎の貧しい人々は、この選択肢を得て、土地の所有権と尊厳のある生活を求めて一丸となって戦うように励まされています。

このような教会の後押しと社会状況の中で、「ブラジルのアジジの小さき貧者の弟子たち」と称するグループは、土地を持たない貧しい人々と生活と目標を分かち合うように求められていると感

じています。つまり、彼らと連帯し分かち合いながら、彼らを助けることです。ある兄弟たちは、貧しい人々の暮らす社会環境に身を置き、彼らの喜びや希望、悲しみ、苦しみを共にしています。私たちは小さき兄弟として、田舎の貧しい人々の土地を求める戦いに参加し、それが実現してからも、ずっと彼らとそこに留まります。

このような形の在り方や行動の仕方は、小教区や学校、社会事業、避難所、司牧活動、その他よく見られる宣教活動とは違っています。たいていの場合私たちが身を置くのは、紛争のあるところですが、たとえば、大地主と抑圧的な政策をとる国は、広大な土地を守る立場にあります。一方、「農民たちの社会運動」は、団結して権利を要求しています。私たちは最も弱い農民たちの側に立ち、その結果、悲惨な体験をします。誹謗中傷、脅し、法的な制裁、迫害、殺しの脅迫、暴力的弾圧、理解の欠如などです。私たちはこうした状況を平静に受け止め、話し合いによる解決を求めて当局といつでも対話する心構えを持つように努めています。非暴力の解決を模索する証し人となるために、いつも平和主義者の態度を貫いています。私たちは福音の教えに従い、フランシスカンの精神でいつも貧しい人々の味方でいる覚悟です。貧しい人々は歴史の犠牲者であり、私たちは彼らの側に立つ必要があるのです。

こうした状況下で、私たちの中には、投獄されたり、襲われたり、殺すと脅迫された兄弟たちもいます。紛争を避けることができなかつた場合、一般の人たちと同じように暴力を振るわれるこ

ともありました。私たちの選択は、兄弟間においてすら、いつも理解されるとは限らないのです。私たちの態度は政治的な色彩を帯びることがありますが、そうした色彩は、多くの宗教的な環境では得てして受け入れられないものです。私たちはそうした反応を甘受しながら、他方では自分の態度や基本的な動機を説明しつつ、特に理解されることよりも理解することを求めつつ、生きようと努力してまいりました。

人々の間に交じって暮らしているうちに、私たちは抗議行動や巡礼、土地の占拠、世論の圧力、ハンガーストライキなどにも参加しました。貧しい人々の組織が司法命令を受けた時には、私たちは彼らと連帯する立場をとります。大いなる犠牲の瞬間に自ら参加するのです。決定的な瞬間には、兄弟としての立場を利用して人々の正義のために働きます。

私たちの多くは、旅人として開拓地や仮設小屋で暮らしています。ミサを捧げ、祈り、秘跡を受け、信仰共同体を育成し、福音宣教のために司牧の助けとなる人々を養成します。苦しむ人を慰め、彼らの成功と喜びを共に分かち合います。リーダーの養成にも力を貸し、特に共同作業を奨励しながら、小規模農家の社会的・経済的条件を改善するようなプロジェクトを支援しています。

また、子供や青少年に対しては特別な関心を払い、できるだけ教育を推進するように働いています。尊厳のある生産的な生活の可能性と、犯罪や暴力、麻薬取引の生活の可能性との狭間にいる十代の若者を導いたことも何度もあります。

ここ数年間は、環境問題とエコロジー教育に特別な注意を払ってきました。地域に密着した修道院では、生物の多様性を回復維持したり、有機栽培の種を保存したり、節水したり、森林再生を実行したり、自然界を大事にする心を育てるなどして、良い手本を示すように努力してきました。私たちの活動の基本的な動機となっているのは、フランシスカンの神秘主義であり、それは次のことに基づいています：

- 母なる大地とその愛する子ら、すなわち、田舎の貧しい人々、先住民族、キロンボスと呼ばれる黒人奴隷の子孫たち、漁民たちへの愛；
- ハンセン病患者へのフランシスコの愛からインスピレーションを受けた、貧しい人々との連帯；
- 現代の十字架に架けられた人々の中に十字架に架けられた主を見、人間の尊厳に対する侵害を神のイメージへの侵害と見る精神；
- 被造物の保全と平和の促進、それも、紛争がないという意味での平和ではなく、人間として生きるよりよい条件を提供することによって、紛争を乗り越える意味での平和を絶えず追い求めること；
- 派遣されて宣教する使命を生きる者として、地域に根差すこと。それはつまり、そこに生きる人々の不安定な生活条件を共にするという事です。それはまた、喜んで旅人となること、言い換えれば、土地を持たない人たちの「移動」と強制移住に付き添う形で、定期的に自らも居場所や住居を変えることでもあります。

誘惑は常にありました。屈辱の苦しみ、怒り、憤りを感じることは何度もありました。私たちは侮辱や不正といったものに敏感なのです。私たちは、怒りが憎しみにならないように、自分の中で戦い、イエスの言われたもっとも難しい掟の一つ「汝の敵を愛せよ」を実行するように努めています。

また、私たちは他の人たちよりも優れているとか、私たちこそは本物で正統派だとか、私たちを批判する人々を裁くことができるとか、私たちを理解してくれない人々を批難することができるなどと考えそうになることもあります。私たちは、日々矛盾に満ちていて、神の御手にある壊れやすい道具であることを自覚しながら、こうした誘惑と戦うのです。

もう一つの誘惑、それは、「人々のため」と称して、あるいは「人々の手を借りて」やるのだと言いながら、人々がその歴史の主体となること、自らの尊厳を打ち立てることを許さないことです。私たちや、私たちの思想、行動、プロジェクトに頼る人々の依存心を助長して、父権主義に陥る可能性があるのです。私たちは、一致の力と強さを信じる気持を強めつつ、このような誘惑と戦うように努めています。誰にでもある「私こそは」という傾向を克服し、平等な人間関係を築くために働こうと努めています。

私たちはまた、自分の生き方を共に見直そうとしています。それは、批判精神と自己批判の心で、兄弟愛と交わりの精神で改めるべきは改め、人々と見直すための集会を開き、自分の生き方を

神の御言葉およびアシジのフランシスコと最初の仲間たちが生きた古来のフランシスカン運動の根本的な諸要素に照らし合わせる取り組みです。

貧しい人々、弱者、見捨てられた人々、さげすまれた人々、ぎりぎりのところで生きている人々の間にいる時、多くの心からの本物の喜びを味わったことを、私たちは立証することができます。

III－実行

個人の養成のために

- a. 貧しい人々や不正と紛争の状況に接した時の体験をすべて思い浮かべなさい。それらの体験はあなたの個人的な生活や養成においてどのような意義がありましたか。また、平和と正義と和解に対するあなたの取り組みについて考えなさい。その取り組みの姿勢は、言葉と模範によって福音を宣べ伝える上で、どのような影響を与えていますか。
- b. この後の「更なる考察のために」の中で述べる聖書およびフランシスカンの資料について、時間をかけてじっくり考えなさい。それらの資料を、平和と正義と和解を証しし、促進するために小さき兄弟として招かれ、派遣されているということをしっかり自覚するために役立てなさい。
- c. 平和と正義と和解に対する私たちの取り組みについて、会と教会の公文書が示している指針を考えるにあたり、あなたの所属する地域共同体の反応はどのようなものですか。あなたの管区の反応は。あなたの地域の教会の反応は。何か具体的に実現可能な提案を彼らはしてくれましたか。

兄弟共同体の集まりのために

共同体は修道院会議や静修日や研究会などで、これらのテーマについて話し合うことができます。修道院会議や静修日などで応用できるアウトラインは以下の通りです。

A. マタイ 5:1-11 に基づく信仰の分かち合い

- 信仰の分かち合いのための方法を選びなさい（できれば、会が用意したものがよい）。
- 個人の祈りの時間のほかに、神の御言葉に答える時には、参加者は共に詩篇 85（84）を唱えることができます。
- 信仰の分かち合いの終わりに、グループは、バヒア総評議会の提言を読むのも良い（この後の「更なる考察のために」の5番目のフランシスカンの資料参照）。この朗読に基づき、どのような具体的なジェスチャーや行動が兄弟共同体の平和と正義と和解の告げ知らせと貢献に役立つかを決めることができます。

B. 生活の見直し

1. 院長または担当者は、会合の何日か前にこの章を読んでおくように兄弟たちに勧めます。
2. 会合の始めに、ふさわしい歌を歌ったり、祈ったりしても良いでしょう。
3. 「更なる考察のために」の中からフランシスカンの資料を一つ選び、読むのも良いでしょう。
4. 院長にあらかじめ指名された兄弟は、考察の部分と体験の部分の基本的な要素に焦点を当てながら、テーマを手短かに紹介します。兄弟たちは、この考察を、自分が過去に味わった、あるいは現在味わっている他の体験で豊かにすることができます。
5. 共同体が体験している社会的な現実について共に考えなさい

い。個人の間や、家族内、社会グループ間、宗教団体間、文化全体に見られる対立や、争い、暴力とはどのようなもので
すか。どのような不正が存在していますか。そうした状況を作
っている原因とは何でしょうか。その結果は具体的にどう
なっていますか。

6. 兄弟共同体は自分たちの平和と正義と和解をどのように促進
していますか。
7. 兄弟共同体がその置かれた社会環境の中で平和と正義と和解
を促進するにはどうすればよいでしょうか。この側面は、福
音宣教活動の中でどのように提示されていますか。
8. 地域の中に、平和と正義と和解のために働く組織が他にあり
ますか。兄弟共同体がそうした組織と協力して行くにはどう
すればよいでしょうか。
9. 兄弟共同体の内と外で、平和と正義と和解のための生涯養成
と教育を促進するために、どのようなことがなされているで
しょうか。
10. 会合の締めくくりとして、その日にいただいた祝福に対する
感謝の祈りを唱え、閉会の歌を歌いましょう。

C. 正義と平和を求めしるし、またはジェスチャー

しるしやジェスチャーが信仰の分かち合いや共同生活の見
直しから生まれることが大切です。以下に考察の参考になり
そうなことをいくつか例示します。

- 地域の教会共同体、小教区、その他の組織と共に、年に一
度の「平和の日」を企画する。「平和の日」の前に三日間
の祈りと断食、または共に考える集会を催すこともでき

る。若者たちや学校や社会組織、他の宗派の教会や宗教にも声をかける。エキュメニカルな、あるいは異宗教間の集まりを企画する。平和と正義と和解についての体験を分かち合うように勧める。「平和の日」の終わりには、何か具体的な約束事を決める。

- 兄弟共同体は、不正や暴力や疎外（家族や社会的・民族的な）が生まれている具体的な状況に身を置くことができる。そして、そうした人々との接触を持ち、維持して、彼らの状況を知り、福音的で司牧的な行動の仕方を識別するように努める。地域の教会共同体やこの方面で協力を期待できそうな人々の参加を促す。
- フランシスカンの霊性に基づき、兄弟共同体の中で、また、兄弟たちが住み、働く場所で見られる内的な不和に立ち向かう適切な方法を探る。この目的のために役立つ文書が必ずや各国語で存在するはずである。

D. 祈り

平和の神なる主よ、あなたはその栄光を知らせるために、その御好意によって人類をお創りになりました。私たちはあなたに祝福と感謝を捧げます。なぜなら、あなたはその愛する御ひとり子イエスを、私たちのもとにお遣わしになり、イエスを、復活の神秘によって救い主とされ、あらゆる平和の源とされ、あらゆる兄弟愛の絆とされたからです。

あなたの平和の霊が現代にもたらしてくださった熱意と努力と偉業に対して、あなたに感謝します。そのおかげで、憎

しみを愛に、不信を理解に、無関心を連帯に変えることができます。私たちがいつも平和の推進者であることができるように、私たちの心を、兄弟姉妹たちの具体的な必要に向けてさらに開かせてください。

慈しみ深い父よ、苦しむ人々、より深い兄弟愛に満たされた世界を築くためにもがき、死んでゆく人々のことを心に留めてください。あなたの正義と平和と愛の国がすべての民族と国民に訪れますように。世界があなたの栄光で満たされますように。アーメン。

IV-更なる考察のために

聖書から

1. (1)見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ彼は国々の裁きを導き出す。(2)彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。(3)傷ついた葦を折ることなく暗くなってゆく灯心を消すことなく裁きを導き出して、確かなものとする。(4)暗くなることも、傷つき果てることもないこの地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。(5)主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ地とそこに生ずるものを繰り広げその上に住む人々に息を与えそこを歩く者に霊を与えられる。(6)主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼びあなたの手を取った。民の契約、諸国の光としてあなたを形づくり、あなたを立てた。(7)見ることでできない目を開き捕らわれ人をその枷から闇に住む人をその牢獄から救い出すために。(イザヤ 42:1-7)

2. (1)イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。(2)そこで、イエスは口を開き、教えられた。(3)「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。(4)悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。(5)柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。(6)義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。(7)憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。(8)心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。(9)平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の

子と呼ばれる。(10)義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。(11)わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。20) 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。(マタイ 5:1-11, 20)

教会の公文書から

1. 「平和は単なる戦争の不在でもなければ、敵対する力の均衡を保持することだけでもなく、独裁的な支配から生ずるものでもない。平和を正義のわざと定義することは正しい。平和とは、人間社会の創立者である神によって、社会の中に刻みこまれ、常により完全な正義を求めて人間が実現しなければならない秩序の実りである。事実、人類の共通善は、基本的には永遠の法則によって支配されるが、共通善が具体的に要求する事からは、時の経過とともに絶えず変動する。平和は永久に獲得されたものではなく、絶えず建設すべきものである。そのうえ人間の意志は弱く、罪によって傷つけられているため、平和獲得のためには各自が絶えず激情を押え、正当な権力による警戒が必要である。

しかし、それだけでは十分ではない。個人の善が安全に確保され、人々が精神と才能の富を信頼をもって互いに自発的に交流し合わなければ、地上に平和は獲得できない。他人と他国民およびかれらの品位とを尊重する確固たる意志、また兄弟愛の努力と実践は、平和の建設のために絶対必要である。こうして平和は愛の実りでもある。愛は正義がもたらすものを越える。

隣人に対する愛から生まれる地上の平和は、父なる神から来るキリストの平和の象徴であり結果である。受肉した子は平和の君主であり、自分の十字架によってすべての人を神と和解させ、一つの民、一つのからだのうちにすべての人の一致を再建し、自分の内において憎しみを殺し、復活によって高くあげられ、愛の霊を人々の心に注いだ。

したがって、すべてのキリスト者は愛の中に真理を実行しながら、平和を求め、また打ちたてるために、平和を心から愛する人々と協力するよう強く求められている。

権利を擁護するために暴力を放棄して、弱い者にも使うことのできる防衛手段にたよる人々を、われわれは同じ精神に基づいて、賞賛しないわけにはいかない。ただし、暴力否定が他人または共同体の権利と義務を侵害することがあってはならない。」（現代世界憲章 78）

2. 「聖体がもたらすキリストとの一致は、私たちの社会とのかかわりにも新たな要素を与えます。この秘跡による「神秘主義」は、社会的な性格をもっているということです。実際、キリストとの一致は、キリストがご自分を与えるすべての人との一致でもあります。私はキリストを独り占めすることはできません。私は、キリストのものとなったすべての人、あるいはこれからキリストのものとなるすべての人と一致することによって、初めてキリストに属する者となることができるのです。ですから、聖体の神秘と社会とのかかわりの間の関係をはっきりさせなければなりません。聖体は、兄弟姉妹の交わりの秘跡です。兄弟姉妹は、キリストと和解させていただいた人々です。キリストは、ユダヤ人と異教徒

を隔てる敵意という壁を取り壊し、両者を一つの民としたからです（エフェソ 2:14 参照）。この和解への絶えざる促しによって、初めて私たちはキリストのからだと血を受けるにふさわしい者となることができます（マタイ 5:23-24 参照）。ご自身のいけにえの記念によって、主は私たちの兄弟的な交わりを強めます。とりわけ主は、紛争中の人々が、対話と正義への努力に向けて心を開くことによって、早く和解するように促します。正義と和解とゆるしの回復が、真の意味での平和を築くための条件であることはいうまでもありません。このことを認めることによって、不正な社会構造を変革し、人間の尊厳に対する尊重を回復しようとする決意が生まれます。人間は神の像と似姿として造られたからです。こうした責務が実行されることを通じて、聖体は生活の中で、感謝の祭儀が意味するものとなります。すでに別のところで述べたとおり、できるかぎり公正な社会を実現するための政治活動に参加することは、教会の務めではありません。にもかかわらず、教会は正義のための戦いを傍観していることはできませんし、傍観するべきでもありません。教会は、「理性に基づく議論を行い、また、霊的な力を呼び覚まさなければなりません。こうした霊的な力なしに正義が勝利し、栄えることはできません。なぜなら、正義は犠牲を要求するからです。」

すべてのキリスト信者が社会的責任を負うことについて、シノドス参加司教はこう指摘しました。キリストのいけにえは、解放の秘跡です。この秘跡は、たえず私たちに問いかけと呼びかけを行います。それゆえに私は、すべての信者に呼びかけます。平和と正義のまことの推進者となってください。感謝の祭儀にあずかる人は皆、現代世界において平和を作る努力をしなければなりません。

せん。世界には、さまざまな暴力と戦争が存在します。特に今日、世界に見られるのは、テロと経済的不正と性的搾取です。これらの問題は人間の品位を失墜させ、強い懸念を招いています。私たちはこうした状況を生半可なしかたでは解決できないことを知っています。私たちは、自分たちが祝う神秘の力によって、人間の尊厳に反する状況を告発しなければなりません。キリストは人間のために自らの血を流し、すべての個人が尊重されるべきことを揺るぎなく確認したからです。」(ベネディクト16世の使徒的勧告「愛の秘跡 89」2007)。

3. 「ヨハネ・パウロ2世は、大胆で預言的な指導力を発揮するにあたり、聖フランシスコのゆえに世界中に知られているアシジの町という心を揺さぶるような環境を選びたいと願いました。

事実、「ポヴェレッコ (小さき貧者)」は、福音書の中でイエスが言われた幸い、すなわち、平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる (マタイ 5:9)、を模範的な形で実現しました。フランシスコが当時行った証しによって、彼は平和の理想と自然界の尊重と民族間・異宗教間・異文化間の対話を推し進めようとする現代人にとって、最適な基準点となっています。しかし、彼のメッセージを裏切りたくなければ、次のことを心に留めておくことが大切です。すなわち、すべての人が招かれている兄弟愛を理解する鍵をフランシスコに与えたのは、キリストのラディカルな決定であったということです。その兄弟愛には、「兄弟なる太陽」から「姉妹なる月」にいたる無生物たちも何らかの形で参加しているのです。

そこで私は、聖フランシスコの回心の800年記念祭がヨハ

ネ・パウロ2世の「平和のための祈りの会」の20周年記念と奇しくも同じ年に行われることを心に留めたいと思います。この二つの記念祭は、互いを照らし合っています。サン・ダミアノの十字架上の主がフランシスコに言われた「フランシスコ、行って私の家を建て直しなさい」との言葉の中に、徹底した貧しさを選んだ彼の決意の中に、苦しむ兄弟にキリストを見て愛する新たな力を表すハンセン病者への口づけの中に、これらすべての出来事の中に、フランシスコはあの人間的でキリスト教的な冒険を試み、それは、今日もなお、多くの人々の心を惹きつけ、アシジの町を無数の巡礼者の目的地にしているのです。(2006年9月2日、ベネディクト16世の「諸宗教の平和のための祈りの会」20周年記念に際してのメッセージ)

フランシスコ会の資料から

1. 「主は私に挨拶の言葉を啓示してくださいました。私たちはこう言うべきです：『主があなたに平和を与えてくださいますように。』(「遺言」23)
2. 「私は主イエス・キリストにおいて忠告し、戒め、勧める。兄弟たちはこの世をめぐる時、争ったり、口論したり、他人を裁いたりせず、小さき者にふさわしく、柔和で、平和をもたらし、慎み深く、温和、謙遜であり、すべての人に対して、礼儀正しい言葉を用いて話すようにと。また、差し迫った必要や病気のために、そうせざるを得ない場合を除いて、馬に乗ってはならない。どの家に入っても、先ず『この家に平安があるように』と言う。そし

て、差し出される食べ物はずべて、聖福音によって食べることができる。」(裁可会則 3, 10-14)

3. 「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。この世で堪え忍ぶすべてのことにおいて、私たちの主イエス・キリストへの愛のために心身の平和を保つ人こそ、まことに平和を実現しています。」(「訓戒の言葉」 15)

4. その他のフランシスコ会の参考文献：未裁可会則 14、2 チェラ 108(アレヅでの平和)、小さき花 21 (フランシスコと狼)、AC 84 (司教とアシジの市長との和解)。

5. 平和を実現する人であることは、フランシスカンの生活と福音宣教の重要な部分を占めています。ゆえに、総評議会は兄弟たちに以下のことを勧めます：

- ① 神とすべての人々と平和を保つ人であるために祈ること、祈りと断食を平和への努力の一部とすること、社会に平和を打ち立てようとする運動を支援すること、また、そのような運動に個人的に参加すること。
- ② 平和への非暴力の努力を支援すること、戦争—特に核戦争—に反対する良心的な人々を支援すること、正義と平和のために信念を持ち、努力したことで投獄された人々を支援すること。
- ③ 特に私たちが経営する学校や神学校の若者たちのために、平和教育を充実させること。
- ④ 私たちの中にある不正を取り除き、互いに違いがあっても

キリストの平和を証しする人として修道院で共に平和に暮らすための方法を見つけること。

- ⑤ 可能な限り兄弟たちをフルタイムで正義と平和のために働かせ、会や管区の J P I C 担当室や委員会ですでに働いている兄弟たちを支援すること。
- ⑥ 胎児の権利と、未来の希望もなく生まれた子供たちの権利を擁護する声となること。
- ⑦ 軍備競争とすでに製造されたすべての核兵器に声を大にして、断固反対すること（バヒア 38）。

6. 平和は特に祈りによってもたらされます。人間は、観想によって、創造主の御顔を慕い求め、神の慈しみとご計画を知るのです。このご計画は、人類家族を調和のとれた一致で結びつけます。罪によって損なわれた人類家族は、キリストの犠牲によって回復しました。その時から、キリストの愛が今度は私たちの心を駆り立て、自分自身を兄弟姉妹のために捧げるようにといざなっています。これらの真理を絶えず思いめぐらすことによって、フランシスコは深く回心し、人々に「福音を告げ知らせる人」となりました。同じように、クララも極めて優れた祈りの人であり、観想と賛美のうちに神と一致していました。彼女は世に出かけて布教するフランシスコとその仲間たちをしばしば教え導きました。

祈りはまた、別の形で平和をもたらします。祈りによってはじめて、人は人間の心を他者に対して開かせる内的な条件をつくり出すことができるのです。祈りのうちに、人間はその限界を認め、助けを必要とすること、過ちを犯す可能性があることを悟ります。また、祈りにおいてこそ、人間は自分が神の子であり、そ

れゆえに、善を行うことができることを知るので。そして、善をなすことができるから、人間は他の人々を兄弟姉妹と認めることができます。この確信の中に、たとえ逆境にあっても、善を打ち立てる可能性を信じる心が根を下ろしており、また、そのような意図を具体化させたいとの願いもそこに根を下ろしています。だからこそ、教皇様は、アシジでの祈りの最後に用いた信仰告白の中で、祈りが信仰を深め、人類愛を実践する力となることを説いたのです。

最後に、人間は祈りの中にその本当の祝福を見出します。富の個人的な所有と自分の特権を保持しようとする態度は、人類を分裂させるにちがいありません。しかし、精神的なものは、分かち合うならば決して減りませんから、武装して守る必要がありません。このことを認識してこそ、私たち一人一人が平和の道具となれることを各人が理解できるのです。(フランシスカン家族の総長、「アシジの精神」、1987年4月16日)

7. 同様に、暴力、戦争、原理主義、不調和と分裂によって十字架につけられている世界の中で、平和の働き手、和解の道具であれ、というフランシスコの招きが緊急に必要になってくることを、私たちは次第に自覚しています。私たちが共に生活し、仕える人々とともに始めましょう。すなわち兄弟的共同体、各地方のそして全国レベルでの共同体とともに始めましょう。識別し続ける霊を持ち、福音の判断基準によって導かれて平和に賛同するさまざまな地方的運動とさまざまな民衆、民族団体、人種、文化と宗教の中で平和を促進するために働く全国的、国際的組織とともに働くように努めましょう。(FEGC 163)

8. 私たちは巡業の旅を通して神経過敏な場所を通り抜けます。私たちの社会には深刻な不均衡と緊張があるからです。それは、様々な宗教間（キリスト教、イスラーム教、ヒンズー教）に、金持ちと貧乏人の間に、権力者と弱者の間に、奴隷と自由民の間に、男と女の間にある分裂です。私たちは平和と正義の証人となるためにその中を通り抜けるのです。新しい世界を夢見ている非常に多くの人々とともに、私たちは希望と平和の文化の建設者でありたいと願っています。小さき兄弟として私たちが願っているのは、場所を切り開き、人間としての共通の尊厳を高揚する新しい関係を創り上げることです。その尊厳は、私たちの創造主である神から生まれ、私たちの贖い主キリストにおいて完全なものとされたものです。私たちは、まさに『十字架に付けられた人間性』のしるしを帯びた旅をしているのです。（LpG 33）

9. 小さき者であるということに忠実な兄弟たちは、どのような所においても言葉よりも生活を通して平和をもたらすものであるべきです。人々の間に和解をもたらし、創られたものを尊重し、あらゆる種類の暴力と不正義と欺瞞を拒否していかなければなりません。兄弟たちは生活を通して、自由と平和に向かって歩む新しい人類のしるしであるための努力を惜しんではなりません。

（「2003－2009年の優先課題」p. 25、8）

10. 会憲の他の条文にも、福音宣教との関連で同じテーマを扱っている個所があります。たとえば、93,1; 96,2; 97,2;98,2;99。

正義と平和の面での生涯養成

1. 神が父であることと、キリストが兄弟であることの体験は、小さき兄弟たちに小ささと単純さ、喜びと連帯の精神において、すべての人々とすべての被造物の兄弟であることを自覚させる（養成綱領 21）。
2. 小さき兄弟たちは、神によって「重い皮膚病」患者の間に導かれた聖フランシスコの模範にならい、貧しい人々の生活と境遇を選び取りながら、自分たちが彼らと同一であることを認め、圧迫されている人々、悩む人々、病人たちに奉仕し、また彼らから福音宣教してもらう（養成綱領 25）。
3. 平和の前触れ者として小さき兄弟は、心に平和を携え、他の人々にそれを勧め、人間の尊厳とキリスト教的諸価値に反するすべてのものに対して、直ちに力強く非を唱える（養成綱領 34）。

3 被造物の擁護者

会憲

第 71 条 聖フランシスコの足跡をたどる兄弟たちは、今日至る所で脅やかされている自然に対して尊敬の念を示す。このように創造主である神の栄光のために、自然を兄弟とする関わりを十全に回復し、すべての人間の益とならせる。

I - 考察のために

1. 現在の深刻な問題

歴史を経るうちに、人類は地球という惑星の生態系を根底から変えてしまいました。これらの変化のあるものは元に戻すことができません。それは、森林破壊、「変性化した (denaturalizing)」食物、工業化、都市化、応用技術の開発、人口の大幅な増加、自動化、天然資源の乱開発を見れば明らかです。これらの変化のせいで、一部の生態系は極めて不安定になっています。

現在の世界経済と主要な科学技術によって増え続ける環境破壊は、人類の未来の存続を極めて危ういものになっています。二酸化炭素を排出する化石燃料を燃やすこと、および化学肥料や汚染物質によって土地や水や空気を汚染することは、動植物の破壊ともよらぬ気候変動と人間生活それ自体を脅かす状態につながるであろうと、科学者たちは繰り返し論証しています。

高度に産業化された社会は、地球の有機的な均衡を乱し、何ら

かの解決策を講じなければ、宇宙の生態系を死に追いやってしまいます。専門家の間では、「地球殺し」などという恐ろしい言葉も使われ始めています。環境悪化を懸念する理由を、次のように挙げることができます。たとえば、山や川、海、森林の汚染、多くの種類の動植物の絶滅、変性化した (denaturalizing) 食物、軍備 (化学兵器や生物兵器、大量破壊兵器) 増強に伴う危険、天然資源の枯渇、地球温暖化、バイオ技術によるリスク (疫病を誘発する遺伝子の組み換えや変形) などです。

2. 環境悪化の諸原因

もはや取り越し苦労をしているかどうかの問題ではありません。むしろ、私たちの自然環境及び社会環境を脅かす危機や病弊を認識しているかどうかの問題なのです。しかし、環境悪化に警鐘を鳴らすような結果には、深くて複雑な原因があり、これらの不安問題を解決するためには、その原因に真剣に立ち向かわなくてはなりません。

姉妹であり「母なる大地」の深刻な悪化に拍車をかける原因は数多くあります。それには文化的、経済的、技術的、政治的な側面が含まれます。大資本とそれを支える政治が、理性と正義の法則を越えた利益を助長していることは周知のことです。

現代では、経済の仕組みが特定の専門分野の対象となっていることを心に留める必要があります。資本主義とあいまって、この分野は、個人の資産管理に関わる伝統的な概念を大幅に越えたひどく複雑なものになってしまっています。資本主義によって、経済はもはやその理念が自然界を人間の住処とする考えと相容れな

いシステムに変わりつつあります。それどころか、経済は搾取と利益の根源となっているのです。

このように経済の要素が、家族や社会団体や経済的に不利な立場にある地域といった他の社会体制から切り離されてしまったために、経済的理由からかけ離れた独自の経済「論理」が生まれてしまいました。これこそは、産業革命の特徴の一つであると同時に、生態系の危機の原因でもあるのです。

資本主義経済も社会主義経済も、工業化という共通のあらゆるものを含む概念とモーターに依存し、それによって走らされています。現代の資本主義経済も社会主義経済も、環境破壊を食い止めることはできないでしょう。環境破壊を食い止めることは、倫理的にも、人間の権利としても、また合理的な考えによっても、求められていることですが、それは、天然資源の正しい活用と配給に関する社会的で環境に優しい市場経済の理念を取り入れない限り実現は難しいでしょう。

自然界が病んでいるなら、社会も病んでいるのです。支配経済によって自然が乱開発された結果は悲惨で、人類のおよそ80パーセントが南部の貧困地帯に暮らしている事実が如実に表れています。そのうち10億人が極貧の状態で生活し、30億人が十分な栄養が摂れずにおり、毎年6000万人が餓死しています。また、毎年1400万人もの15歳以下の青少年が飢えから生じる病気によって死んでいます。このような命にかかわる問題を前にしては、人類の連帯など事実上無きに等しいものです。国連の報告によれば、富める国々の大半は、最貧国の援助のためにそのG N P（国民総生産）の0.7パーセント以下しか充てていないとのこと。

南北の分裂を生んだ諸原因は、自然界の乱開発につながる原因と似通っています。富める国々が、天然資源を枯渇させ、自然に返すことのできないほどの廃棄物を生み出すような消費主義的ライフスタイルによって、自然界を開発する一方で、貧しい国々は、その貧しさを補うために、自国の資源を乱開発せざるを得ない状況に追い込まれています。

私たちは、自然と技術と政治と経済と文化の諸要素を統合したシステムをつくって、地球のエコロジーを推進する必要があります。自然界は私たちが共に暮らす場であり、すべての人の共通の家なのです。社会的動因 (social agents) は自然界に敵対してはなりません。むしろ、自然界と協調し、天然資源を尊重し、大切にしなければなりません。自然と人と社会と技術と政治と経済の関係は、補完性の原則と正義と、そして、姉妹である母なる地球の価値と共通の資源を守るという理念によって、規制されなくてはなりません。

自然破壊と止めようのない地球の砂漠化もまた、人類学的・道徳的・文化的・宗教的価値観が大いなる危機に瀕している結果であり、反映なのです。こうした危機の中心には重要な人類の問題があるのですが、それは、個人と団体の野心や、国家の利己主義、企業の貪欲さ、偏狭な植民地主義、帝国主義的経済観によって覆い隠されてしまっています。

人間の精神がどのような限界をも越える無限の原動力を持っていることは確かです。しかし、それゆえにこそ、私たちには倫理的・社会的・宗教的・人類学的指針が必要です。すべての科学は、その合理性を技術によってすべての人に役立てるために、良心の導きを得る必要があります。アンリ・ベルグソンはいみじくもこ

う言っています：「テクノロジーは魂の次元を待ち望み、エンジニアリングには神秘主義が必要である」と。

3. エコロジーとキリスト教

環境の危機は宗教に対しても疑問を投げかけます。科学と技術が再び宗教に戦いを挑んでいるのです。長い間宗教は、地球に対する責任がよい加減であり、自然界の必要に対しても不忠実であると糾弾されていました。地球に対する無関心さのゆえに宗教を攻撃していた同じ団体が、今度は地球に対してこだわりすぎると言って宗教を攻撃しています。彼らの言い分では、「地を従わせよ」との聖書の命令を実行することによって、宗教は多くの生態系の悪化を来しているというのです。

ユダヤ・キリスト教宗教は、こうして、環境の危機に責任があると非難されています。しかし、そのような非難は間違いであることが、旧約聖書によっても新約聖書によっても証明されています。聖書は自然界を神の愛する被造物であると説いているからです。そのことは、創世記の第1章に見られる信仰告白によっても明らかですし、他の預言書や知恵書によっても明らかです。聖書の教えは創造の神学であり、その中で、人類と自然との関係は創造主と被造物という視点で理解されています。

人間は自然界とすべての被造物がそうであるように創られたものです。人間だけが善なのではなく、すべての被造物と生態系が善なのです。地球と地球にあるすべてのものは、人間に属しているのではなく、神に属しています。人間は地球の世話人にすぎません。

「地を従わせよ」と言うのは、環境を乱開発し、破壊する自由が与えられているという意味ではありません。そうではなくて、自然界に喜びをもって、実りが得られるように関わることにより自然界を人間化せよとの人間に対する神のご命令なのです。中でも、詩篇104は、被造物の美しさと素晴らしさのゆえに創造主を感謝を持って称える感動的な歌です。

新約聖書は自然界を大いなる神からの賜物として示しています。聖パウロは、ローマ人への手紙(8:20-21)の中で、人類と自然界との切っても切れない関係について強調しています。被造物と贖いとは、すべてを創られ、創りなおされるのが同じ神であるがゆえに、深く結び付いています。聖パウロにとって、人類と宇宙の救いは、同じ神のご計画の一部であり、それは、私たちと同じような人間の姿をとり、復活されたキリストによって実現しました。宇宙のすべての被造物は復活されたキリストの体の中にあります。

「現代世界憲章」(34)には次のように書かれています。「神の像として作られた人間は、大地とそこに含まれる万物を支配し、世界を正義と聖性のうちに統治し、また万物の創造主である神を認めて、人間自身とあらゆる物を神に関連させるようにとの命令を受けた。こうして万物が人間に服従すれば、全世界において神の名が賛美されるであろう。」それゆえに、人間の手による自然の際限のない乱開発と故意の破壊は、聖書にみる神のご計画に反しています。

だからこそ、世界教会協議会(WCC)は、これらの課題に取り組むべく、いろいろな機会に集まりを開き、被造物の保全というキリスト者の責務を擁護し、告げ知らせしているのです。

4. フランシスカニズムとエコロジー

会憲は会が被造物を保護する役割があることを明記しています。第 71 条にはこのように書かれています：「聖フランシスコの足跡をたどる兄弟たちは、今日至る所で脅かされている自然に対して尊敬の念を示す。このように創造主である神の栄光のために、自然を兄弟とする関わりを十全に回復し、すべての人間の益とならせる。」この文章は簡潔ながらも、姉妹である母なる自然に接する時の基本的な態度というものはっきりと示しています。私たちに、環境に対して具体的な行動で現れるような形で「尊敬の念」を示すようにと促しているのです。

この「尊敬の念」は、私たちが自然災害に直面しながら無関心を装うことを許さず、深刻な環境破壊の問題に対して責任ある行動をとるよう積極的に努めることを要求します。すべてのフランシスカンは、素晴らしい神の創造の御業を守るのだという明確な意識と強い決意を持たなくてはなりません。自然を「姉妹とし、有益なものとする」ことは、環境問題に具体的な解決策をもたらすために、創造性を必要とする新たな絶対命令です。この危機に取り組むためには、情報と適切な実行方法が必要となるでしょう。

フランシスカニズムは、確かに独特な神の見方と関わり方であると同時に、この世にあって、すべての被造物と関わる具体的で独特な霊性でもあります。それは、動植物を含めたすべてのものとの関わりが人間化されるという宇宙的な兄弟関係の形をとります。従って、私たちが「フランシスカンのヒューマニズム」と言う時、それは、責任感をもってこの世と関わることを意味します。その目するところは平和ですが、その平和は、社会的・人間的

な関係においてのみならず、自然界との関係においても見られる平和であり、ゆえに、いっそう宇宙的な表現を伴います。

1. **アシジのフランシスコ**は自然と友達であり、調和していましたが、それは神学的な理由によるだけでなく、彼が本来持っている傾向、温かさ、本能的な友愛感にもよるものでした。フランシスコは「兄弟なる太陽の歌」の中で、すべての被造物を通していと高いお方を称えています。なぜなら、すべての被造物は神の愛の現れだからです。フランシスコはすべてのものに深い愛着を持っているにもかかわらず、それらにこだわることなく、むしろ、それらの創造主である神に心を向けています。彼は素晴らしい自然環境を眺める術を知っていたばかりでなく、それを祝い、それに参加する術をも知っていました。そして、すべての被造物と深い、生き生きとした、情感あふれる関係を持っていたのです。
2. 自然と自然界の生き物について**ボナヴェントウラ的な**考え方をするには、すべての被造物に対して、愛の哲学に基づく思いやりのある行動と**尊敬**を示す態度、**交わり**、そして**兄弟愛**が必要となります。人間は自然と霊との媒体であり、完全なそれだけでいて未完成の合成過程で物質と霊とが調和された小宇宙なのです。人間は自然を支配したり、操作したりしてはなりません。むしろ、自然を治めるべきなのです。人類と自然は、同じ神学的・宇宙論的・実存的なプロジェクトにおいて調和を保っているのです。
3. **ドゥンス・スコトゥス**にとって、全世界は、宇宙的なキリスト中心主義の光のもとに見、解釈されるべきものです。

もしも聖パウロの教えに触発されたキリスト中心主義の世界観が復活していれば、この世の現実はずべて意味とメッセージに満ちた視点で捉えられることでしょう。このように、自然界の汚染、純粋に利己的な投機のための土地開発、天然資源の無駄使い、抑制と理性を失った消費主義、そして、自然に対するあるいは自然からかけ離れたあらゆる形の破壊活動は、神の創造のご計画に対する攻撃であり、世界に無秩序をもたらします。その及ぼす結果は測り知れませんが、人類に影響を与えることは確かです。

フランシスカンの霊性とその哲学的・神学的思想は、関係性の人類学のために貴重な働く場を提供してくれると同時に、深刻な環境危機に対して、質素と節度と節約の根拠を与えてくれます。フランシスカン的な姿勢とは、単に現実を知り、解釈しようとするのではなくて、行動を伴うものです。まず、生命は秘跡として尊ばれなければなりませんし、存在するものはすべて賜物と考えなくてはなりません。そのためには、天然資源を尊重し、節約して使うことが要求されます。フランシスカン的な価値観は、日常生活のささやかなことを単純に楽しむようにと導いてくれます。過度にならないように、無益な浪費をして野蛮な生き方をしないようにと導いてくれるのです。

現代の消費主義がすべてをーもの、人間、価値あるもの、書物、時間、思想、イメージ、流行をー貪り尽くしたいという生き方、抑えようのない渇きに変えてしまったならば、自由と責任の賢い使い方として、節制した生活を送ることが急務となります。かくして、節制と節約は、清貧の誓願を実行する具体的な方法である

のみならず、生態系を維持する力となり、連帯の形となります。

聖フランシスコが実行したような所有物の放棄は、苦勞したり、いらいらしながらするものではなくて、謙遜と喜びをもってするものです。「貴婦人聖なる清貧よ、主が、あなたを、あなたの姉妹聖なる謙遜と共にお守りくださいますように」(諸徳への挨拶2)。自主的な所有物の放棄、質素な生活様式、いのちという賜物に対する喜びこそは、被造物を尊重する態度であり、共に生きることの模範にほかなりません。フランシスコ的な節制は、完全な喜びの結果なのです。喜びに満たされた人はみな、祝います。そして、祝う人は分かち合います。分かち合う人はみな、創造主に対して正義を行い、すべての被造物に対して礼節を尽くすのです。

II-体験の分かち合い

フランシスコの書き物の中で、「太陽の歌」は極めて重要な位置を占めています。神と神が創られたすべての被造物に対するフランシスコの愛は、初期の伝記では一つの前提と考えられています。フランシスコの仲間たちはこう言っています:「聖人と一緒にいた私どもは、彼があらゆる被造物において、内的にも外的にも楽しんでいたのを見てきたが、それに触れたり眺めたりする時、彼の靈魂はつねに地上よりは天上にあるかのように思われた」(「完全の鑑」118, AC88)。

多くの箇所で何度も繰り返されていることですが、フランシスコの態度は独特で、ものを所有したり、支配したり、見下ろしたりすることはありませんでした。むしろ、ものや他の人々と共にあって、全体の一部となっていました。彼は、ものを兄弟姉妹と

して遇しました。なぜなら、すべては同じ父なる神の御手から来るものだからです。彼がすべての被造物を尊重し、敬い、兄弟姉妹となり、それらの中に神の愛を見ることができたのは、彼が徹底的に貧しく、何一つ自分のものを持たなかったからにほかなりません。愛ゆえの貧しさは、人をあらゆる所有欲から解放し、兄弟愛を芽生えさせます。

自然界のすべてのものを尊重し、それらと交わり、思いやる態度は、私たちの伝統と霊性の重要な一部です。これこそはフランシスカンの特徴であることが、会憲（第1, 2条参照）および他の文献によって明らかにされています。

しかし、私たちフランシスカンにとっての問題は、私たちを取り巻く環境の生態系が大変な危機に見舞われている現代において、この霊性をいかに具現するかということです。この霊性を一つの倫理に、人間的で現状回復するようなライフスタイルに、そして、できれば環境悪化の原因を攻撃する政治行動に変えて行くことを、私たちは求められているのです。つまり、フランシスカンはいかにして、具体的かつ現実的に、「今日至る所で脅かされている自然に対して尊敬の念」を示すかということです。「このように創造主である神の栄光のために、自然を兄弟とする関わりを十全に回復し、すべての人間の益とならせる」のです（会憲第71条）。

この霊性を具現するためには、自らをエコ教育する必要があります。エコ教育によって、あらゆる形態の自然を枯渇させる乱開発、生産、消費を批判分析することができるのです。その具体例をこの考察の後の体験談に示します。ことに富める国々では、この霊性は、持続可能で合同の生き方、消費の仕方へと私たちを導いてくれます。そのよい例が、米国サンタ・バーバラ管区のフラ

ンシスカン再生センターの取り組みです。この霊性は、エコ教育を推進し、社会や経済の機構を人間的ですべての人に適した誠実な形にして行くために働くようにと私たちに求めています。インドネシアやアマゾンで働く兄弟たちの体験に見られるような、ただ経済的利益や消費のためにのみ回っているような社会や経済にしないために働くことが私たちに求められているのです。これらの体験を見ると、生態系に配慮することが、国家間や大陸間の平等な関係のために、つまり、それぞれの文化に多様性を尊重させるような関係のために働くことにつながることが分かります。

1. サンタ・バーバラ管区（米国）の環境アセスメント

アリゾナ州スコッツデイルにあるフランシスカン再生センター（FRC）は、サンタ・バーバラ管区の六つの主な黙想センターの一つです。FRC は砂漠の中にある唯一のセンターという点で特にユニークです。「被造物の保全」という私たちの使徒職の一環として、黙想センターの物理的・生物学的環境に自分たちがどのような影響を与えているかを探り、それを確認するよう意識的に努力してきました。2004年に新しく建てられた「聖クララ聖体聖堂」は景観のよさとエネルギー効率のよさを認められ、「環境優良章」を与えられました。このアセスメント（評価）の過程で、私たちは8年間で環境影響を改善するための目標をいくつか設定しました。それは、次のようなものです。1) 景観、2) 電力使用、3) リサイクル、4) 窓の断熱効果。

景観の変化

前からあった果樹園は、パーマカルチャー(有機的な取り組み)デザインを取り入れた「癒しの庭」に作り変えられました。雑草が増えるのを防ぐため、特別にデザインされたカーペットを地面の下に敷きつめました。さらに、二つのコンポストを作り、スタッフやボランティアの人たちで管理しています。また、蒸発による水の無駄を減らすため、特別なマルチングやカバーで地面を覆っています。庭は毎年秋と春に様々なハーブや野菜で植えかえを行います。霊的な「癒し」というテーマが、この庭の説明標識にたびたび繰り返されています。

この8年間に、この庭以外の所有地にも、水分補給を必要とする植物に代わって、荒地に強い灌木やサボテンや樹木が植えられました。一番最近の計算では、26本の樹木と78本のハーブと179本のサボテンを植えたこととなります。多くの樹木は、建物の南側と南西側に、夏の強烈な日差しを建物が浴びるのを少しでも減らす目的で、計画的に植えられました。

所有地の至る所に砂漠原産の花を植えてありますが、それらは毎春水やりなしで花を咲かせます。典型的な砂漠の環境でも大丈夫なのです。以前は草の中に植えられていた約31平方キロメートル余りの芝生はゼリスケープ(耐乾性)の植栽にしました。広大な芝生地はお祭りの時を除き、年の大半は使われていませんが、注水が不要なために約454キロリットル)もの水が節約できています。

エネルギー使用

空調や冷房のエネルギーコストを抑えるために、エネルギー効率の高い空調設備が集会所と寝室に据え付けられました。いろい

ろな会議室にも五つの天窗が新たに作られ、天井の照明がいらなくなりしました。電力消費をさらに減らすために、キャンパス内のすべての白熱灯を蛍光灯に変えました。

リサイクル

古紙やアルミ缶のリサイクルによる収入が年に6000ドル近くになりました。近隣の地域社会のために、五つの古紙用の大型コンテナと二つの缶用の大型コンテナを用意し、住民にリサイクルの材料を入れるようお願いしています。再生紙は黙想センター内のすべての事務所や会議室から出されるリサイクルコンテナにいっしょにまとめられます。

窓の断熱効果

聖堂の窓はみな二重窓にしました。平屋根の建物はすべて発泡スチロールで覆ったので、夏の強烈な熱を遮断する大きな効果が得られました。温水器と暖房炉を熱効率のよいものに取り換ええました。所有地のすべての窓とドアは、太陽光と熱を極力遮断するために、最高品質の新しい被覆用材で覆いました。本部の建物の南側の窓はすべてシェードをつけ、熱を遮断するようにしました。

2. インドネシアのエコ司牧活動 (Eco-pastoral service)

ことの発端は関心からだった

フランシスカン・エコ司牧活動が始まったのは2000年で、インドネシアのプロレス島でした。この活動は大天使聖ミカエル管区のJ P I C委員会の不可欠な部分であり、エコロジー部門と

して機能しています。その最大の関心事は、農民たちを力付け、彼らの耕作技術と能力を高めて、生産性を上げることです。そうすることにより、彼らの経済状態が改善するはずですが。エコ司牧チームは、農民たちを援助するにあたり、無機肥料に代わるものとして有機肥料を使うように奨励し、それは1970年代以降インドネシア政府からも奨励されています。無機肥料は、農作物の生産性を高めるどころか、土地の質を低下させ、生態系を損なっていました。殺虫剤やその他の化学物質を使ったからです。

エコ司牧は、こうした有機肥料の使用を促進し、農民たちにも自ら有機肥料を作るように励ましています。そのお蔭で、彼らは身の回りにある物を有機肥料の原料として利用しながら、自分たちの役にも立たせているわけです。

エコ司牧は、有機農業だけでなく、森林や水資源の保護計画も促進しています。森林と水は農業に不可欠です。それゆえ、エコ司牧は農業従事者たちに、水を保護する役に立つようなその土地の樹木の種を育成することで、森林と水資源を保護するように奨励してきました。この活動はその地域の学校にまで広がり、エコ司牧チームは、学生グループを訓練し、学校の周囲の庭を有機的な方法で耕すのを手伝っています。学生たちはまた、有機肥料の作り方も教わっています。

インドネシアの大天使聖ミカエル管区のJ P I C委員会は、この活動の責任を担っています。フランシスコ会のマイク・ペルチェ神父がフロレス島でエコ司牧活動を始め、2006年10月にイグナチオ・ウイディヤリヨソ神父がその後任となりました。エコ司牧チームは、インドネシアのFMM管区の支援を受け、FMMのシスター・ヨハナがそのチームのメンバーとなっています。

啓発されたグループのデータ

- 各々、約300名の農民で構成される20のグループ。
- フロレス島のマンガライ地区の11の中高校。
- 33の小学校。

エコ司牧センターの活動

- エコ司牧センターはフロレス島のパガルにあり、そこに兄弟たちは修道院と志願院を持っている。
- センターには18名のスタッフがいる。そのうち4名が女性で14名が男性。
- 彼らはプログラム（すべてのグループの管理と情報の）を運営している。
- エコ司牧スタッフは、湿地帯を稲作地帯にし、乾燥地を菜園にしている。
- 牧畜業も収益のために行っているが、主目的は有機肥料の原料を得るためである。牧畜業には機械も導入され、そのために有機肥料の生産が増大している。
- 森林と水資源保護のための地元の樹木の種子が育成されている。

啓発および教育のためのプログラム

- スタッフの実用的な知識と技術を高めること。
- マンガライ地区のカリキュラム（教育課程）で有機農業とエコロジーを推進するために、教師と学生のためのワークショップ。地方自治体がこのカリキュラムを研究し、それ

を学校のプログラムの必修科目として推進している。

- 地元の文化特有の知恵を、エコロジーに関するフランシスカンの霊性に基づいて学び、深めること。エコ司牧チームは、地元の文化的知恵を大切にしているがゆえに、地元の人々に歓迎されている。
- 地元の小教区、特に若者たちを、森林と水資源を保護するように啓発すること。
- 性差別の問題や障害者に対する関心を引き起こすこと。
- エコロジーの保護者である聖フランシスコの霊性を人々および学生たちに紹介すること。
- 霊的および司牧的奉仕によって、農民を啓発し、キリスト教の信仰が自然界の保護を求めるものであることを示す。

ネットワーク作り

- 地域のNGOやVSO（ヴォランティアサービス組織）などの非政府組織と協力してのエコ司牧活動。VSOはエコ司牧スタッフとなるボランティアを提供する。
- 森林と水資源保護のためのプログラムについて地域の行政と連携する。
- 学校（小中高）で有機農業カリキュラムの活用を促進するために文部省と連携する。
- 地域の教会、特にエコロジーと有機農業に関心のある小教区の司祭たちと連携する。
- 様々な修道会と連携する。
- 産業省と連携し、エコ司牧のために必要な器具や機械を提供してもらう。

3. アマゾンにおける小さき兄弟たちの存在

土着の人々に交じって

ムンドゥルクの現地人に交じって小さき兄弟たちが働き始めた歴史の第一段階は、1910年に遡ります。当初は、ドイツ人の兄弟たちがサクソニー管区とブラジルの聖アントニオ管区から来た兄弟たちは、1940年代の半ばに第二次世界大戦でドイツ人がブラジルから追放されるまで、そこに留まりました。第二段階は、1940年代の後半に、米国のイエスの聖心管区から兄弟たちが来た時に始まりました。彼らが到着したことによって、ムンドゥルクには絶えずフランシスカンがいたこととなります。第三段階は、1990年に「アマゾンの聖ベネディクト分管区」が設立された時に始まりました。

1999年に、サンタレンの現地人によるレジスタンス組織が結成され、自分たちの民族のアイデンティティーと領土を守るために戦っています。2000年には、ムンドゥルク人たちは、黒人と現地人と民衆のレジスタンス活動500年記念祭に、現地のレジスタンス活動家と共に、バヒアのコロナ・ヴェルメリヤの現地人の行進と会議に参加しました。

2001年には、小さき兄弟たちはトロパス川、カビツツ川、カディリリ川、タバジョス川、テレス川、ピレス川、アニピリ川、カブルア川周辺の原住民を助けるために、ジャカランガの町に新たに家を建てました。その同じ年に、フランシスカンの宣教師たちはムンドゥルク人たちの間でどうあるべきかが検討され、分管区は、3名の兄弟を連帯の兄弟共同体に派遣しました。2002

年から2003年にかけて、フランシスカン在留90周年を記念して、「フランシスコ会・クララ会宣教師同盟」が生まれました。2003年7月以降、兄弟アマリルドが Coordinacion Colegiada del CIMI norte II、すなわち、パラ州とアマパ州の現地人と共に働く CIMI（現地人宣教師評議会）の中から現地人のリーダーと宣教師を養成するセクターの責任者となっています。1988年の憲法第231条と232条が發布されるに伴い、現地人たちは自分たちの土地に対する代々の、古来の、公認の、そして不可欠の権利（しかも、不可譲の権利）を勝ち得たのです。しかし、發布後19年経ってもなお、州政府による現地人の土地を守るために必要な境界区分は完成していません。境界区分の完成は、法律の發布後5年以内と定められていました。ようやく2005年にムンドゥルク人たちは土地を所有することができ、その所有権はルーラ大統領によって確認されました。今日何千というムンドゥルク人の家族が抱えている課題は、深刻な食糧難と大規模な人口増加による経済的な難問をどう切り抜けるかということです。私たちが働いている分野は、自給自足、政治教育、秘跡と典礼に関する教育、そして、要理教育と聖書教育です。私たちはそのほかに、現地人たちの権利擁護のために「神の母の無原罪の御宿り宣教修道女会」、CIMI、およびムンドゥルク人たちと提携を結んでいます。

自然界を尊重し、動植物や現地の人たちと調和して生きることこそ、フランシスカン霊性の特徴であり、それは、共によく生きる術を知っている師であり、専門家である現地人たちによって示されています。自然界は、姉妹であり母であると同時に、それ自体との親密で敬意に満ちた家族的な関係を生みだしています。

地元で働く人々に交じって

兄弟たちがこうした人々と共に暮らすようになったのは、1950年代の初めで、当時は聖書講座を開いたり、要理養育を施したりして、「良き知らせ」として知られており、現在では「要理週間」(Catechetical Week)と呼ばれています。この教育的なプロセスから、またサンタレン司教区の教会による巡業暮らしと信仰との結び付きから、サンタレン、ベルテッラ、アヴェイロ、ルーロポリス、イタイツバ、アレンケール、モンテ・アレグレ、プライニャ、アルメイリンに労働者と農業労働者の組合組織が生まれました。中でも、農村環境にキリスト者共同体が生まれたのは特筆に値します。

リーダーやカテキスタに交じって暮らす兄弟たちに見られる二つの際立った特質、それは、喜びと単純さです。非常に積極的で、愛情のこもった、そして思いやりのある関係がリーダーとの間にだけではなく、地域の生活を共にする家族との間にも存在しています。フランシスカン的な表現をするならば、自給自足の一形態としての手作業と、子供たちを養うために母なる大地の胎内から必要なものを得る生存形態としての農耕は、アマゾンの聖なる土による母性愛と優しさに満ちた靈性のしるしです。一方、アマゾンには「緑の黄金」を求める貪欲な農産物市場の餌食になっており、土着の人々の破壊と悲惨を招いています。大規模な多国籍の鉱山会社は、この聖なる子宮を攻撃するもう一つの脅威です。森林地帯にある巨大なくぼみを採掘されることは、シエラ・ドス・カラジャース(カラジャース山脈)の先住民にとっては大きな暴力です。しかし、これらのくぼみは、(オリシミナのポルト・トロンベタスに住む)キロンボラスと呼ばれる黒人難民や、川岸に住む人々、

漁師や農民たちの胃袋に開けられた穴の大きさは比べ物になりません。そのほか、最近のアルコアとジュリチによる略奪も深刻な暴力であり、そこから人々は何の恩恵も受けていないのです。皮肉なことに、政府が打ち出した「飢饉ゼロ」対策とは対照的に、鉱山会社が行っている計画は、住民にとって「恩恵ゼロ」となっています。

川岸に住む漁師たちの社会で

1990年代の半ばまで、小さき兄弟たちは、川岸に暮らす人々の大半と生活を共にしていました。兄弟たちは漁で生計を立てている人々が湖や川を守るための戦いで団結し、強くなるための手助けをしていました。彼らが手に入れた非常に重要な勝利が一つあります。それは、旱魃の時に失業保険を受給する権利を得たことです。それによって、彼らは生計を漁に依存している家族を養って行くための最低限の保障が得られることになりました。

川や湖の保護と底引き網のような強引な漁業慣行との戦いは、自然環境を守る方法です。漁をする家族たちが集まって合意のもとにできた法律や規則は、生態系への関心が成熟の域に達した証しです。さらに重要なことは、これらの法律が、アマゾンに水力発電所を建設しようとするブラジル政府の侵略計画と実行を阻止するものであることです。ブラジル政府は、アマゾンに関する科学的な研究結果を完全に無視して行動し、その行動は、全世界のニュースメディアから避難を浴びています。水とジャングルは大気に酸素をもたらしますが、アマゾンが「地球の肺」と呼ばれるのは、単なる偶然ではありません。私たちの存在と支援、特に生態系に対する関心呼び起こし、すべての被造物と調和のとれた

生活をしようとする私たちの活動は、創造主とすべての被造物との契約を守る役に立っています。

III-実行

個人の養成のために

多種多様な環境破壊について考えなさい。たとえば、大気汚染、水質汚染、森林伐採、気候変動、水不足、生物の多様性の喪失など。このことについて、あなたはどのように感じていますか。自分の取っている態度と、公共善の促進のために自分にできることについて考えなさい。

すでに述べた、そしてこれから述べるカトリックの社会教説について考えなさい。被造物の保全について意識を高めるにはどうすればよいと思いますか。個人として、また共同体として、どのような態度と具体的な行動を取るべきだと思いますか。

2003年の総集会で承認された提案の一つに次のようなものがあります。

「本総会は、2003年から2009年までの6年間に、J P I C担当室の協力を得て、会のすべての構成単位が下記のことを実行するよう要請する。a. 私たちの生活様式と自然界に及ぼすその影響力を吟味し、環境に対してより責任ある行動をとり、環境正義を守ること；b. 積極的な非暴力の生活様式を推進し、紛争解決に特別の注意を払うこと；c. 難民、移民、少数民族、土地を持たない人々、亡命者に対して特別の注意をはらうこと（総括文書、提案 39）。

私たち一人一人がこの提案に対してどのように行動してきたかと自問してみるとよいでしょう。私たちの生活様式が環境に及ぼす影響について前よりもっと関心を持つようになったでしょ

うか。最も重要な生態系の問題とその原因について自己教育を行なって来たでしょうか。連帯の枠を越えて動き、生態系上の理由からよりシンプルな生活様式を選びとるようにして来たでしょうか。

兄弟共同体の集まりのために

A. 信仰の分かち合い：ローマ人への手紙 8:18-25

これについて兄弟共同体で考えるのに役立つ二つの読書があります。それは、フランシスコの「太陽の歌」と詩篇 104。

B. 生活の見直し

修道院会議か静修日を設け、兄弟共同体として被造物に対する態度について考えなさい。私たちは周囲の世界を尊重しているでしょうか。被造物に対して注意を払っているでしょうか。フランシスカンの霊性のこの側面をより良く生かすにはどうすればよいでしょうか。

そのために考えられる方法とは：

1. 院長または担当者は、会合の何日か前にこの章を読んでおくように兄弟たちに勧めます。
2. 会合の始めに、「太陽の歌」を読んだり、歌ったりしても良いでしょう。
3. 担当の兄弟が簡単にテーマを紹介し、考えるべき最も重要な側面について説明します。その他の兄弟は、この分野で自分が体験したことや現在経験していることも含めて、自分の意

見を述べます。

4. 上記の2003年の総集会の提案 39 に対する応答として兄弟共同体はどのようなことを行ったか考えなさい。
5. 電気や自動車や冷暖房器具、水、ゴミ、紙、再生可能品、遺伝子組み換え食物または「フェアトレード」商品の利用を通じて、兄弟たちがいかに環境に影響を及ぼしているかについて話し合いなさい。そして、環境改善のために何をなすべきかを具体的に決めなさい。
6. 会合の締めくくりとして、その日にいただいた祝福に対する感謝の祈りを唱え、閉会の歌を歌いましょう。

C. 被造物への配慮を表すしるし、またはジェスチャー

兄弟共同体が決定する具体的な行動やしるしは、聖書や教会の教え、私たちのカリスマ、私たちを取り巻く社会・政治的な現実を通して示される神の御言葉に注意深く耳を傾けることから生まれたものでなくてはなりません。

以下に考えられる行動を例示します。

1. 兄弟共同体は祈りと静修の日を田舎に計画し、そこで、木々の中や湖畔を瞑想しながら歩いて、神の善性を見、触れ、嗅ぎ、感じ取るようにします。兄弟たちは共同の祈りの中で、散策中に体験したことを分かち合います。
2. 兄弟共同体はアースデー（4月22日）か世界環境デー（6月5日）を祝って、信徒と共に集会を開き、環境問題へのフランシスカンの回答とは何かを考えます。それにはそのテーマについての徹夜の祈りも含まれます。
3. 兄弟共同体は被造物への尊敬の念とシンプルでつましい生活

様式を示したいと望み、以下に述べる6つのことを日常生活の中で具体的に生かすにはどうすればよいかを考えます。

- 素敵なものよりも基本的な必需品を優先して、生活様式を見直す；
- 世界中の人々の基本的な必要を満たすことを強調するために、私たちの経済システムを再構築する；
- 資源の消費をできるだけ減らす；
- ものを再利用して、有効寿命を伸ばす；
- 有効寿命が終わった製品をリサイクルして、新製品の製造に組み入れられるようにする；
- 地球の私たちの必要を満たす能力に見合う形で、資源を公平に再分配する。
- 地球という惑星の抱える問題のとてつもない大きさを考えると、上に述べた助言は単なる絆創膏くらいにしか見えないかもしれません。しかし、私たちに救い主が訪れた時、救い主が産着にくるまれ、かいばおけに寝かされていたこと（ルカ2：6）、そして、私たちの会の創立者の回心がハンセン病者を抱きしめるという単純な行為の中で起こったことを忘れてはなりません。

D. 祈り

太陽の歌

いと高い、全能の、善い主よ、

賛美と栄光と誉れと、

すべての祝福はあなたのものです。

いと高いお方よ、このすべては、あなただけのものです。

だれも、あなたの御名を呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように、
すべての、あなたの造られたものと共に。
太陽は昼であり、あなたは太陽で私たちを照らされます。
太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、
いと高いお方よ、あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように、
姉妹である月と星のために。
あなたは、月と星を天に明るく、貴く、
美しく創られました。

私の主よ、あなたは称えられますように、
兄弟である風のために。
また、空気と雲と晴天とあらゆる天候のために。
あなたは、これらによって、御自分の造られたものを扶け養
われます。

私の主よ、あなたは称えられますように、
姉妹である水のために。
水は、有益で謙遜。貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように、
兄弟である火のために。
あなたは、火で夜を照らされます。
火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように、
私たちの姉妹である母なる大地のために。
大地は、私たちを養い、治め、
さまごまの実と色とりどりの草花を生みだします。

私の主よ、あなたは称えられますように、
あなたへの愛ゆえに赦し、
病いと苦難を堪え忍ぶ人々のために。
平和な心で堪え忍ぶ人々は、幸いです。その人たちは、
いと高いお方よ、あなたから栄冠を受けるからです。

私の主よ、あなたは称えられますように、
私たちの姉妹である肉体の死のために。
生きている者はだれも、死から逃れることができません。
大罪のうちに死ぬ者は、不幸です。
あなたの、いと聖なる御旨のうちにいる人々は、幸いです。
第二の死が、その人々をそこなうことは、ないからです。

私の主をほめ、称えなさい。
主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。

IV-更なる考察のために

聖書から

1. (27)神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。(・・・)(29)神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。(30)地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。(31)神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。(創世記 1:27, 29-31a)

(8)主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。(9)主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。(10)エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた。(・・・)(15)主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。(創世記 2:8-9, 15)

2. (19)被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。(20)被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。(21)つまり、被造物も、いつか滅びへの

隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。(22)被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。(23)被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。(ローマの信徒への手紙 8:19-23)

3. (1)わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。(2)更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。(3)そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、(4)彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のは過ぎ去ったからである。」(5)すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言われた。(ヨハネの黙示録 21:1-5a)

教会の公文書から

1. 「現代人は自分が生産するもの、つまり自分の手労働だけでなく、知能労働と意志の傾向の成果に脅かされているように思われます。

[・・・]

人間の生産物そのものが人間に対して引き起こしているこのような脅威の状態は、さまざまな方向に、さまざまな度合で表れています。私たちが住んでいる地球の利用が、合理的で正当な計画を要求していることを私たちはますます理解して来たようです。同時に産業的な目的のためだけでなく、軍事的な目的のための利用、そして合理的かつ真の人間主義的領域に組み入れられない無統制な技術の発達、しばしば人間の自然的環境を脅かし、人間を自然との関係から疎外し、隔絶することになりますが、人間は、自然環境が直接の使用と消費に役立つものであるということ以外の意味をしばしば理解していないようです。しかし創造主が人間に自然との関わりを持たせたのは、自然の知的で高貴な“主人”かつ“管理者”とするためであって、その無思慮な開発者や破壊者にするためではありませんでした。

技術の進歩と技術支配を特徴とする現代文明の発達は、道德生活と倫理の面で、それに相応する進歩を要請しています。しかし、これは残念ながら常に遅れをとっているやに思われます。そのために、技術の進歩は、目覚ましいものがあり、そこに創世記の創造の記事の中ですでに実り豊かな種として語られている人間の偉大さの真のしるしが、容易に認められるとは言え、数々の不安を生みださざるをえません。その第一の不安は最大かつ本質的な問題に関わるものです。実際、人間が創意者かつ推進者となっているこのような進歩は、地上における人間生活をあらゆる面で、“より人間的なもの”、“人間にとってよりふさわしいもの”にしていますか。色々の面でそのようなものになっていることは、疑いを入れる余地はありません。しかし本質的な問題に関しては、そのような疑問がしつこく戻って来ます。すなわちこのような進歩の枠

の中で、人間は人間として、より良いもの、つまり精神的により成熟したもの、自分の人間性の尊厳を一層意識するもの、責任感の一層強いもの、他人、とくに最も貧しいものや弱いものに一層開かれたもの、すべてのものを援けるために一層よく用意しているものに実際になれるかという疑問です。」(レデンプトル・オミニス 15)

2. 神は人類に真理を探究する無数の方法をお与えくださいましたが、中でも、聖フランシスコがとった道はもっとも豊かで示唆に富むもののように思われます。彼はその独創的で魅惑的な体験によって、実に多くの人々を魅了しています。フランシスコは現代の人々に接するとき、そのことを心に留めなくてはなりません。[・・・]

フランシスコニズムは現代社会、特に先進工業国に対して訴えるべきたくさんメッセージを持っています。現代社会は、消費主義にとらわれ、飢えのために死んでゆく何百万もの人々の苦しみを忘れています。フランシスコニズムは、平和を推進するどころか、戦争のために武装する人々や、自然界に配慮せず、むしろ自然界を汚染する人々に対して訴えることができます。そうした人々は、フランシスコが賛美したこの地球をほとんど敵にしています。そのために、あなた方はフランシスコとして、現代の人々に健全な考え方を示しつつ、また、ものの正しい使い方を教えつつ、一つの答えを提示するように求められています。あなた方は彼らが、啓発されて調和のとれた態度という特徴を持つ良心を形成するのを助ける必要があります。あなた方がそのようなはっきりした形で関わるならば、平和と人類の発展を促

進するのに、また、真のキリスト教的な価値観を回復するのに大いに役立つでしょう。あなた方は、福音的な清貧の聖人の息子として、また平和の人・自然界の友人の息子として、現代の人々にフランシスコのメッセージ、すなわち、良心と社会を新たに目覚めさせる力のゆえにいつの時代にも現代的なメッセージを伝える最良の道具を備えているのです（1989年、ヨハネ・パウロ2世のコンヴェンツアル・フランシスコ会の総会での講話）。

3. 生態系に本来のバランスを与えるには、世界に実在する貧困の構造に対して直接に問いかけることが避けられないともいわなければなりません。例えば、多くの国に見られる農村の貧困と土地の不公平な分配状況は、生計のための無理な農業、そして土壌の疲弊をもたらしました。土地が不毛になれば、多くの農民は新しい土地を得るための伐採・開拓をします。こうして歯止めもなく森林伐採が加速されます。彼らはまた、受け入れ準備のない都市中心部に移住しようとしています。同様に重い債務を負った国々は、生態系の均衡を破るという取り返しのつかない代償を払いながらも、輸出産業促進のために、自然という共有財産を破壊し続けます。このような状況では、貧しい人々だけに問題の責任を負わすのは正しくありません。貧しい人々にも、他のすべての人と同様に、大地が委ねられているのであり、彼らが貧困から抜け出すことを可能にする方法をこそ見いださなければならないのです。そのためには、民衆と国家の新しい関係が要求されると同時に、大胆な構造改革が必要です。[・・・]

現代社会の生活様式を真剣に反省しないかぎり、環境問題に対する解決を見いだすことはできません。今日の世界はどこでも、

手軽な満足を求め消費に耽っていながら、それが環境を破壊することに無関心であり続けます。すでに指摘したように、環境問題の深刻さは、人類がいかに深い倫理的危機に陥っているかを示しています。人間の身体、人間の生命の価値に対する畏敬を欠くならば、他者に対しても地球自体に対しても関心をもてなくなるでしょう。簡素、慎ましき、節制、犠牲の精神などが日常生活の一部とならなければ、一部の人の惰性が引き起こす事態ゆえに全人類が苦しむことになるでしょう。生態系に対する責任を教えることは緊急な課題です。それは、自分自身に対する、他者に対する、そして地球に対する責任です。こういう教育は、単なる感傷や、内容のない願望を土台にすることはできません。その目的が一定の主義や政治であってもいけません。現代世界を否定したり、“失われた楽園”に戻りたいという、漠然としたあこがれを土台とする教育であつてもなりません。責任についての正しい教育は、思想と行動の、全面的回心を促すべきものです。諸教会や宗教団体、非政府組織や政府の組織、社会の全構成要素は、それぞれの教育を行うにあたって一定の役割をもっています。

(1990年11月13日、第23回世界平和の日に寄せたヨハネ・パウロ2世のメッセージ)

4. 最後に、聖体の靈性は、社会構造をも変えることのできる大きな力をもっています。キリスト信者の民は、感謝の祭儀を通じて神に感謝をささげます。そして、こうした聖体の靈性を育てるために、自分たちがこの感謝を、被造物全体を代表して、世の聖化を望み、世の聖化のために熱心に働きながら行うのだということを実感しなければなりません。聖体そのものが、人類の歴史と

宇宙全体を照らす力強い光です。私たちは、このように秘跡によって照らされます。そして、教会のあらゆる出来事が、神がご自身を知らせ、私たちに語りかけるためのいわばしるしであることを、日々学びます。こうして、聖体に生かされた生活の形は、私たちが歴史と世界を解釈する上での思考方法を真の意味で変革するために役立ちます。典礼そのものがこのことを教えてくれます。すなわち、供えものを供える際、司祭は、「大地の恵み、労働の実り、私たちのいのちの糧」であるパンとぶどう酒について、賛美と祈願の祈りを神にささげます。このことばによって、典礼は人間のあらゆる活動と労苦を神へのささげものとし、それだけでなく、私たちは世界を神の被造物と考えるように導かれます。世は私たちが生きていく上で必要なものをすべて与えてくれるからです。世は、人間が何も考えずに気のむくままに利用できる、中立的で純粋な物質のようなものではありません。むしろ世は神のいつくしみ深い計画の一部です。この計画の中で、私たちは皆、神の独り子であるイエス・キリストにおいて神の子となるよう招かれています（エフェソ 1. 4-12 参照）。キリスト教の希望は、世界の多くの地域に見られる環境危機に対する正当な関心を強めます。私たちはこの希望によって、被造物の保護のために責任をもって努めるからです。聖体と秩序ある宇宙の関係によって、私たちは神の計画の統一性を知ることができるようになります。また、創造と、新しいアダムであるキリストの復活によって始まる「新しい創造」の間の深い関係を理解できるようになります。私たちは洗礼によって、この新しい創造にすでに今からあずかります（コロサイ 2. 12-13 参照）。聖体によって養われるキリスト教的生活は、新しい世—新しい天と地—をかいま見させます。そのとき、新し

いエルサレムが、「夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて」
(黙示録 21.2)、天から、すなわち神から下って来ます。(ベネディクト 16 世の使徒的勧告「愛の秘跡」92)

フランシスコ会の資料から

1. 追放の地で巡礼しながら、大急ぎで家に帰ろうと思う人のように、あの幸いな旅人フランシスコは、この世にあったすべてのものの中に、大いなる支えを見いだしていたのである。すなわち彼が、「闇の権力者たちに対抗」しなければならないときに、世は彼にとって戦場となり、また、神に心を向けようとするときには、世は澄んでいる鏡のようになって、彼に神の慈しみを示していたのである。事実フランシスコは、自然の造られたすべての物事において、すべてをお造りになったお方に心を向ける手段を見いだした。「主のみ手がなされたすべての業において歓喜し」(詩篇 92.5)、それらの喜ばしい景観を見て、それらの命の源である方のもとに飛翔していた。もろもろの物の美しさは、彼に最も美しいお方を現し、自分が味わっていたすべての良いものは、「私たちが造られた方こそ最も良いものだ」と彼に叫んでいたかのようであった。そういう訳でフランシスコは、どこでも、すべての物事の中に、自分が愛しているお方のみ跡を見てたどり、そのお方の玉座のもとに達するためのはしごとして、その物事を使っていたのである。フランシスコはまた、すべての物に対しては、今まで聞いたことのない特別な愛情を示し、これらに主について話したり、神様を賛美するようにこれらを招いたりするほどであった。彼は、灯、ランプ、蠟燭などにおいては、永遠の光のシンボルを見付け、

自分の手で消そうとせず、また石の上を歩くときには、「岩」と言われた方（1 コリント 10. 4）を思い出して尊敬深くその上を歩くのであった。そして、詩篇の中にある「あなたは岩の上に私を上げられた」（詩 61. 3）という句を唱えるとき、より深い尊敬を表そうと思って、「あなたは岩の足もとまで私を上げられた」と言っていた。そのほか彼は、兄弟たちに木を切る際に、まだ芽生えるチャンスを与えるために、全部切り落とすことを禁じた。なお草の緑と花の美しさが季節ごとに、すべてのものの父であるお方の素晴らしさを告げることができるよう、庭の世話をする兄弟に、庭のある部分をそのまま残すようにと命じたのである。同じく、庭に香り良い植物と綺麗な花のために、特別な場所が設けられるようにと頼んだ。それは、これらを見る人々に永遠の甘美さを思い起こさせるためであった。彼は、道で人々の足に踏まれないように、小さな虫けらを拾いあげ、冬の厳しい寒さのために飢えて死ぬことがないように、蜜蜂に蜜と良いぶどう酒をもって来させていたのである。すべての動物のうちに、柔和なものを特別に愛していたが、みな、「兄弟」の名で呼んでいた。でも、このようなことについて、誰がすべてを語り尽くすことができよう。実に、世の終わりに、「すべてにおいてすべてである者」として現れる、善の源であるあの慈しみが、すでに聖人の目には、「すべてにおいてすべてであるものとして」明らかに見えていたのである。（2 チェラ 165）

2. これらすべてのことを通して、神への愛をかきたてられたかれは主のみ手によるすべてのわざをよろこび、これらの喜びの源となる現れから、それらすべてに生命を与える原理でもあり、原

困でもある方へと心をあげていくのだった。美しい事物の中に、かれは美そのものを見、被造物の上に刻まれた痕跡を通して、かれはいたる所で愛する方に従い、すべてのものをはしごととして、完全に望ましい方のもとに登り、その方を抱きしめるのであった。

先例を見ない敬虔な感情をもって、かれは、あらゆる、すべての被造物の中に、すべてのものの源である善を、小川の中に泉の水を味わうように味わうのであった。そして神が与えられた力や活動の調和の中に、かれは天の調和を感じ取り、預言者ダビデのように、それらすべてのものに向かって神をほめたたえるようにとすすめるのであった。(ボナヴェントウラの大伝記 9.1)

3. その他の参考文献：1 チェラ 77、79, 81; AC 88。

4. 人間の生活と活動の個人的な部分に影響を与えるような困難さのほかに、無限の協力を緊急に必要とする非常に重要な問題があります。それは、私たちと環境との関わりです。この分野において、人類は時としてなんと修復不能なダメージを与えてしまったことでしょうか。それに伴い、こうした傾向をくつがえすように、そして地球を汚染の影響と核エネルギーの使用による危険から守る努力をするようにとの声が多く聞かれます。しかし、今のところ私たちには、これらを選択して実行するための十分に練られた明確な動機が欠けています。そこで私たちに求められているのは、フランシスコが再発見し広めた神の計画に従って、人類と自然との関係に対する人々の理解を深めることです。私たちは地球を利用するように招かれてはいても、所有するようには言われていませんし、地球を乱開発するのではなく、尊重するように

招かれているのです。工業大国の論理は、生活の質を大切にする方向へと移行するべきです。人々は最近ますますそれを望んでいるのですから。それゆえ、私たちはこの問題に対して無関心であることは許されません。そこで、すでに環境保護に取り組んでいる大きな組織と協力することは、時宜にかなっているだけでなく、必要なことでもあります。(フランシスカン家族の総長による「アシジの精神」、1987年4月16日)

被造物の保全についての生涯養成

1. 父であり至高の善である神の強烈な体験は、聖フランシスコの生活の特徴づけ、神の驚くべきわざのゆえに創造主への感謝と賛美の態度を聖フランシスコにもたらし、彼をすべての人々とすべての被造物の兄弟とさせた(養成綱領 37)。

2. すべての兄弟や入会志望者たちは、善を行って悪に打ち勝ちながら (cf. 会憲 68 § 1) 彼らの行いによって平和と正義を説くことへ養成されるべきである。また彼らは、他の者を平和の構築者、創造物を保護する者となるように誘いながら、造物主のしるしとして、被造物に尊敬の念を示すべきである(養成綱領 86)。

この養成は、現代の課題に応えるような、フランシスカン神学の提案を目指す：

— 創造主への賛美を育み、被造物の尊重を人々に教え、現代の環境生態問題に信仰の光をあてるような創造の神学(養成綱領 227)。

3. 人間は被造物を道具として利用したがる傾向があるが、小さき兄弟は、聖フランシスコの模範にならい、被造物を尊敬と服従の態度で賛美する対象と考える。この態度は小さき兄弟に、被造物への接し方と学び方においてきわめて独特な考え方を与える（勉学綱領 49）。

会は、「すべてにおいてすべてである者」を取り戻し、被造世界における神の現存の輝きと慈しみの光線を称え、それらの光線との「兄弟的な関係」を大切にし、生活の質の向上に寄与し、被造物のバランスを保護するために、正確で自然に即した環境科学のために献身的に働くように兄弟たちに勧める（勉学綱領 50）。

4 何一つとして自分のものにしてはならない

会憲

第 72 条 (1) この世にあっては旅人、寄留の身である兄弟たちは、個人としての所有を放棄し、会則に従って、家も、土地も、他のいかなるものも、自分のものにしてはならない。それゆえ自分自身と、生活および活動のために使うすべての物を、貧しさとへりくだりをもって、教会と世界への奉仕のために役立てる。

(2) 兄弟たちのために建てられる建物、および兄弟たちが自分たちのために買ったり、使用したりする物は、その地域と時代の状況に応じて、清貧にふさわしいものでなければならない。

(3) 兄弟たちの使用に任された財貨は、管区規則の正当な配分に従って、貧しい人々のために分かち合う。

第 73 条 兄弟たちの生活や仕事に必要な建物や財貨の所有権は、兄弟たちが仕えている人々、すなわち、後援者、教会、または聖座のもとに実際的にとどまる。

第 74 条 (1) 本会への入会希望者が財貨を所有している場合、有期誓願を立てる前に次の方法でそれを処分する。すなわち、所有権は本人にとどめ、有期誓願の継続中の管理権、使用权および用益権は、有効な文書をもって本人が望む者に委ねる。但し、本会に委ねることはできない。

(2) 正当な理由により、これらの処分を変更し、財貨に関する

るなんらかの行為を行う場合、管区規則の定めに従った管区長の許可が必要である。

第 75 条 (1) 会則にもとづいた清貧の誓願の効力により、荘厳誓願を立てようとする者は、その誓願を立てる前に、現に所有しているか、または遺産相続によって将来必ず所有することになる、すべての財貨の所有権を、誓願を立てる日から効力を持つ文書によって放棄しなければならない。財貨は、本人が望む人に、できるかぎり貧しい人々の益となるように処分する。いかなる形にしろ、自分のために何かを残しておくことは許されない。

(2) 兄弟たちは誰も、いかなる口実のもとにも、誓願を立てようとする者に、自分自身のため、あるいは本会のために何かを取っておくよう勧めるようなことがあってはならない。

(3) 管区規則は、荘厳誓願を立てる前に行う財産の放棄が、誓願を立てた日から民法上でも効力を持つようにするために必要な事項を定める。

I-考察のために

会憲第72条から引用した上記の文章は、以下に述べる考察の基盤をなしています。第72条のテーマは財産の放棄です。72条では、フランシスコ自身の優先的選択と、創立されてから現在に至るまでの会の優先的選択がまとめられています。そこには、個人としての所有権の放棄だけでなく、私たちの生活の一部である会としての所有権の放棄も述べられています。第二段落では、このテーマの具体的、物質的な側面に焦点を当て、「兄弟たちの建物や兄

弟たちが自分たちのために買った、使用したりする物」について述べられています。

第72条は、財産の放棄に関する一般原則を述べたのちに、兄弟たちはすべての物を「生活および活動のために」役立てることができることも述べています。この物品の使用は、「貧しさとへりくだりをもって、教会と世界への奉仕のために」生かされる時、正当化されます。従って、教会と世界への奉仕は、物品の使用を正当化すると同時に、物品の真の重要性をも示しています。すなわち、それらは私たちのためではなく、私たちが奉仕する人々のためのものであるということです。

フランシスコが「遺言」の中で言っていることを考えてみてください。「兄弟たちは、聖堂・小さな貧しい住居・その他、自分たちのために建てられるすべてのものが、会則の中で私たちの約束した聖なる清貧にふさわしくなければ、決して受け取らず、常に寄留者および旅人として、そこにとどまるよう、注意しなければなりません」²⁵。

ですからフランシスコ自身も、晩年には、物（聖堂や貧しい住居）を受け取り・使用することを認めています。それには、「会則の中で私たちの約束した聖なる清貧にふさわしい」基準を満たすという条件があるのです。第72条の第二段落は、フランシスコのこれらの言葉を忠実に反映したものです。

1. この態度を形成する諸原則

フランシスコ的な用語を使えば、この清貧の選択は、「何一

²⁵ 遺言 24

つとして自分のものにしない」という言葉で表現されています。会則は福音的な生活を指し示すのにこの表現を使っていますし、私たちの誓願文も、各々の兄弟は「従順に、何も自分のものとせず、貞潔に」生きることを誓うとなっています。この「何も自分のものとせず生きる」²⁶という選択の基盤となっている諸原則について、ざっと目を通して見ましょう。

a. すべての善いものは神から来る

何も自分のものとしな生活は、すべてのものは神から来るものであり、それゆえに、何も自分に属するものはないのだという信念に由来しています。「土地は神のものであり」、すべては神から来るものであるがゆえに、誰も何も自分の所有物とすることはできないということを、聖書は私たちに教えています²⁷。この信念をフランシスコはたびたび表明し、いく度も、神だけが「全き善、あらゆる善、欠けることのない善、まことの至上善であり、神おひとりだけが善い方で」²⁸、神にこそすべては帰され、「あらゆる善はただひとり善い方にまします神に属する」²⁹と述べています。フランシスコは、善について語る時、霊的な善だけでなく物質的な善のことも指しています。霊的な善とは、私たちの天賦の才、能力、よりよく物事を為すための知識を指します。いかなる功績も自分に帰することはできません。むしろ、天賦の才や

²⁶ 裁可会則 1,1

²⁷ レビ記 25,23、出エジプト記 9,29、申命記 10,14、詩篇 24,1;47,8、イザヤ 66,1 参照。

²⁸ 未裁可会則 23,9、全キリスト者への手紙 II,62 参照、訓戒の言葉 7,4;8,3;12,1。

²⁹ 未裁可会則 17,18。

能力と思われるものはすべて、神から来るものなのです。物質的な善、たとえば、私たちが使用したり活用したりする物は、私たちの所有物ではありません。なぜなら、それらは神から来るものなので、言葉の十全な意味において神にのみ属するからです。私たちは物の管理を任されているだけなのです。ですから、誰も所有権を主張することはできません。

フランシスコは、これについて思い違いをして、自分が所有者だと思い込む人が多いことによく気づいていました。だからこそ、彼はそうした罫にはまらないようにと、次のように警告したのです：「あなたたちは、現世において何も持っておらず、来性においてもそうであるのに、この世の空しいものを長い間所有できると考えています。・・・そして、自分の所有だと考えていた、あらゆる富と権力、知識と知恵が彼らから取り上げられます」。³⁰

このような態度は、フランシスカンの神学的伝統においても維持されています。ドゥンス・スコトゥスは、トマス・アクィナスとは対照的に、原罪のない状態の時には所有権というものは自然法的にも神の法においても存在しなかったと主張しています。彼によれば、アダムとイブの原罪の後に初めて自分のものと他人のものとの区別が必要になったというのです。³¹ゆえに、私的財産というものは、罪の不可欠の結果として、二次的な形で現れたにすぎません。それどころか、所有権は、それによってより大きな害悪、つまり、所有権がないために弱者にしわ寄せが行くような害悪を避けるための手段であると考えられることもできます（私有地への所有権があればこそ、弱者は強者の支配から身を守ること

³⁰ 全キリスト者への手紙 I,13-16。

³¹ John Duns Scotus, *Ordinatio*, IV, distinction 15, quaestio 2, n.3-9 参照。

ができるという主張)。すべてのものは最終的に神に帰するとし、私的財産を規制しようとする社会契約を主張するこの理論は、さぞかし強烈なインパクトを与えることでしょうか。このような理論は、ごく最近の教会の社会教説に沿ったものでもあります。

また、すべての善は神から来るとの確信は、何も自分のものとせず生きるという誓願を明確なものにしてくれます。この誓願を単に禁欲的な徳とみなすのではなく、真理を生き抜く手立てとして考えるべきです。所有を放棄したフランシスカンは、自分のことを例外的に徳の高い行動を成し遂げた英雄と考えてはなりません。むしろ、所有を放棄するということは、ものの真理を謙遜に認めることなのです。なぜなら、実際に神だけがすべてのものまことの所有者であられるからです。私たちにできることは、この真理を心に留めることだけです。よくあることですが、この場合も、謙遜はまさに真理なのです。

b. 他者との関係において貧しい人

アシジのフランシスコは、すべての人々に貧しさの専門家とされています。ですから、彼がその書き物の中で特に貧しさを他者との関係と結びつけようとしていることに注目することが大切です。人は持っている物を数え上げることによってではなく、他者との関係を理解しようと努めることによって自分の貧しさのレベルを判断します。

「訓戒の言葉14」では、「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」という山上の垂訓の一つが述べられています。フランシスコはこの福音書の言葉を物質的な貧しさ

と結びつけただけではなく、他者との関わり方とも結びつけています。彼は続けてこう言っています：「祈りや信心業に励み、自分の体に厳しい断食や苦行を課しながら、自分の体への侮辱だと思われるただひと言のために、あるいは、自分から取り上げられた些細なもののために、躓いて、すぐに心を乱してしまう人が大勢います。こう言う人は心が貧しくありません。」その人が真に貧しいかどうかは、隣人との関わりにおいて見極められます。侮辱された時とか、些細なものであっても、ものを取り上げられた時に、人はどのような反応を示すでしょうか。

「訓戒の言葉11」にも、似たようなことが書かれています。「どんなことにも怒らず、心を乱さない神のしもべは、何も自分のものとせず、正しく生きています。」³²何も自分のものとせずに生きることとはどういうことかを、フランシスコは「どんなことにも怒らず、心を乱さない」人のことを例に出して、分かりやすく説明してくれています。ここでもまた、何も自分のものとせずに生きる人の貧しさは、隣人との忍耐強く穏やかな関係と結びついています。怒りと心の乱れは、フランシスコがしばしば警戒した二つの態度であり、深い所有欲を現わしています。なぜなら、怒りと心の乱れは外面的なことから引き起こされるからです³³。怒りは、私が自分の兄弟姉妹の上に立っていると思込み、兄弟姉妹が自分の思い通りに行動してくれないから怒っていることを示しています。

上に述べた「訓戒の言葉」はほんの二例にすぎません。フラン

³² 訓戒の言葉 11,3。

³³ 訓戒の言葉 11,2-3;27,2; 未裁可会則 5,7;10,4; 裁可会則 7,3; 全キリスト者への手紙 II,44。

シスコの書き物の中には、何も自分のものとせず生きることは単に物質的なものを指すのではなく、隣人との関わり方をも意味するものであることを明記した箇所がたくさんあります。³⁴

このような貧しさの捉え方は、小ささと密接に関連しています。小ささについては、この文書の別の箇所でも触れてあります。貧しさに対するこのような考え方は、現代文化において主流を占める是が非でも獲得し、成功したいというメンタリティに代わるものを提示しているという点で、反体制的文化であると言えます。

c. お返しすること

フランシスコにとって、貧しさはお返しするという考え方につながっており、お返しするという行為そのものなのです。彼の生活に関するいくつかのエピソードが初期の伝記作家によって書かれています。それらはこの点でとても重要です。³⁵フランシスコにとって、貧しい人にマントを与えることは、お返しすることにほかならず、それこそは正義であったのです。自分より貧しい人にマントを返してあげなかったら、まるで自分が盗人のような気分になっていただろうと後にフランシスコは述懐しています。フランシスコはその書き物の中で、「あらゆる善の所有者である至高の主・神にすべてを返し」³⁶、主に感謝を捧げる³⁷ようにとしばしば私たちに勧めています。感謝と賛美を捧げる行為は、お返しすることの一環なのです。

³⁴ 訓戒の言葉 5,5-8;7;8,3; 未裁可会則 14;17,4 参照。

³⁵ 2 チェラノ 87;92 参照。

³⁶ 訓戒の言葉 7,4;11,4;18,2;28,1; 未裁可会則 17,17 参照。

³⁷ 長上への手紙 I,7; 全キリスト者への手紙 II,61; 未裁可会則 17,18 参照。

私たち小さき兄弟にとっては、お返しすることは、貧しい人々や困っている人々を助ける活動に携わる時に心に留めておくべきよき要石となります。貧しい人々のために働くということは、兄弟姉妹よりも高い位置に身を置くことでも、自己満足のために行うことでもありません。そうではなくて、神からいただいたものを神の選ばれし人々、すなわち貧しい人々にお返しする行為なのです。前にも述べましたが、ここでも、ものをお返しするということは高潔な行動ではなく、真理を生き抜くことに関わる行動です。すべてのものが神から来るならば、すべては神と兄弟姉妹にお返しせねばなりません。これは、慈善行為と言うよりも正義の問題なのです。

大規模な提案について考える場合も、お返しするという観点から考えるとよいと思います。たとえば、キリスト生誕2000年祭の準備としてずいぶん議論された南半球の債務国の債務免除について考えて見ましょう。これは、慈善的な行為として捉えられる傾向がありますが、慈善的行為というよりはむしろ、昔植民地で今は独立した国々に返還するという問題なのです。従って、お返しするという考え方は、国家間の関係を理解する上でも非常に役立つものです。

私たちが貧しい人々のために行う活動も、お返しするという考えを反映しています。困っている人々を助けるために、篤志家からお金を寄付していただくことがよくあります。その場合私たちは、そのお金を私たちの活動を通して貧しい人々に還元します。このような場合もやはり、基本になっているのはお返しするという考え方です。

2. 私たちの物質的な貧しさ

これはデリケートで難しい問題です。なぜなら、物質的貧しさは概して、私たちの日常生活のあり方を正確に表現するものではないからです。このことは、誰の目にも明らかな富める西洋諸国においてのみならず、他の国々においても言えることです。そこでも、兄弟たちの生活水準は通例として貧しい人々の生活水準よりも高いのです。

この問題について議論すると、たいていの場合陳腐な言葉か非難の言葉が返ってきます。陳腐にもならず、非難もせずに、私たちの貧しさは常にやや異例であることを認める必要があります。私たち兄弟も、フランシスコも、完全に不安定な状態に置かれることはまずありません。フランシスコのように、私たちは兄弟生活から来る安定（経済的安定も含めて）を享受しています。私たちは兄弟たちに頼ることができるのです。兄弟たちに頼れるからこそ、貧しい人々が通常持っていない未来の安定が私たちにはあるのです。それは私たちが手放すことのできないものです。なぜなら、それを手放すことは兄弟共同体を手放すことになり、私たちの生活においては、兄弟共同体はおそらく貧しさ以上に重要な価値あるものだからです。また、物質的には貧しくとも、私たちには教育と文化的な教養があり、それが私たちの豊かさとなっていることを忘れてはなりません。

さらに、現代の用語で、また、兄弟としての私たちの生活の枠内で使われる「清貧」（その歴史的な重要性のゆえに、恐らく私たちが手放すことのできない清貧）という言葉は、ものが完全に欠乏している状態を指すものではなく、むしろ、世界に広まって

いる消費文化に対抗する姿勢としての、責任ある正当なものの使用、つまり、「**足るを知る**」という態度を指します。次に、清貧はより大きな貧しさへとつながる道を示すこともあります。物質的な意味も含めて、今まで以上に貧しくなりたいならば、私たちは自分の使っているものを現代の貧しい人々と分かち合うことから始めます。そうすれば、分かち合いが自分をより貧しくするための良い方法であることが分かるでしょう。この分かち合いは、前に述べたお返しするという考え方から発展したもので、貧しい人々との連帯を要求します。それは、これまで蓄財の危険から常に身を守ってくれたフランシスカンの伝統に真の意味で応えるためです。私たちは物品や金銭やいかなる資産も貯め込みたくはありません。むしろ、それらを兄弟たちと分かち合い、そうすることによって神にお返ししたいと思います。それと同時に忘れてはならないことは、フランシスコが貧しさよりも貧しい人々を好んだということです。貧しさとか清貧について抽象的な議論をすると、行き詰まってしまいますが、貧しい人々について、彼らと生活を共にすることについて話すならば、具体的で、フランシスコの基盤となっている直観にたどりつくことができます。

これらすべてのことをどのように実践しているかは、財務担当の兄弟たちが提出する報告書によって、また、私たちが受け取る物について私たちが行う選択において、私たちが取引する金融機関の選択において、その他の多くの具体的な日常生活の側面において確認することができます。

II-体験の分かち合い

私たちが**何も持たない (sine proprio)** 人間になった時、「私たちに与えられているあらゆるよいものは、私たちの所有ではなく、皆と分かち合い、皆に返されるものである」(LSR: 2006年臨時総集会総括文書「主は道々私たちに話してください」19)ことを認識できます。2006年の臨時総集会がはっきりと呼び覚ましてくれたこの「賜物に対する理解」によって、何も自分のものとしめない生き方についての新しいダイナミックな考え方が可能となります。

ものは、すべての被造物と連帯して分かち合うべき神の賜物ですが、私たちはこの**sine proprio (何も持たない)** という表現を単に無所有の問題としてではなく、自由という概念に照らして理解する必要があります。この表現は、人間はすべての物を所有したがるといってお節介で高圧的なエゴを持っているということに基づ盤にして、自由を捉えています。

Sine proprio (何も持たない) はそれ自体、他者との関係において生きるべき生活の中で与えられる賜物のことを指しています。この意味で、貧しく十字架に架けられたイエスに従う弟子たちの成熟は、すべてのものはお返しするべき賜物であることを認識しつつ、「心の貧しい人に」になることから始まります。「創造者の似姿である私たちは、神の賜物の受容者です。生命の所有者ではありませんが、いと高き神から賜物として生命を絶えず受けています。私たちは神の絶えざる自己贈与に倣って人々に自分を与える能力、しかも無償で与える能力を持っています」(LSR 22)。

神、自分自身、他者、物との関係をこのように新しい展望で捉えるならば、さまざまな文化や他の宗教の人々の間に住まう兄弟たちの体験を聞くことができます。リビアとトルコで静かに人々

に交じって暮らす兄弟たちの存在は、特にイスラム教徒の間に、愛の力というものを証ししています。兄弟たちは、最も小さき人々のために働くこと、たとえば、尊敬の心で彼らの話に耳を傾けるとか、非暴力に徹してそこに留まることによって、愛を示しているのです。同様に、ギリシャ正教会の人々と共に暮らすことによって、偏見を捨て、身構えることなく、自分とは異なる人々に接し、理解するチャンスが与えられます。

自分の居心地のいい領域に留まっていたら、**sine proprio**を理解し、実践することは難しいでしょう。「私たちの教師である」貧しい人々（会憲91, 93）が道を示してくれます。コロンビアの疎外された人々のために福音的精神で献身的に働く兄弟たちの存在は、貧しい人々から学ぶことが多いこと、そして、何も自分のものとせず生きるという私たちの約束を新しい方法で表現することができることを具体的に示しています。

また、これとは全く状況が別ですが、ドイツでトルコからの移民たちの間に暮らす兄弟たちの存在も、西洋世界に築かれた新たな障壁を取り除く実例を示しています。このような実例は、「善良な」キリスト教徒の中にも芽生えがちな、自分とは異なる人々に対する不信感や恐れを払拭する励みとなります。

これらの体験は、私たちが**sine proprio**を自分自身や他者との新しい関係において、また、兄弟関係のなかにおいて再発見することができることを示しているのです。そのようにして初めて、貧しさは私たちに前を向いて歩きなさい、そして、交わりという未知の地平線に対して心を開きなさいと促す希望と愛のしるしとなるのです。

1. コロンビアの難民との兄弟的な生活

シンセレホは、人口およそ35万人のカリブ海に面したコロンビアの町です。そのうち、6万4千人はコロンビアを襲った内戦から逃れてきた難民です。この小さな町を取り巻く悲惨な地域には、最も基本的な公益事業が欠けています。飲料水がないために、特に皮膚病や胃腸障害などのひどい健康被害が生じています。高圧送電線は違法なものであり、電話システムもありません。

使徒聖パウロ管区の小さき兄弟たちは、これらの地域の真ん中に兄弟共同体を作りました。共同体はサン・ダミアノという名前で、4名の兄弟が住んでいます。兄弟たちは、イエスが兄弟フランシスコに言われた「崩れかけた私の家を建て直しなさい」との言葉を絶えず思い起こすことによって、共同体の名に恥じない生活を送っています。

兄弟たちは、聖人伝のこの一節を深く味わいつつ読みながら、主が彼らにも今日語りかけておられる声を聞いています：「兄弟たちよ、崩れかけている私の家を建て直しなさい。暴力によって切り裂かれた社会機構を修復しなさい。暴力によって阻害された生活プロジェクトを建て直しなさい。暴力によって破壊された民衆のための組織を建て直しなさい。この暴力が始まる前までは小規模農家を結びつけていた昨日の組織を建て直しなさい。人々の信頼を取り戻しなさい」と。

これらの修復は、社会科学の助けなくしては、また、極めて協力的なミクロ経済を打ち立てなければ達成できないことを、兄弟たちは知っています。また、そうした道具があっても、クララとフランシスコの生活を鼓舞した神の霊の力がなければどうにもな

らないことも彼らは知っています。それは、聖トーマス・モアがその有名な著書「ユートピア」で描いている霊のことです。

だからこそ、フランシスコとクララに啓発された在世フランシスコ会のグループは、この再建の仕事に取り組むべく、聖トーマス・モア財団を設立したのです。フランシスコとクララは、自分たちの仕事が新しく建築することではなく、すでにイエスが築かれた使徒的な土台の上に立て直しを図るものであることを理解していました。聖トーマス・モア財団の信徒たちは、サン・ダミアノ共同体の兄弟たちと共に、長い期間をかけて築かれた根幹と知恵を持つ人々の文化という堅固な土台の上に、再建作業を行っているのだということを知っています。そうした文化のルーツには、土着のゼヌ族の先祖代々の伝統文化や、スペインの植民地であったころからこの地に住み着いているアフリカ系コロンビア人の伝統文化、アフリカ先住民との混血スペイン人 (Mestizos) 、そして、土着人の子孫とスペイン人とアフリカ人と混血スペイン人 (Mestizos) の伝統文化が含まれます。

この場所では、詩篇にあるように、正義と平和が再び芽生え、接吻を交わしています。何をしても罰せられないような特権のあるところに正義を打ち立てることはできませんし、正義が覆い隠されているようなところに平和を打ち立てることもできません。この正義と平和を実現するためには、霊に照らされた真理の光で、殺人者の残酷さを明るみにさらけ出すことが必要です。そうすることによって、虹色に輝く希望をよみがえらせることができます。この虹は、希望の象徴であるだけでなく、多様性と尊敬の象徴でもあります。犠牲者たちは再び、目標を高く持ち、連帯と優しさにあふれる心の底からの尊厳をもった平和という新しいユートピ

アの誕生を期待することができます。

サン・ダミアノ共同体の兄弟たちと聖トーマス・モア財団の信徒たちは、この地域で暴力の被害者や自国でよそ者となっているコロンビアの人々と手に手を携えて歩み続けています。

2. リビアのベンガジの代牧区 (Apostolic Vicariate)

私たちが10年近く住んでいるベンガジの代牧区は、シドラ湾沿いのラスラヌフよりエジプトとの国境から120キロメートル離れたトブルクの町にまで及んでいます。長さにすると、およそ800キロメートルです。

この地域はキレナイカと呼ばれ、ベンガジはその首都であり、代牧区の本拠地であると同時にそのあらゆる司牧活動の中心地です。ベンガジにはフランシスコ会の修道院と小さな教会があって、そこは今日では司教座聖堂となっています。修道院はいみじくも「司祭館」と呼ばれています。なぜなら、そこには時々修道会の司祭が来て、教区の司祭と共に生活するからです。1969年9月1日の革命以来、そこ以外に小さき兄弟たちの住む修道院はありません。地元当局が、司教座聖堂も住居も兄弟姉妹の修道院も含めて、すべての礼拝所を没収してしまったからです。教会はイタリアの植民地だとみなされる時代があったのです。

司教も兄弟姉妹と同じように自分の住居を持っていませんので、私たちは本当に *sine proprio* に（何も持たずに）生きています。司教は司祭館の車庫の上にある小さなアパートに暮らしています。彼は、実用的かつ経済的な理由から、兄弟として暮らしています。兄弟共同体の祈りの生活、時課の典礼、食事を共にしているので

す。司牧活動についても、フランシスカンの司祭や兄弟共同体と場所を共有しています。

ここで強調しておかねばならないことがあります。それは、小さな教会、司教座聖堂とそれに隣接する司祭館は代牧区にも会にも所属していないという事実です。それらの建物は、1976年のイスラム・キリスト教会議の後に地元当局が「使用のために」(ad usum) 貸してくれたものにすぎません。リビア政府のものなのです。

私たち、司教、司祭、兄弟たちは、本当の意味でsine proprioであると感じています。なぜなら、私たちはこの国で市民権を持たない「よそ者」であることを痛感するばかりか、私たちが生活し働いているこの場所はいつか再び地元当局に没収され得ることを知っているからです。

ですから、私たちは主の摂理を信じつつ、その日暮らして生活し、宣教して、地元当局と平和にやって行こうと努めています。私たちはキリストの現存と教会の愛を証しするのです。

3. ケルンでトルコ人とクルド人に交じって暮らすフランシスカン兄弟共同体

ケルンには、ヴィンクスト (Vingst) という貧民街に5人の兄弟たちが生活するフランシスカンの共同体があります。この地域にはシシリアとトルコからの移民の多くが暮らしています。兄弟たちは、小教区の一軒の家をアパートのようにして、他の3家族と一緒に暮らしています。私たちは1994年以来、ケルンのこの地域でトルコ人の青年たちのために働いています。毎週木曜日

と金曜日は（時には土曜日と日曜日も）およそ40名の若いトルコ人たちが集まり、ひとりの兄弟が世話をしています。他にも4名のリーダーがおり、彼らはそのグループのかつてのメンバーです。私たちはサッカーやゲームをしたり、パソコンでの作業を立ち上げたり、学校の宿題や試験の準備を助けたりしています。また、警察の厄介になったり、裁判沙汰になったりしている人がいたら、問題が解決できるように彼らを助けます。グループのメンバーは全員イスラム教徒なので、私たちはイスラム教の祝祭と習慣を尊重します。宗教について、特にイスラム教とキリスト教について話し合う機会が時々あります。毎年、二回旅行を計画し、一回はドイツの町を、もう一回はヨーロッパのどこかの国を訪れるようにしています。これまでに、何度かベルリンとハンブルグを訪れましたし、アムステルダムやパリ、ローマにも行きました。旅行するときはたいてい15名くらいのトルコ人の少年少女を引率します。こうした旅行はよい経験になりましたし、一緒に過ごした日々は、参加者同士が親しい関係を築き上げる助けとなります。訪れた場所の文化と歴史を味わうようにしています。私たち、つまりイスラム教徒とキリスト教徒との間には、尊敬と相互理解があるのです。

ケルンのこの地域には多くの難民が暮らしており、そのほとんどはトルコから来ています。彼らの多くはクルド人です。兄弟共同体は、そうした人々の何人かと親交があり、彼らと生活を共にしながら、彼らの必要を満たすよう支援しています。3名のクルド難民と1名のチュニジア人が、ドイツで何ら法的身分がないにもかかわらず、兄弟たちと何年も共に暮らしています。ケルンには法的身分のない人々を支援する運動があります。教会と他の進歩

的な人々が立ち上げた組織です。この運動は「一人として不法な人などいない」というのをスローガンにしており、兄弟たちは難民たちに避難所を提供する活動に参加しています。彼らは一つのアパートに寝泊まりし、一緒に暮らしています。兄弟たちはモロッコから来た何人かのイスラム教徒の学生がアパートを見つけるのを手伝いました。彼らのうちの一人は、数週間兄弟たちのところに寝泊まりしていました。その人の兄弟は、ヴィンクストから来たキリスト教徒の女性と結婚しました。二人の出会いの場は兄弟たちが主催した青年の集いです。兄弟たちは二人の結婚式の準備を手伝い、式に参列しました。

様々なイスラム教の組織が本部をケルンに置いています。トルコ、ボスニア、モロッコ、アルジェリア、チュニジアから来た多くのイスラム教徒がケルンに住んでいます。兄弟たちは、1982年からキリスト教徒とイスラム教徒との間の対話を推し進め、それ以来イスラム教徒やユダヤ人たちを招いて集いや平和の祈りの会を開いています。1996年と2006年には、イスラム教徒とキリスト教徒とユダヤ人のための平和を祝う会を組織し、1986年10月27日にアシジで行われた教皇の平和の祈りを記念しました。これらの祈りの集いは、ケルンのカテドラル近くのカトリックの集会所「ドムフォーラム」(Domforum)で行われました。グループ間の雰囲気はとてもよく、人々を一致へといざなうものでした。

III-実行

個人の養成のために

1. 各兄弟は、会の次のような指針について考えると良いと思います。

a. 兄弟たちは可能な限り、貧しい人々や疎外された人々と、その生活、歴史そして希望を分かち合うべきです。そうすれば、彼らからも教えられ、福音化されるのです。兄弟たちはその生活とその言葉において、正義の促進者であり平和と和解の使者かつ建設者たるべきです。そうすれば人間と被造物の尊厳を破壊するあらゆるものを恐れることなく非難する預言的しるしとなるのです。（1997年～2003年の優先課題p. 15, 16）

b. 私たちがどれだけ唯一の主キリストを観想し、愛し、その言葉に耳を傾けるのかは、私たちがどれだけ貧しい人々とかわり、彼らのいうことに耳を傾け、愛しているかにかかっています。キリストの愛が私たちを駆り立てて、貧しい人々に出会うようにと促しています。杖も袋もパンも持たずに、またお金も二枚の下着も持たずに行くようにと。キリストの愛は、私たちを現代の「ハンセン病者」や貧しい人々のもとに導き、私たちが貧しくなるようにと呼びかけます。すべての人に仕える者となり、すべての人に従うようにと。平和をもたらし、心の柔和な者であるようにと。キリストを愛する者にとって、真に小さくなることと「何も自分のものとせず」に生きることは極めて納得のいくことなのです。（小さき兄弟会の優先課題2003－2009 p. 24）

2. 「お返しする」という精神が共同体の中でどのように実践さ

れているかを入念にチェックするように勧めます。そのために、次のような問いかけをしてみてください。自分は現在の職務を快く手放す用意ができていますか。他の兄弟共同体に移管できるか。現在やっているプロジェクトを断念することができるか。金銭や所有物に対する自分の態度はどうか。自分たちの生活水準は周囲の社会の最も小さき人々の生活水準と同程度か。私たちは自分の所有物を他の人々と分かち合うことができるか。貧しさは私たちの「個人的な生活設計」の中でどのような位置を占めているか、また私たちのミッションにおいてどのような役割を果たしているか。

兄弟共同体の集まりのために

A. 信仰の分かち合い：マタイ6:25-34

- 最も小さき人々に仕えるという福音的な精神を私たちの間に浸透させるためには、共同体はこの福音書の箇所を祈りを込めて読み合うと良いと思います。その際、その箇所の前後の文脈を心に留めておくことが大切です：心を込めて祈った結果与えられる神の御計らいを信頼すること（マタイ 6, 7-15；祈る時には）；断食するときには（マタイ 6, 16-17：見苦しくないように）；人を裁くな（マタイ 7, 1-5：思いやり）。
- この箇所を聖フランシスコの心で味わいなさい。彼は私たちが聞きそして話す言葉を祈りに変えてくれます：「神は愛であり、その聖なる愛において私はすべての兄弟に、管区長たちにも他の兄弟たちにも乞い願います。あらゆる妨

げを遠ざけ、あらゆる心配と心づかいを打ち捨てて、できるだけ完全に、清い心と純粋な精神をもって、神である主に仕え、主を愛し、尊び、礼拝するように努めなさいと。主御自身がこれをすべてに越えて求めておられるのである」(未裁可会則 XXII, 26)。

B. 生活の見直し

共同体は修道院会議や静修日や研究会の時にこれらのテーマについて考えることができます。下記に述べるアウトラインはどちらの機会にも応用することができます。兄弟たちは「今、ここで」どのように *sine proprio* に (何も持たずに) 生きているかを考察することができます。

1. 修道院会議の前の数日間、院長または会議の司会者はこのテーマについて一人一人が読んでおくように提案する。
2. 会議の最初にマタイ 6, 25-34 と裁可会則の 6 章を皆で読むとよい。
3. 進行係を務める兄弟は、考察すべき要点とこのセクションの最初に紹介した体験談に焦点を当てながら、このテーマを簡潔に説明するとよい。他の兄弟たちは、自分の体験したこと、あるいは現在体験していることについて話すことにより、考察を深め、豊かにすることができる。その際、次のような問いかけをしてみてください：
a. 「貧しい方である神」：このような神のイメージは変えるべきだろうか。このイメージのどこが印象的か。抵抗を感じる部分とは何か。
b. 私たちの周囲にある貧困とどのような形で接することがで

きるか。

- c. 貧しい人々や貧困状態と接した様々な体験について考え、説明しなさい。

4. 会の次の決議について考えなさい。兄弟共同体はこれらの指令をどのように理解していますか。共同体としてこれらの指令にどのように答えて来ましたか。

- a. 管区として、また共同体として、すべての生活プロジェクトにおいて、最も困窮している人々に自分たちも連帯していることを示すために、管区およびそれぞれの兄弟共同体が使うべき金額を定める。基本的な法的予防措置を考慮に入れながら、人々の必要を満たすために兄弟たちの住居が使えるように、上に立つ者は必要な決断を行う。
- b. 兄弟はみな自分たちが巡業の旅する者であることを自覚し、小さき兄弟としての召命と使命に合わない考え、活動、職務、機構などは放棄するようにすべきである（小さき兄弟会の優先課題2003-2009, 3 提案7）。
- c. 貧しいイエスに従う人にとって、貧しさは希望から生まれたものである。貧しさはものごとを愛する力であり、私たちを取り巻く現実を愛する力である。本当の意味で貧しい人は、ものごとに尊厳を取り戻し、それらを賜物、神秘、しるしと考える。ものごとが存在するのは、認識され、歓迎され、喜ばれ、促進され、分かち合われ、お返しされるためである。このようにして私たちは、信仰と、「**sine proprio (何も持たず)**」に生きるという誓いの持つラディカルな特質について、再びよく考え、意識を深めることが

できる。

5. 会合の終わりに、その日に受けた恵みに対する感謝の祈りを唱え、閉会の歌を歌います。

C. 「sine proprio (何も持たず)」に生きるしるし、またはジェスチャー

兄弟共同体は次のことを考慮に入れるとよいでしょう：

1. 古い形であれ新しい形であれ、どのような具体的な形で **sine proprio**に生きることができるか。
2. 財貨の使用と積立をどのように評価すべきか。たとえば、日々の生活の中で；財産について；車や他の技術を個人的にまたは共同体として利用することについて。
3. 今後の修道院の設置される場所を考える時、衣服や食生活、暮らしなどについて、どのように簡素さを守ることができるか。貧しい人々を惨めな気持ちにさせないためには、どういう暮らし方をすればよいか。私たちの暮らしぶりは中流階級の水準にあることを考慮に入れること。

D. 祈り

愛と知恵のあるところに、
恐れも無知もなく、
忍耐と謙遜のあるところに、
怒りも心の乱れもありません。
喜びの伴う清貧のあるところに、
渴望も貪欲もなく、

平安と瞑想のあるところには、
不安も放浪もありません。
住居を守主への畏れがあるところに、
敵のつけこむ隙はありません。
慈しみと分別のあるところに、
過剰も厳しさもありません。

(訓戒の言葉27)

IV-更なる考察のために

聖書から

1. (20)すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。(21)イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」(22)その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。【新約・82頁】(23)イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」(24)弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。(25)金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」(26)弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。(27)イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」(28)ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。(29)イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、(30)今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。(31)しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」(マルコ

10:20-31)

2. (23)それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。(24)自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。(25)人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。(ルカ9:23-25)

教会の公文書から

1. 愛にかける (Count on Love)

49 愛は本来、あらゆる人間存在に向かう行動的で具体的な愛の務めにわたしたちを駆り立てながら、教会内の交わりから普遍的な奉仕へと開かれていくものです。キリスト教的生活や教会の姿勢、および司牧計画を、同等に、決定的なかたちで性格付けるのはこの領域です。最も貧しい人々への献身的な愛がどの段階にまで達し得るか、新しい世紀と千年期はまだ見なければなりません。しかし、より大きな力を込めてそれを見るのは望ましいことです。もしわたしたちが本当にキリストの観想から再出発したのであれば、彼が望んだある人たちの顔に、彼の姿を兄いさなければなりません。「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」(マタイ 25・35-36)。このみことばは、愛への単なる招きではありません。これは、キリストの秘義の上に輝く光の束を投影す

るキリスト論です。正統な理論に劣らず、教会は、このみことばに従って、キリストの花嫁としての忠誠を計り知るので。

「神の子は受肉することによって、ある意味で自らをすべての人間と一致」(35)させた瞬間より、わたしたちの愛からだれも除外されてはならないことは、確かに忘れられてはいません。しかし、福音の明確なことばにとどまるとき、貧しい人々への優先的な選択を教会に迫る、特別な主の現存が彼らの人格の中にあります。そのような選択を通して、人は、神の愛の姿、神の摂理、神のあわれみをあかしし、何らかの方法で歴史の中に、神の国の桂をまくのです。それは、イエスご自身が地上の生活の中で、霊的、物的なあらゆる必要のために彼の下に駆け寄る人々との出会いを通して行われたことです。

50 今日、キリスト教的感受性に訴える状況は、実にたくさんあります。わたしたちの世界は、経済の成長、文化の発展、技術の進歩による、多くの矛盾を抱えて新しい千年期を始めました。これらの成長は、ごくわずかな恵まれた人に膨大な可能性を与え、進歩の枠外にある人々や、人間の尊厳に当然な必要最低限をさらに下回る生活条件を余儀なくされている幾千、幾万の人々を置き去りにしています。いまだに飢え死にする人がいるとは、文字が読めないまま捨て置かれている人がいるとは、基本的医療さえ受けられない人がいるとは、いったいどういうことでしょうか？ 貧しさは限りなく拡大し得るものです。わたしたちは、昔の貧しさに新しい貧しさを追加しています。それは、しばしば、経済的に困っているわけでもない環境や人々にまで及んでいます。それは、人生に意味を舐いだせないことによる失望、薬物のわな、高齢者あるいは病人の放置、疎外あるいは社会的差別などにさらさ

れる人の貧しさです。このような場面に出合ったキリスト者は、キリストが貧しさの世界から発信しておられる呼び掛けを聞き取りながら、彼らに対する信仰の業を行うことを学ばなければなりません。それは、過去二千年の間に、既に多くの経験を重ねてきた愛の伝統を継続するということです。しかし、今日では恐らく、もっと豊かな創意工夫が求められるでしょう。新しい「愛の夢」の時代です。それはただ単に、効果的な援助提供の中に見られるだけでなく、隣人になる能力、苦しむ人と連帯する能力のうちにも見られる夢であり、辱めを感じさせるような施しではなく、兄弟姉妹としての分かち合いです。

ですから、貧しい人々が、あらゆるキリスト者共同体を「自分たちの家」と感じるようではなければなりません。この姿こそ、神の国の良い便りの、最大で効果的なあかしではないでしょうか？キリスト教的な愛と貧しさのあかしによって果たされる、このような福音宣教の形態を抜きにしては、最大の愛であるとはいえ福音の告知も、人に理解されず、今日の情報社会が毎日わたしたちに聞かせる言葉の洪水の中でおぼれてしまう危険があります。行動による愛は、言葉による愛とは比較にならない強い力を持っています。(ヨハネ・パウロ二世「新千年紀の初めに」49-50)

2. 自分自身をキリストのまなざしで見つめなさい。

この過越の真理に照らされて、教会は、わたしたちが開発を豊かに促進しようとするなら、わたしたち自身の人への「まなざし」は、キリストのまなざしと比較されることを知っています。実際、人々の物質的、社会的必要性に対応することと、人々の心の奥底にある願望を実現することとを切り離すことはまったく不可能

なのです。このことは、急速な変化を遂げる現代世界にあっては、なおいっそう重視されるべきです。貧しい人たちへのわたしたちの責任は、より明白に、緊急性を帯びて浮かび上がっています。わたしの尊敬する前任者、教皇パウロ六世は、低開発問題をめぐる恥ずべき行為を、人間性を踏みにじるものとして、的確に表現しました。こうした意味で、パウロ六世は回勅『ポプロールム・プログレシオ』で、「生命を維持するに必要な最低限のものを欠いている人々の物質的な欠乏、および利己主義に毒されている人々の道徳的な欠陥」、さらには、「私有権あるいは権力の濫用、労働者の搾取、不正な取引に由来する圧制的な機構制度」(同21)を公然と非難しました。パウロ六世は、こうした悪への対抗手段として、「他者の尊厳に対するふさわしい評価、貧しさの精神を求める心、共同福祉増進のための協力、平和への望み」だけでなく、「人間として最高の善と、その源であり終極である神を把握すること」(同)も挙げました。こうした流れに沿って、教皇は続けて、究極的に、また何にもまして、「人間の善意によって受け入れられる神の贈り物である信仰と、キリストの愛を受けた人々の一致」(同)があることを強調します。こうして、キリストが群衆に向けられる「まなざし」は、わたしたちを駆り立て、パウロ六世のいう、「人間全体とすべての人々の各次元における進歩」である「完全なヒューマニズム」(同42)の真の意味を確認させるのです。このような理由から、教会が人類と各民族の開発について第一に貢献できることは、単なる物質的な手段または技術的な解決策によるものではなくになります。むしろそれは、良心を養成し、人間と労働の真の尊厳を教えるキリストの真理を告げ知らせることです。それは、人類が抱えるすべての問題に誠実

に対応する文化の促進を意味しています。世界のあまりにも多くの人々を苦しめている貧困というとてつもない難題を前にして、無関心と利己主義は、キリストの「まなざし」とあまりにも懸け離れています。（ベネディクト16世、2006年四旬節メッセージ）

3. フランシスカンの清貧

フランシスカニズムは生きており、健在です。私たちは誰よりもそのことに喜んでいますが、このようにフランシスカニズムが健在であるのはなぜか、また、現代の精神的・社会的状況とフランシスカンとの接点はどこにあるかという問いに対する、あなた方の家族や、文化面であなた方についてきている多くの人々や、キリスト者の生き方を称賛する多くの人々の間で出される一般的な答えは、フランシスコという実在の人物です。そして、このように考える理由の中で最も重要なことは、奇妙にも、フランシスコの清貧なのです。すなわちポヴェレロ（小さき貧者）と彼に忠実に従いたいと願うすべての人々の特徴である貧しさです。そうです、フランシスコは清貧の預言者であるがゆえに、「現実」なのです。なぜそうなのかを、あなた方は私たちに教えてくれる必要があります。あなた方は、経済的な問題への不安で困惑している現代の人々に、福音書が教える貧しさの精神がいかにか心を解放するものであるかを示す必要があります。心の貧しさが、いかにより重要な現実を目を開かせてくれるかを、私たちの生きる本当の目的、すなわち、神への愛と隣人愛に目を向けることこそ私たちに求められていることだということを、そして、尊敬と達成（労働は経済的な繁栄の成果ではないか、フランシスコは兄弟た

ちを謙遜で勤勉な労働者にしたはずではなかったかを)に向かつて私たちを教育してくれるものだということを示す必要があります。心の貧しさは、一歩間違えば危険になりかねない富の注意深い使い方と正直で純粋な管理の仕方を教えてくれるはずです。そして、神の御計らいのしるしであるこの世の現実を落ち着いて楽しむように導いてくれるはずなのです。最後に、あなた方は、清貧がいかに社会の連帯の条件と原則になり得るかを私たちに教えてくれる義務があります。この連帯は、現代の大きな社会問題を見ても分かるように、富に対する自己中心的な心配によって妥協され、無視されているのです。(1967年6月22日の小さき兄弟会総集会に寄せたパウロ6世のメッセージ)

フランシスコ会の資料から

ところで、そこ(回教徒や非キリスト教のもと)へ行く兄弟たちは、二つの方法をもって、彼らの間で霊的に生活することができる。一つの方法は、口論や争いをせず、「神のためにすべての人に従い」、自分はキリスト者だと宣言することである。もう一つの方法は、主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えて、全能の神・父と子と聖霊・万物の創り主を信じ、贖い主・救い主である御子を信じるように、そして洗礼を受けてキリスト者となるようにと、勧めることである。なぜなら、「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」からである。(未裁可会則16,5-7)

清貧についての生涯養成

1. 小ささは (cf. 未裁可会則 6, 3) 神との関係においても (cf. 訓戒 19, 2 ; 会憲 65) またフラテルニタス内部、あるいは他者との関係においても (cf. 会憲 41 ; 66 § 1. 2)、私たちの兄弟としての生活を特徴づける。生涯養成と初期養成は、兄弟や入会志望者たちを、彼らが『喜びと朗らかさをもって』(訓戒 20, 2) すべての人に仕え、平和を愛する心の謙遜な者として世界に出て行く。(会憲 64 ; cf. 未裁可会則 16. 6) ように養成すべきである(養成綱領 77)

2. 福音的清貧、何物も自己のものとせず生きることの価値は、私たちの霊性と召命にとり根本的な要素の一つである。生涯養成も初期養成も、フランシスコにとり「生ける人々の国に導く分け前」(会則 6, 5) を構成したもの(清貧)を、客観的で現代的であり、感動的な方法で再現する工夫をしながら、さまざまな表出に生かすのを怠ることができない。(養成綱領 78)

3. 福音的清貧は、「貧しく、十字架につけられたキリスト」(2 チェラノ 105) との人格的な関係なしでは真正に理解することができない。キリストはご自分を最も小さな者や罪人たちの一人とされ、受肉においては奴隷の身分を受けるためにご自分の身分を取り去ることを望まれ、聖体においてはすべての者の貧しさに加わるために、謙遜に、毎日私たちの間まで降りてこられた (cf. 訓戒 1, 15-19)。この経験だけが小さき兄弟や入会志望者たちに、フランシスコカンとしての奉獻を明確にする、善と自由の喜びにあふ

れた「神への返却」のダイナミズムや、貧しい者との連帯や友情の「分かち合い」を可能にする。(養成綱領 79)

5 貧しき者の中の貧しき者

会憲

第 66 条 (1) 救い主がご自分を無とされたことをより忠実に模倣し、より輝かしく示すために、兄弟たちは、社会においては取るに足りないと言われる人々の生活と境遇を受け入れ、常に彼らの間で、小さきものとして生きる。この社会的境遇から兄弟たちは神の国の到来のため働く。

(2) 兄弟たちはその生き方として、共同体としても個人としても、誰をも、とりわけ通常は社会的、霊的に見捨てられている人々を、拒むことのないようにする。

第 69 条 (1) 抑圧された人々の権利を擁護するに当たって、兄弟たちは、暴力的行為を斥け、より弱い者にも使えるその他の手段に訴える。

第 72 条 (3) 兄弟たちの使用に任された財貨は、管区規則の正当な配分に従って、貧しい人々のために分かち合う。

第 78 条 (1) 兄弟たちは、仕事を選ぶについて会則が与えた自由をもって、時代、地域、必要に従って、フランススカンの生活のあかしが輝き出るようなものを優先させ、とりわけ、貧しい人々への連帯と奉仕の分野を求める。

第 82 条 (1) すべての兄弟は金銭を、「神のしもべ、また、

いと聖なる清貧の追求者にふさわしく」、貧しい者にあったやり方で、また、共同体に対する連帯責任において使う。

(3) 兄弟たち、とりわけ管区長および修道院長は、貧しい人々の必要を常に念頭に置いて、どのような蓄財をも注意深く避ける。

I-考察のために

1. 貧しい人々との連帯

「祝福されたフランシスコは、兄弟たちによくこんなことを言っていた。『私は、今まで決して盗人ではありませんでした。つまり、私は、貧しい人たちの相続財産である施し物からいつもほんの少しだけ分けていただいて参りました。貧しい人たちの分け前からだまし取るようなことはしませんでした。だまし取っていたとしたら、盗みをしていたことになるわけです』。³⁸このフランシスコの言葉は、本当にフランシスコの語ったものだと学者たちは考えていますが、貧しい人々との現代のいわゆる深い意味での連帯を現わしています。この言葉は兄弟たちに対し教諭することを意図していましたが、その中で、フランシスコは自分のことを「他の貧しい人たち」の中の一人と考えていました。彼に与えられたもの（そして、敷衍すれば、他の兄弟たちにも与えられたもの）は、「他の貧しい人たち」が必要とするものに照らして評価されなければなりません。実際に、他の貧しい人々の必要が、フランシスコ自身の必要よりも優先されていました。このことは正義の問題としてはっきり表明されていました。「そうで

³⁸ AC15; 2 チェラ 87; 2MP12 参照。

なければ、貧しい人たちの相続財産をだまし取る“盗人”であることになる」と。

兄弟たちが使うことのできる財貨と、それらの財貨を貧しい人々のために使うことへの絶えざる注意が、会憲の第72章の第3項に記されています。

「兄弟たちの使用に任された財貨は、管区規則の正当な配分に従って、貧しい人々のために分かち合う。」会憲第4章のこの部分は、分かち合いに対する兄弟たちの考え方を示しています。つまり、兄弟たちに与えられたものは、すなわち貧しい人々に与えられたもの**でもある**ということです。自分も貧しい人々の一人であると自覚することにより、あの「貧しい人々との連帯」ともいふべき関係へと一歩近づくことができます。この部分はまた、自分たちの必要をさておいても、考えなくてはならない必要に迫られた人々が他にいるということに常に気を配りながら、**sine proprio**に「何も持たずに」生きるとの私たちの決意を、具体的かつ物質的に表してもいます。私たちの基本姿勢を示したこれらの文章をさらに注意深く読むならば、このような生き方の他の側面も福音に根ざしていることが分かります。

兄弟たちを貧しい人々と関連付けて描いている重要な箇所が未裁可会則の9章に見られます。

施しは、貧者の受け継ぐべき遺産と権利であり、私たちの主イエス・キリストが、私たちのために、これをかち得てくださったのである、とあります。「施しを願うために労苦する兄弟たちは、大きい報いを受けることになり、施す人にも大きい報いを儲けさせ、獲得させている。なぜなら、人がこの世に残すものはすべて滅びるが、実行した愛と施しについては、主から報いを受けるか

らである。」³⁹

このメッセージは法的な力強さを持っています。主イエス・キリストが遺産と権利または「正義」(justitia)をかち得てくださり、それを相続者である貧しい人々に分け与えてくださったと言うのです。ここでは、兄弟たちに施しを受けることを恥じてはならないと励ましています。そして、フランシスコと初期の兄弟共同体が心に抱いていた「貧しい人々」(pauperes)というものを私たちにいかいませせてくれます。

兄弟たちは、自分たちの必要を満たすために、また、自分たちがとどまり、奉仕する「場所」で他の人々の必要を満たすために、「施しを願いに出かけます」(vadant pro elemosyniis)。その「場所」にはハンセン病者のための施設や貧窮者収容施設(ellemosyniis)も含まれました。兄弟たちは、貧しい人々がキリストの相続者として持っている遺産を受け継ぐべく法的な権利(iustitia)を行使しています。すなわち、自分自身と他の貧しい人々のために行使する権利のことです。

未裁可会則の同じ9章には、13世紀に「貧しい人々」の範疇に入っていた人々がどういう人たちであったかが記されています。

- **Viles** : 価値の低い人々(しばしば身体的にまたは社会的に障害を負った人々を指す) ;
- **Despectas personas** : 卑しい身分として見下された人々 ;
- **Pauperes** : 「生産性の低い」という語源で、自立できない、困っている人々を指す ;

³⁹ 未裁可会則 IX,8-10。

- **Debiles** :弱者(身体障害者、虚弱者、知的性格的な弱者、権利を持たない者) など;
- **Infirmos** :強くない者(弱く、脆弱で、病気の人など);
- **Leprosos** :ハンセン病患者;
- **Juxta viam mendicantes** :「道ばたで」物乞いをする者(たいていの場合、身体に障害を負っていることによる)⁴⁰。

上に掲げた貧しい人々のリストには、「全能の生ける神の子、私たちの主イエス・キリスト」、貧しい人、しかも寄留者(訪問者、客人、外国人)にましまし、施しによって生活された方、そして処女マリアと使徒たちも含まれます。⁴¹貧しい人々の仲間入りをするということは、主イエス・キリストと主に従う人々の仲間になるということなのです。

私たちの出発点である貧しさという言葉がこのようにはっきりと明記されているので、現代の私たちの場合についても、同様に注意深く言葉を選ぶ必要があります。現在、多くの言語で一般的に用いられている「貧しい」という言葉は、もっぱら経済的な状態、つまり、お金を手に入れる手段がない状態を指します。そして、中世において「貧しい」とみなされていた人々の中のある人々は、現代では必ずしも貧しいという表現が適切ではないようです。現代では、身体障害者ではあっても、経済的に困っていない人もいます。ハンセン病の感染者でも、場所によっては、発病しない治療を受けることができます。今日の外国人は、居住国ではかなりの社会的地位を持っているかもしれませんが、あるいは、逆に全く何の保護もなく、弱い立場であるかもしれません。今日巡礼

⁴⁰ 未裁可会則 IX:2。

⁴¹ 未裁可会則 IX:4-5。

に、特に遠くまで出かける人々は、他の多くの人々よりもはるかに経済的に豊かであるかもしれないのです。

これらのことはすべて、私たちが現代の現実を理解する必要があることを示しています。それは、貧しさの現実が13世紀と21世紀とでは違っていることを考慮せずに、単純にフランシスコの行為を繰り返す、一種の「フランシスカン原理主義」に陥るのを避けるためです。私たちが、会則を作ったフランシスコとその兄弟たちのように、現代の貧しい人々と連帯したいのならば、自分の暮らす国や地域では貧しい人々とは具体的にどういう人たちを指すのかを知らなければなりません。そのためには、未裁可会則の9章にある兄弟たちの働き方に対応するような現代の社会的現実を注意深く見極める必要があります。どういう人が名実ともに「貧しい人々」であるのかを知ったならば、その時に初めて「連帯」という現実に一歩踏み出したこととなります。

現代の貧しい人々とは誰なのでしょう。ある場所では、それは法的身分を持たない移民であったり、紛争のために家を捨てて逃げざるを得なかった難民であったり、人権を擁護されずに、不当な賃金で働かされている人々であったりします。世界の多くの地域では、貧しい人々は、男性に与えられている社会的保護や身分を十分に与えられていない女性であることが多いのです。私たちフランシスカンが暮らす現代社会では、どういう人たちが貧しい人々なのでしょう。この間に答えることこそ、貧しい人々との連帯の重要な第一歩となります（会憲第96章1参照）。

2. 「福音的な完全さ」と連帯

文書化されてから長年にわたり会則に残されている福音書の言葉の一つに、金持ちの青年に対する次のような有名なイエスの勧めがあります。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい。」

フランシスコとクインタヴァーレのベルナルドとピエトロ・カタニとクララと他の多くの人々は、この行為を実行しましたが、それには二つの効果がありました。自分の自由意思でそうすることにより、フランシスコとその仲間たちは、貧しい人々の仲間となったこと、それと同時に、富を貧しい人々に分配できたことです。上に引用したキリストの言葉の論理によれば、この行為は、相続財産に対する貧しい人々の権利、すなわち*iustitia*（正義）を回復するための第一歩であったのです。

何世紀も経つうちに、特に修道会内で清貧についての論争がおこなわれている間に、貧しい人々のこうした権利に当てられていた焦点は、兄弟たちの清貧それ自体が目的と考えられるにつれて、ぼけてきてしまいました。「持ち物を売り払い、貧しい人々に施す」という論理は、克己心のために「物質的なものを放棄する」という禁欲主義の論理にすり替わってしまったのです。焦点が、「貧しい人々の必要」から「自己の聖化」へと変わってしまったわけです。会則の文章に残された根本精神は、周囲の貧しい人々との関連の多くを失ってしまいました。

会の改革運動（オブセルヴァンテス派、改革派、カプチン派、リコレッティ派など）は、自分たちのことを兄弟たちの貧しさの度合で測りましたが、必ずしも自分たちの周囲にある貧しさの社会状況にしかるべき配慮をしていたわけではありません。しかし

中には、素晴らしい例外もありました。たとえば、借金の不当な高利を糾弾したシエナのベルナルディーノ、貧しい人々のために低金利で貸し付けを行う銀行モンティ・ディ・ピエタの創設、その他似たような取り組みが会の歴史の中で際立っています。しかしながら多くの場合、兄弟たちの貧しい人々との関係は、その日ごとの重要な必要に応えるために慈善的援助を行うというレベルにとどまり、「連帯」という言葉が必要とする視点、すなわち貧しい人々の「視点」から社会に関与するという、より深いレベルにまでは至っていませんでした（会憲第97章2項参照）。慈善的援助それ自体は、貧しい人々との関わりにおいて重要であり、不可欠のものです。主キリストによってかち得られた貧しい人々の権利（*iustitia*）と遺産を認めるようにとの決議を完全に遂行するものではありません。もっと必要なことがあるのです。

3. 貧しい人々：彼らはずっと私たちと共にいるか

兄弟たちの態度は、教会の多くの人々のそれと同じように、聖書の理解によって形成される傾向がありますが、特に、問題のある箇所が一つあります。それは、マタイによる福音書の26章6-13節で、イエスは、思い皮膚病を患っているシモンの家で食事の席に着いておられました。食事の間、ひとりの女が、香油をイエスの頭に注ぎかけました。それを見た弟子たちは憤慨して言いました。「なぜ、こんな無駄使いをするのか。香油は高く売って、貧しい人々に施すことができたのに」と。これに対してイエスは言われました。「貧しい人々はずっとあなたがたと一緒にい

るが、私はいつも一緒にいるわけではない」と。⁴²

この箇所は、あたかも貧しい人々がいるのは当たり前であるかのように、貧しい人々に対して受身の姿勢でいることを正当化するものとしてしばしば引用されます。しかし、マタイ福音書のイエスの言葉は、申命記の次の言葉を思い起こさせます。「この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、私はあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。」⁴³この言葉は、七年目ごとの負債免除に関連するものです。七年目ごとに負債を免除することは、共同体をある永遠の状態に置くことを意味していました。その状態は、上に引用した箇所よりも少し前に書かれています。「あなたの神、主は、あなたに嗣業として与える土地において、必ずあなたを祝福されるから、貧しい者はいなくなる。」⁴⁴

マタイ福音書の中のイエスの言葉は、イエスの頭に香油が注がれたことが「特別な」行為であることを示しています。（「この人は私の体に香油を注いで、私を葬る準備をしてくれた」）これに対して、弟子たちの「普通の」注意の焦点は、貧しい人々の必要に向けられていますが、貧しい人々への配慮については、その前の章でたくさん述べられています（「私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」）⁴⁵

会憲（第72条3項）は兄弟たちに、自分たちに与えられたものは「貧しい人々のために分かち合う」べきであることを自覚するように促しています。第4章の別のところでも、似たような配慮を

⁴² マタイ 26:11（マルコ 14:7, ヨハネ 12:8）。

⁴³ 申命記 15:11。

⁴⁴ 申命記 15:4-5a。

⁴⁵ マタイ 25:40。

すべきことが書かれています。⁴⁶これは、「すべての人」が神から与えられた富や財産の分け前にあずかり、他の人々が富を享受しているのに、自らは貧困に苦しむ者が「誰一人としていなくなる」ような社会生活のあり方に参加するための道筋をつけてくれています。つまり、貧しい人々についてのイエスの言葉は、不正な社会システムを承認するものとしてではなく、聖書に描かれた神のより大きなご計画を表すものとして理解される必要があります。そのご計画においては、だれ一人として、人間としてふさわしい生活に必要なものが欠けることはありません。金持ちの青年に向かって「行って、自分の持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と言われたイエスの珠玉の言葉は、金持ちの青年であったフランシスコの心に深く響き、「完全になりたい」と願う人々を狭く、困難ではあるものの、豊かな生活へと通じる道へといざなっています。それは、貧しい人々の間で、彼らのために、小さき者として生きる道なのです(会憲第66条1項、97条1項、2項参照)。

4. 教会と会の公文書に見られる「連帯」

⁴⁶ 第 82 条、3 項：「兄弟たち、とりわけ管区長および修道院長は、貧しい人々の必要を常に念頭に置いて、どのような蓄財をも注意深く避ける。」

第 82 条、1 項：「すべての兄弟は金銭を、『神のしもべ、また、いと聖なる清貧の追求者にふさわしく』、貧しい者にあつたやり方で、また、共同体に対する連帯責任において使う。」

第 78 条、1 項：「兄弟たちは、仕事を選ぶについて会則が与えた自由をもって、時代、地域、必要に従って、フランシスカンの生活のあかしが輝き出るようなものを優先させ、とりわけ、貧しい人々への連帯と奉仕の分野を求める。」

社会的経済的な不平等という現実に対するこうした見方を表現するために、過去40年にわたってますます頻繁に使われるようになった用語は、「貧しい人々との連帯」です。第二回ラテンアメリカ司教協議会は、その1968年の文書「教会の貧しさ」⁴⁷を通じて、この用語を世界に広く知らしめました。「連帯」という用語は、それ以前の1961年にすでにヨハネ23世によって、また1967年にはパウロ6世によって普通に使われています⁴⁸。ヨハネ・パウロ2世は1991年にこの用語をもっと鋭く、「社会・政治機構に対するキリスト教的視点の根本原則の一つ」⁴⁹として定義しており、それ以前に掲げたテーマを発展させています。それによれば、「相互依存性がこうした形で実感されるようになりますと、道徳的、社会的態度として、すなわちひとつの「美德」として表れる相互反応は連帯という意味になります。故にこの態度は、いたるところに存在する無数の人々の不幸、災いに対するあいまいな同情の念でもなければ、浅薄な形ばかりの悲痛の思いでもありません。むしろそれは、確固とした決意であり、共通善に向かって、すなわち私たちは、すべての人々に対して重い責任を負うがゆえに、個々の人間の善に向かい、人類全体の善に向かって自らをかけて、共通善のために働くべきであるとする堅固な決断なのです。」⁵⁰

5. 連帯と「礼節 (cortesia)」

47 公文書 XIV: 「教会の貧しさ」 no. 16。

48 ヨハネ23世のマーテル・エト・マジストラ 23; パウロ6世のプロールム・プログレシオ 48。

49 CA 「新しい課題」 10。

50 「真の開発とは」 38。

連帯とは、自分の身近で、修道院で、教会で貧しい人々の「現実」をただ受け入れるのではなくて、普通ならもっと社会的身分の高い人々に向けられる礼節と優雅さをもって貧しい人々を積極的に迎え入れることを意味します。いつもそのような態度でいるならば、兄弟たちは貧しい人々にとって怖い存在でも、遠い存在でもなく、近づきやすく、相互信頼の関係を築ける存在となります。⁵¹

しかし、そのような連帯は、もっと広い領域、たとえば、社会の政策や制度などでも活躍します。不公平で差別的な法律、不当労働行為、病気になっても治療を受けるのが難しかったり、基本的人権が法的に十分に守られていない現実などにおいて。この意味で、「貧しい人々に奉仕する」ということは、必要なものを提供すること（「直接的な奉仕」）を指すと同時に、雇われている側（兄弟たち）が雇っている側（貧しい人々）に提供する他の「奉仕」をも指します。たとえば、貧しい人々の利益を擁護するとか（会憲第69条1項、97条2項参照）、貧しい人々の要求を支援するために他の人々にも働きかけ、貧しい人々の利益になるような活動を促進するために、兄弟たちにも使える社会のネットワーク（教会や、政府や、商業や、学問の分野で）を使う（会憲第96条2項参照）など。

「貧しい人々と連帯する」ということは、私たち現代人にも分かりやすい言葉と行いで、会則の中心にあるあの非常に基本的な直観、すなわち、自分が「聖福音の求める完全さ」に向かうよう

⁵¹ 第 66 条 2 項：兄弟たちはその生き方として、共同体としても個人としても、誰をも、とりわけ通常は社会的、霊的に見捨てられている人々を、拒むことのないようにする。

に求められているということを伝えることです。それは、決して現代の貧しい人々から遠ざかることなく、私たちに「私たちの主イエス・キリスト、祝福された処女マリア、そして主の弟子たち」の仲間に導きいれてくれる「貧しい人々」との相互依存と相互の高め合いのレベルにまで達するように要求する完全さです。

II-体験の分かち合い

カトリックの神学は、人間の社会組織に関するその教えの中で、常に共通善を奨励して来ました。その特徴的な原則とは、この世のものは本来はすべての人々のためにあるということです。個人の財産は重要ですが、それは「社会的抵当権」に先んずるものではありません。つまり、個人の財産は本来、財貨の普遍的な目標の原則を基盤とし、それによって正当化される社会的な機能を伴うということです。つい最近では、極端な個人主義や全体主義を支持する理論に対抗して、教会は「連帯」という用語を使うようになりました。その目的は、現代の工業化された社会で、人類を基本的に社会的な存在として捉え、社会それ自体を有機的で協力的な存在として捉える概念を強調するためです。ヨハネ・パウロ2世は、その著書の中で、連帯の美德に注意を向けるようにと勧めています。連帯の美德とは、あいまいな同情の念でなく、共通善のために自らをかけて働くべきであるとする堅固な決断に他ならないのです。

1987年の会憲において、会はこの連帯の概念を支持する明確な姿勢を打ち出しました。現代の貧しい人々や疎外された人々に対するフランシスコの憐みと献身を実践しようとの熱意をもつ

て、会憲は、兄弟たちに「貧しい人々と連帯する」ようにと繰り返し促しています。兄弟たちがいつも貧しい人々を気にかけているというのはある意味で本当です。しかし、現代の複雑な社会機構の特徴となっている構造的な悪と不正に取り組むためには、その配慮をさらに別のレベルにまで広げる必要があります。貧しい人々や疎外された人々の日々の必要を満たすことのほかに、私たちに求められていることは、時のしるしを読み、効果的かつ協調的行動で、共通善のために働くことです。会憲はまた私たちに、単なる金銭的な分かち合いにとどまらず、貧しい人々の間で暮らすこと（第66条1項、97条1項参照）、彼らの権利を守ること（第69条1項参照）、私たちの財貨を彼らのために使うこと（第72条1項、3項、第97条2項参照）、公正な社会の建設のために働く組織と協力すること（第96条2項参照）を勧めています。

本書のこの部分で紹介する体験談は、疎外と貧困の条件に対する兄弟たちの三通りの態度を示しています。タイで働く兄弟たちは、現代の疫病の一つであるエイズに取り組んでいます。フランスコのハンセン病患者との体験と同じように、タイの兄弟たちも世界で最も疎外された人々であるエイズ患者に心を開き、彼らの物質的・精神的な必要を満たそうと決意しました。ブラジルで貧しい人々や疎外された人々の必要に応えるべく働く兄弟たちは、彼らの緊急の必要を満たし、彼らの悲惨と貧困の原因となっている根本組織を建て直す正しい法律を制定するための社会政策に影響を及ぼすために、一連の計画を立てました。構造的な貧困問題に取り組むイタリアの兄弟たちは、時のしるしを読みつつ、貧困に苦しむ人々に経済的な支援と食糧と時間と労力を提供しています。これらの三つの体験談はいずれも、すべての兄弟姉妹の共通

善を探し求めながら、いかにしてフランシスカンの方法で憐れみ深く、知性を働かせて、具体的な諸問題に取り組むことが可能かを示しています。似たような体験談は会のいたるところに見られますが、中でも、ローマのアントニオ大学の学生共同体で行われている貧しい人々への炊き出しは特筆すべき試みでしょう。

1. タイのフランシスコ会地区：聖クララ・ホスピス

2002年の初めからここタイの聖クララホスピスで働いていますが、それはすごい特権だと思っています。私もいっしょに働いている兄弟たちも、エイズで死にゆく人々との日々の触れ合いに深く心を動かされています。私はこうした多くの体験を「水滴」と呼びたいと思います。なぜなら、それらの体験は大海をなす何十億もの水滴のようだからです。どの水滴も、完成された全体の重要な一部なのです。それはまるで福音のようです。福音を信仰をもって生きるならば、生きている一瞬一瞬に神の恵みを体現することができます。

タイのエイズの状況は素晴らしいです。私たちは小さき兄弟会の名で、私たちの生活と使徒職を通して、また、フランシスカン・カリスマを通して、福音を告げ知らせるために、このような状況下にやってきたのです。私たちがさらに心がけていることは、このタイに「会を根付かせる」(implantatio Ordinis) ことです。これらの任務は、私たちの生活に意味を与えてくれます。私たちはアジジのポヴェレツロ(小さき貧者)と同じ道を歩むようにと招かれた神の道具なのです。彼は、貧しい人としてのその生涯を通して、当時の虐げられた人々、特にハンセン病者のように見捨

てられた人々に語りかけました。フランシスコはハンセン病患者を見つめた時、われを忘れていました。だからこそ、当時の社会で見捨てられた人々を抱きしめることができたのです。

聖クララホスピスは、平和と楽天主義と愛と介護の場所です。ここで働くためには、自分を忘れ、他者、特にエイズで死にゆく人々のために喜んでわが身を犠牲にする心構えがなくてはなりません。私たちはこのホスピスで亡くなった人々と様々な体験をしましたが、中でも、このクリスマスシーズンに私たちの心を深く揺動かした一つの体験についてお話したいと思います。

2006年の初めに、チャトリという男性がホスピスに迎え入れられ、私たちは彼の介護を任されました。彼はバンコックのワッチラ病院から転院してきた人で、私たちは彼を暖かく迎え入れました。カルテを見ると、彼の病状はエイズの終末期にありました。私たちは彼の介護に最善を尽くし、毎日彼の傍にいて、彼が出かける時には付添い、彼の心をくみ取るようにしていました。私たちは彼の悲劇、落ち込み、弱さを分かち合っていました。彼は一人ではなかったのです。私たちは希望の海を一緒に渡っていました。2か月の間、彼の眼は閉じたままでした。それで、医師は抗うつ薬を処方し、私たちはチャトリ氏がうつを乗り越えるように支えました。効き目は思いのほか早く表れ、彼は抗レトロウイルス薬を服用するまでになりました。そして、2～3か月の間に、家に帰れるまでに回復したのです。チェンマイの家族と一緒にしばらく過ごした後、彼は仏教のお坊さんになるためにお寺に入りました。彼は私たちと一緒にいたころよく「僕は今から新しい人になる」と言っていたのですが、このことはその言葉を思い起こさせます。そして、私たちのミッションは、聖クララホスピ

スの他の患者たちと共に続くのです。

エイズで死んでゆく人々のために過去何年か働いてきましたが、それで気付かされたことは、私たちは単に体のことだけをケアしているのではない、ウイルスとだけ戦っているわけではないということです。むしろ、私たちのもとを訪れる人々に私たちがしてあげなければならないことは、彼らの生き方、行動、生活様式を変えることです。今日では、新薬と最新の技術を用いてエイズの広がりを抑えることが可能になりました。しかし、私たちはここを訪れる人々に、もっと先に目を向けるように、古傷を癒して、過去との壊れた関係を修復し、慈しみ深い神の御計らいと恵みを日々の生活の中に迎え入れるようにと勧めています。単に体の癒しにだけ心を向けるのではなく、さらにその先を見るように、傷ついた内面の自己を霊的に癒すことに気を配るようにと、彼らを励ましています。

この患者のほとんどは仏教徒ですが、カトリック教徒である私たちの示す愛を体験するチャンスが与えられています。私たちは、新しい心、新しい考え方、看護の仕方についての新しい感覚を示そうと努めています。私たちの看護は、彼らを神の子としての尊厳を持った人間として愛する愛に根ざしています。私たちは彼らが自分の内的自己、すなわちフランシスコが「内的教会」と呼んでいたものを建て直すように助けているのです。

2. セ fras (Sefras) : ブラジルでの福音的な連帯

イエスに従うようにとの聖フランシスコの呼びかけは、現代の私たちの心にも響き続けています。それに応えて、私たちがはっ

きり読み取ることができるのは、連帯の大切さです。フランシスコは、疎外された人々の側に立つことは福音の絶対命令であることを独特の方法で理解していました。彼はアシジの城壁という安全を捨てて、「ハンセン病患者」と共に暮らしましたが、それは、貶められた人の世話をするためでした。彼はその「遺言」の中で、「そこで、私は彼らを憐れみました」（遺言2）と書いています。彼の態度は嘆くのではなくて、憐れみを示すものであり、もっと厳密に言えば、他者と同じ感情、痛み、苦しみを味わうためのものです。

社会的行為にフランシスコ的なインスピレーションを吹き込むために、ブラジルのフランシスコ会無原罪の御宿り管区は5年以上にわたって、「フランシスコの連帯奉仕」（セフラス Franciscan Service of Solidarity）のために働いています。セフラスの使命は、疎外され、貧困に苦しむ人々との連帯の態度と行動を促進することです。セフラスはこの使命をフランシスコ的な生き方と福音の告げ知らせ方に従って、貧しい人々が市民権を行使し、社会における役割を果たすように助けることで、遂行しています。フランシスコ自身が実践した、あの社会的な立場と身分を変えるという模範的なジェスチャーは、セフラスのすべての活動の指針となっています。

「フランシスコの連帯奉仕」セフラスは、小さき兄弟としての召命に忠実に、キリスト教的かつフランシスコ的な視点から、それ自体の基礎を人権と環境保護の権利に置くことにより、その目的を人々を全人格的に守ることとしています。私たちは、疎外された人々に速やかに注意を払い、人々の人権を守る社会政策を打ち立てることによって、社会の不平等を解決しようと努めて

います。これらの社会プロジェクトは、兄弟たちの働く場であるばかりでなく、貧しい人々と物質的・精神的なものを分かち合うすぐれた場でもあると思います。

効果的な連帯を図ろうとするセフラスは、社会的な活動を通して神の国の到来に貢献しようと努めています。社会的活動は、そのプロジェクトの中でフランシスカンの霊性を実践するにせよ、地域の教会の司牧的な社会プロジェクトと関わるにせよ、教会であるための独特な方法であると思います。エキュメニズム（教会一致の運動）を実践し、諸宗教間の対話に参加することによって、私たちは多様性を認める態度を培っていきたいと思っています。

個人主義と快樂主義に満ちている現代社会は、そうした主義に代わる価値観を求めています。それゆえ、社会的な疎外を解決するための預言的な声となるべく努力を続けるセフラスは、その行動の基盤をフランシスカンのかつキリスト教的価値観に置こうとしています。

無原罪の御宿り管区があるブラジルの5つの州では、現在30の社会プロジェクトがあつて、それが24の兄弟共同体に配られ、合計1万5千人以上もの人々がその恩恵を受けています。私たちのプロジェクトは社会の多方面にわたっており、ここでは、二つの実例をご紹介します。一つは路上生活者のためのプロジェクト、もう一つは、社会環境保護活動のためのプロジェクトです。

路上生活者のための活動としては、社会に復帰するためのフランシスカンセンター (Franciscan Center for Social Reinsertion) があり、それはサンパウロの中心の聖フランシスコ修道院の中にあります。小ささと貧しい人々の優先を実践するにあたり、兄弟たちは路上生活者を迎え入れ、彼らの言うことに耳を傾け、世話

をする精神を身につけています。私たちは彼らと共に暮らすことに喜びと満足を感じています。センターでは、彼らに日々の食事を提供するだけでなく、さまざまな文化的・教育的な活動も行っています。このようにして私たちは、彼らが職業技能や資格を身につけて、社会に復帰するのを助け、さらには、自尊心を回復することでしっかりした自己のアイデンティティーを確立するのを助けます。

私たちが活動しているもう一つの分野は、社会環境保護です。エスピリトサント州のビラベリヤには、Ascavive プロジェクト、すなわち、ビラベリヤの廃品回収協会があり、また、サンパウロには、Recifran プロジェクト、すなわち、リサイクルを支援するフランシスカン・サービスがあります。これらの二つのプロジェクトでは、リサイクル可能なものを収集しています。この二つのプロジェクトは、リサイクルを通じて環境保護の意識を高めるだけでなく、リサイクル収集を行う人々の組織を奨励し、支援することを目指しています。その結果、彼らは市民権を回復した実感を得ると同時に、より高い生活の質を得、意識的に社会に参加し、家族の収入を増やし（庶民の経済に比して）、連帯して働いています。

こうした活動のために、セフラスは多くの人々の力を借りています。兄弟たちだけでなく、ボランティア、役場の職員、これらのプロジェクトに関わる他の会の修道者たちなどです。私たちは、路上生活者の技術面や職業面での教育のみならず、フランシスカン精神に基づく彼らの霊的な教育においても、献身的に働きたいと思っています。私たちの社会的な連帯活動の基本原則は正義と平和です。セフラスの私たちは、800年前に聖フランシスコがそう

であったように、人間を聖なる存在と捉えています。より良い世界が可能であるという理想主義者の夢を、私たちは信じているのです。

3. イタリアのセイアントニオ・センター

1873年にミラノに聖アントニオ修道院ができた最初のころから、兄弟たちは訪れる貧しい人々の要求に応えようと努めて来ました。

貧しい人々のための食堂とそれに隣接した慈善奉仕センターは、町の最も小さき人々に敏感に対応してきた結果生まれたものであり、積極的に関わることによって、兄弟たちと共にそれをつくり出し、支援し続けた多くの人々の努力の成果です。

高い要求と重要性を持つ会憲第4章に関する本書に、私たちの体験を添えることには、内心忸怩たるものがあります。私たちが貧しい人々に近づこうと努力していることは確かですが、誓願によって約束した「貧しき者の中の貧しき者」となるまでには至っていないからです。

そうは言うものの、私たちの慈善奉仕センターについて語るのは、ささやかな喜びです。他にも似たような活動はありますが、このセンターにはそれらと比べて基本的に際立った特徴がありません。

セイアントニオ・センターは最初、兄弟たちやボランティア及びそこを利用する人々に歓迎の場、傾聴と成長の場を提供する慈善組織を作る目的で生まれました。このセンターは、多くの理由から、あえて限られた側面を持つ一つの組織にとどめられました。

その理由の一つは、そこで働く兄弟たちが、単に管理者的な立場で活動を監督するのではなく、様々な分野のボランティアたちと共に手を携えて奉仕活動に積極的に関わることができるためです。センターのために働いているのは私たち二人の兄弟ですが、私たちはそのお蔭で、仕事においても宣教においても、福音的でフランシスカンの兄弟共同体の姿を、直接的かつ日常的な形で証しすることができます。センターのスケジュールは、共同体生活の祈りやその他のひと時に参加することができるよう、兄弟共同体の他の活動と完全に両立できるように設定されています。

約100人に昼食を提供できる食堂のほかに、1993年から傾聴センターとワードローブサービス（衣服提供サービス）を行っており、夕方は外国人を対象にしたイタリア語講座を開いています。

センターの組織と活動は歓迎することを旨としており、規模も現実の可能性に即したものになっています。すべてを行うことは無理なので、行うことは限られていますが、訪れる人々を歓迎するまなざしと傾聴し同伴する心をもって、彼らと一緒に進むべき方向を探る努力をしています。私たちの力では彼らの必要に応じられない時には、他の組織やサービスとネットで絶えず連絡を取り合って、その地域で入手可能な助けを借りることにしています。

私たちがサービスを提供するにあたっては、単なる社会福祉活動にとどまらずに、聖フランシスコの精神で、訪れる人々を暖かく迎え入れ、彼らが恥ずかしい思いをしないような関わり方をし、彼らが自分自身の持つ能力を引き出して活用できるように促します。

常に単純さと透明性をもって行われてきた私たちの修道院の慈

善活動という特徴を失わないようにするために、大規模なスポンサーや契約を断り、むしろ、寛大な個人の寄付者による援助、たとえばお金や食糧、時間、労力などのできるささやかなことを大切にしています。「最も小さき人々」へのこれらの奉仕を支援する活動に個人的に参加してほしいとの兄弟たちの訴えに、これまで多くの人々が応えてくれましたし、今も応えてくれています。このようにして、ある大きなボランティアグループは、順番に様々な奉仕活動を行い、私たちのセンターの主たる支えとなり、機動力となっています。

このような強力な力が最大限の効果を発揮するために、ボランティアたちは自分たちの成長に必要な道具を与えられ、社会的成熟という意味でも、また自らの人間として及び信仰者としての成長という意味でも、ボランティアの奉仕が持ち得る重要性というものを認識しています。私たちがこう言うのも、ボランティアを単なる奉仕者とみなしたくないからです。私たちは、独特な精神に基づいて、彼らとの出会いや教育の機会を通じてボランティアたちの歩みに同伴したいと思っています。

私はこれまで、私たちのセンターを啓発するフランシスカンの霊性を示しつつ、センターの現状について述べて来ました。こうした慈善的な活動が所期の目的を十分に達成するためには、まだまだ長い道のりがあることは存じています。

私は最後を聖フランシスコの言葉で締めくくりたいと思います。「兄弟たちよ、神であられる主にお仕えすることを始めましょう。これまでのところほとんど、あるいは全く進歩がなかったのですから。」

III-実行

個人の養成のために

自分が貧しい人々とどの程度連帯できているかを知るために、次の質問に答えなさい。

1. 貧しい人々の中に友人を持っていますか。
2. あなたの人生に重要な影響を与えた最近の貧しい人は誰でしたか。その影響はどのようなものでしたか。
3. 自分のもとを訪れる貧しい人に、あなたはどのように応対しますか。
4. ニュースを見たりするために費やす時間と比べて、どれくらいの割合の時間を貧しい人々の問題に気づき、それを調べるために費やしていますか。
5. 現実を貧しい人々の視点から理解し、考えていますか。
6. 財産を貧しい人々と分かち合うと言う時、私たちは普通共同体のお金のことを考えます。しかし、私たちはそれぞれ休暇のためや、個人的なことのために使えるお金を持っています。そのお金の中からどれくらいを、あなたは貧しい人々のために使っていますか。
7. 貧しい人々は私たちの周囲にいます。あなたはその人たちのためにどれくらいの時間を割いていますか。
8. あなたは、貧しい人々のための社会組織や運動とコンタクトがありますか、また、それらを支援していますか。

兄弟共同体の集まりのために

A. 信仰の分かち合い

神の御言葉を聞き、考えるために地域の共同体で集まります（共同体が大規模ならば、少人数のグループに分けて行うほうがよい）。イエスの生活の基本をなしていたのは、貧しい人々や疎外された人々への思いやりと彼らとの接触でした。フランシスコは、イエスの奉仕のこの側面を、福音の教えとして大切にしました。集まりの前にふさわしい歌を歌います。そして、マタイ福音書25:31-46の朗読を注意深く2回ないしは3回聞き、毎回聞いた後に静かに考える間をとりましょう。独り静かに考えたことを互いに分かち合います。そして、信仰を行動に移す可能性に対して特別な注意を払いましょう。

B. 生活の見直し

1. 集まりの前の数日間、院長または担当者は、本書の連帯に関する部分を一人一人が読んでおくように勧めます。
2. 集まりの最初にレビ記10:9-10、または他にふさわしい聖書の箇所があればそれを読むとよいでしょう。
3. 司会者を務める兄弟は、集まりの最初にこのテーマおよび関連する体験についてのまとめを簡潔に述べるとよいと思います。他の兄弟たちは、考察を続け、自分の体験したこと、あるいは現在体験していることについて話すこともできます。
4. 共同体として、会憲の連帯について書かれた箇所をどう思っているか、また、それらの箇所を実行するために、何をした

かについて話し合うとよいでしょう。

5. 共同体として、会憲の連帯に関する条項を実行する新しい方法を考えると良いと思います。その際、800年祭のテーマでもある「お返しする」という考えについて考察してはどうでしょうか。
6. 集まりの終わりに、分かち合いで得た恵みに対する感謝の祈りを唱え、閉会の歌を歌います。

それ以外に考えられる兄弟共同体の集まり

- 貧困とその結果について描写した映画を選びます。共同体のすべてのメンバーがその映画を見られるようにします。集まりを計画するか、修道院会議の一部を使って、その映画が何を訴えているか、何を求めているかについて考えましょう。
- 「時のしるしを読む」にはどうすればよいかを考える機会を兄弟たちに与えます。この問題について体験の豊富な熟練した司会者を探しましょう。

C. 貧しい人々との連帯を示すしるし、またはジェスチャー

共同体として具体的なしるしやジェスチャーを思いつくならば、それは御言葉や教会の教え、フランシスコ会の資料、自分を取り巻く社会的・政治的・経済的現実についてよく考えた成果です。

具体的な例をいくつか挙げてみましょう。

1. 町の貧しい地区で、あるいは国の別の地方や外国で、似たような活動を行う団体と姉妹関係を結ぶ。

2. 貧しい人々のために働く組織に、空いている建物などを活動の拠点として提供することはできないか考える。
3. 貧しい人々との連帯を表明している地域のプロジェクトを取り入れ、そのプロジェクトを支援するプログラムを作るよう、兄弟たちや信徒に勧める。
4. その地域社会の貧困の原因となっている問題に取り組む助けとなるような訓練を地元の人々に施すにあたり、養成や教育面でサポートする方法を考える。

D. 祈り

慈しみ深い父なる神よ、
愛の霊を、御子の霊を
私たちにお与えください。
兄弟姉妹たちの必要と苦しみが見える目をお与えください。
疲れ果て、抑圧された人々を慰めることができるように、
私たちの心をあなたの御言葉の光で満たしてください。
貧しい人々、苦しむ人々のために
献身的に働くことができるように助けてください。
すべての人々が
新しい世界への希望に心を開くことができるよう、
あなたの教会が
真実と自由、正義と平和の生きた証しとなりますように。
主キリストによって、乞い願います。
アーメン。

IV-更なる考察のために

聖書から

1. (20) 寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。(21) 寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。(22) もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。(23) そして、わたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。(24) もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子を取ってはならない。(25) もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。(26) なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。(出エジプト記22:20-26)

2. (9) 穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。(10) ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。(レビ記19:9-10)

3. (5) そのようなものがわたしの選ぶ断食苦行の日であろうか。

葦のように頭を垂れ、粗布を敷き、灰をまくことそれを、お前は断食と呼び主に喜ばれる日と呼ぶのか。(6)わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。(7)更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与えさまよう貧しい人を家に招き入れ裸の人に会えば衣を着せかけ同胞に助けを惜しまないこと。(イザヤ書58:5-7)

4. (31)「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。(32)そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、(33)羊を右に、山羊を左に置く。(34)そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。(35)お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、(36)裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』(37)すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。(38)いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。(39)いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』(40)そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』(マタイ25:31-40)

5. (32)信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。・・・(34)信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、(35)使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。(使徒言行録4:32, 34-35)

教会の公文書から

1. 人権の宣言と、これらの権利の行使を認める国際協定によって、この二つの欲求は、すでに進歩が認められ、実社会および公共の機構のなかで認められるようになっていきます。しかし、人種・文化・宗教・政体を異にする人々のあいだで、常に不健全な分裂が生じています。事実、人権は、たとえ愚弄されることはなくても、今もなお、あまりにもしばしば無視されています。あるいは、単に表面上だけ守られているにすぎません。多くの場合に、新しい状況に応じた必要な法律が制定されるのが遅すぎます。そして、これらの法律は必要なものですが、それだけでは真の正義と平等に基づいた人間の相互関係を樹立することはできません。福音の教えは、私たちに愛徳を命じています。また、貧者に特別の敬意を払うこと、社会の中で貧者のために特別の場を設けること、さらに、恵まれた人々は他の人々のために自分の持ち物の一部を惜しみなく分け与えることを教えています。実際に、法律が規定したこと以外に他人を敬い、他人に奉仕するという、より高い義務感をもたなければ、法律によって規定されている平等は明らさま

な差別行為の口実に使われ、他人の労働を乱用し、他人を実際に軽蔑するために使われるでしょう。困窮者を援助する心構えを人々の心に新たに植えつける努力がなされなければ、法律上の平等を強調しすぎることによって、個人の利益を優先する生活感覚が広がり、各個人が自分の権利を主張し、共通善が後回しにされるという結果になります。（パウロ6世の教皇書簡「オクトジェジマ・アドヴェニエンス」23）

2. ここでキリスト教の社会的教えを特徴づける一大原則を今一度述べる必要があります。それは、この世界の財貨は本来、すべての人々のために用意されたものである、ということです。私有財産はもちろん、有効であり、必要な権利ですが、今述べた原則を否定し、無効にするものであってはなりません。私有財産権というのは、実際のところ、「社会的抵当権」を設定された上で存在するものです。ということは、私有財産権とは、本来的に社会的機能を包含した、そして財の普遍的目的という原則によって厳密に正当化され、それを基盤として初めて成り立つ権利なのです。このことを貧しい人々との関連で考えるなら、人間の基本的な諸権利、とくに宗教的自由に対する権利、また経済的独創力を発揮する権利を奪われたところに存在する特別な形式の貧しさを、私たちはみすごしてはなりません。（ヨハネ・パウロ2世回勅「真の開発とは」42）

3. **豊かな国々は、自らでは発展の手段を手に入れることができなかつたり悲劇的な歴史的出来事によってそれが妨げられてきた国々に対する重大な倫理的責任を持っています。それは連帯と愛**

の義務です。また、豊かな国々の繁栄が不当に安価に購入された資源をもとに築かれているような場合には、それは正義の義務でもあります。

直接援助は、天災や疫病などによって生じた臨時の緊急な必要に適切にこたえるものです。しかし、それだけでは貧しい状況にあるから抱えざるをえなくなる莫大な損害を埋め合わせるためにも、必需を持続的に補うためにも十分だとはいえません。さらに、国際的な経済・金融制度を改革して、発展途上国との公正な関係を促進させるようにはからわなければなりません。自国の発展と解放のために行っている貧しい国々の努力を支える必要があります。以上の教えをとくに農業の分野に当てはめなければなりません。農民、とくに第三世界の大多数の農民が、貧者の大半を占めているのです。(カトリック教会のカテキズム 2439, 2440)

4. 貧困との闘いの大きな動機となっているのは、教会が貧しい人々を優先している、あるいは特に愛していることです。教会はその社会教説の全体を通して、その根本原則、すなわち「財貨の普遍的な目的」を常に強調しています。教会の社会教説は、「連帯」の原則を絶えず再確認しながら、すべての人とすべての個人の幸福を推進するべく行動することを求めています。なぜなら、私たちはみながすべての人に対して責任を持っているからです。「連帯」の原則は、貧困との闘いにおいてすら、常に補助性の原則を適切な形で付帯していなければなりません。この補助性の原則があればこそ、貧しい国々において、すべての社会的・経済的発展の本質的な基盤である進取の精神を育むことができるのです。貧しい人々は、問題としてではなく、誰にとっても新しくより人間的な

未来を築く礎となる人々として見られるべきです。(教会の社会教説の概略 449、Libreria Editrice Vaticana)

フランシスコ会の資料から

1. 主は、私・兄弟フランシスコに、償いの生活を、次のように始めさせてくださいました。私がまだ罪の中にいた頃、癩病者を見ることは、余りにも耐え難く思われました。それで、主は自ら私を彼らの中に導いてくださいました。そこで、私は彼らを憐れみしました。そして、彼らのもとを去った時、以前には耐え難く思われていたことが、私にとって魂と体の甘味に変えられました。こうして私は、その後しばらくとどまって、世俗を出ました。(「遺言」 1-3)

2. 聖フランシスコは、病人に対して非常に同情を寄せ、彼らの要求に答えるとき大いなる心遣いを示していたのである。時折、世俗の敬虔な人が彼に菓をよこすと自分のためにもっとも必要であったとしても、他の病人に与えていたのである。フランシスコはすべての病人の病苦を自分のものとしていた。そしてこれを軽減することができない場合、同上を込めて慰めの言葉をかけていたのである。また、断食の日、病人が恥じないように、彼は一緒に食事し、彼らのために町に行って肉を請うことを恥ずかしく思わなかった。(2 チェラ 175)

3. 私たちは苦しみによって霊的なおとずれを聞きわきまえるようになるが、フランシスコのうえにも、神のみ手がおかれ、神の

右の手は、かれのうちに変化をひきおこされた。神は長期にわたる病気によって、かれの肉体をくるしめかれの魂を、聖霊による塗油にふさわしく準備された。かれが体力を回復したのちのこと、いつものように高価な衣服を身につけて歩いていると、ひとりの、身分は高いが、貧しい身なりをした騎士に出会った。騎士の貧しさに同情したフランシスコは、その場で着ていた服をぬいで、その騎士に着せた。かれはこのとき、高貴な騎士の困惑をおおいかくすこと、および、貧しい人の欠乏をみたすことという二つの義務をいちどに果たしたのであった。(大伝記2)

4. 今日では、食欲と人種差別と抑圧と戦争が人々を分裂させています。しかし、希望の種と新しいいのちの種は、殊に国際的なレベルで連帯を促進するグループの中に、また、人権やエコメニズム、労働組合、若者たちの結束、発展途上国の人々との具体的な分かち合いを促進する運動の中に、見ることができます。このような連帯、生活と仕事の分かち合いは、家族の特徴であり、それこそは私たち人間がみな兄弟姉妹であり、天にまします同じ神の子らであるゆえんなのです。イエスは天と地のすべてのものを一つに結び合わせるために私たちの兄弟とられました。イエスは、すべての人を神の家族の一員となるように招いておられます。そのような家族を築くことは、私たちの努力の目標です。フランシスコはイエスを生き方の模範とし、イエスに倣ってすべての人や生き物を家族として遇しました。彼は、自分についてくる人々を主からの賜物と考え、また、彼らが兄弟として生活すべきだということを、主御自身がフランシスコにお示しになったのです。人々はフランシスコたち (friars) のことを、心からの気遣

い、笑顔、互いへの尊敬、優しさ、愛を示す神の人であると評しました。彼らの生き方そのものが、福音を証ししていたのです。彼らはイエス・キリストの福音的価値観を信じて宣べ伝えただけでなく、さらに重要なことには、その共同生活と人々との生活の中で体現していました。私たちが現代において本当に福音宣教をしたいのなら、私たちは、初期の兄弟たちの生活の中に生かされていたのと同じ価値観を人々に見せることができなくてはなりません。兄弟共同体としての私たちの生活様式は、共同体を渴望し、新しいより人間的な社会に憧れる現代世界に対して、模範となることができます。(バヒア 19-23)

貧しい人々との連帯についての生涯養成

1. 「わたしたちのために現世において貧しい者となられた」キリストの御跡に従うために、兄弟たちは自己自身とすべての物を徹底的に放棄し、すべての人に喜びをもって幸いを告げ知らせつつ、「貧しくて身体の不自由な人々のあいだに」(未裁可会則 9, 2) 小さき者として生きる。神への愛ゆえに創造されたすべての人間にたいして下僕であり臣下として、謙遜で労を惜しまず節度のある生活を送りながら、小さき兄弟は「持っているすべてのもの」の分かち合いに応じる、人格的な用意を徐々に獲得する。(養成綱領 10)

2. 「死にいたるまへりくだって従う者となった」わたしたちの主、イエス・キリストに一致するために、小さき兄弟たちは「小ささ」を彼らの特有の召命にとって本質的な要素であると考え、力も特

権もない、もっとも小さな人々の間で、貧しさと謙遜さ、柔和さのなかにそれを忠実に生きる。小さき兄弟は、自身が小さいことと、すべての善の源泉である神に完全に依存していることを発見する。また、旅人であり寄留者として、わだかまりを捨てた和を重んじる人であり、誰をも快く迎え入れる人として、そしてすべての被造物の兄弟であり臣下として生きる。(養成綱領 22)

3. 最も小さな人々との連帯は、「神へお返しすること」の一形態として実効的に経験されるべきである。それは、仕事、勉強、委ねられた奉仕への現実的な惜しみなさ、犠牲を伴う関与への忠実さなど、日常生活での積極的で責任ある関与を通してだけでなく、現代の貧しい人々との実際の分かち合いを通してなされる。つまり、彼らの間において、活動的で祈りに満ち、明白で、つつましく、喜びに満ちた存在を通してである。(養成綱領 82)

6 忠実かつ献身的に働く

会憲

第 76 条 (1) 聖フランシスコの精神と模範に導かれた真に貧しい者として、兄弟たちは、労働と奉仕を神からの賜物と考える。そして、支配することではなく仕えることを求めるので、誰からも恐れられることのない小さき者として自分を示す。

(2) 労働こそが必要なものを得るための通常で主要な手段であることを認めて、すべての兄弟一人ひとは、「忠実かつ献身的に働き」、仕え、怠慢を「靈魂の敵」として斥ける。

第 77 条 (1) 兄弟たちは、労働の習慣を持つよう努める。兄弟たちは、「それが魂の救いに反せず、誇りをもって働くことができるならば」、自分の技能を生かすことができる。

(2) たとえ長期間かかわっているものであっても、兄弟たちは、どんな仕事をも自分のものであるかのように固執してはならない。むしろ、いつでも職場や始めた仕事を断念し、必要な新しい仕事に就く用意を持つ。

第 78 条 (1) 兄弟たちは、仕事を選ぶについて会則が与えた自由をもって、時代、地域、必要に従って、フランシスカンの生活のあかしが輝き出るようなものを優先させ、とりわけ、貧しい人々への連帯と奉仕の分野を求める。

(2) 仕事を選ぶにあたって、生計の維持が主たる目的であったり、唯一の基準であってはならない。かえって兄弟たちは、

報酬無しでも労力を提供する用意を持つ。

第 79 条 (1) どのような仕事や奉仕を選択するにあっても、修道院および管区の兄弟的な生活から離れることがないように配慮するとともに、各人の能力への配慮が必要である。そして管区規則の定めに従って、仕事を共同体として引き受け、共同責任において果たされるようにする。

(2) 労働への報酬の中から、兄弟たちは必要なものを受け、しかもこれを謙虚に受け取る。しかし、自己の働きによって受けるものであれ、本会の関係で受けるものであれ、また、年金、手当または保険金その他何らかのかたちで支払われるものであれ、すべて兄弟会に帰属する。

第 80 条 (1) わたしたちの兄弟会では、家事はできるかぎり兄弟たち自身、全員の手で行われる。

(2) 他の人々が兄弟会のために働く場合は、公正に国家法の規定を守らなければならない。

第 81 条 労働に対する報酬や他の収入を合わせても、共同体の生活費として不十分な場合、兄弟たちは主の食卓を頼みとし、規則の定めに従って「信頼をもって施しを求める」。

第 82 条 (1) すべての兄弟は金銭を、「神のしもべ、また、いと聖なる清貧の追求者にふさわしく」、貧しい者にあつたやり方で、また、共同体に対する連帯責任において使う。

(2) 金銭の使用に関して、兄弟たちは管区長および修道院長

に完全に従属するものであり、使う許可を求めるだけでなく、収支の正確な報告をする。

(3) 兄弟たち、とりわけ管区長および修道院長は、貧しい人々の必要を常に念頭に置いて、どのような蓄財をも注意深く避ける。

I-考察のために

昔から、人間の労働には多様な評価の仕方がありました。神学的、哲学的、政治的、経済的、倫理的な評価など。ここでは、そうした多様な評価法のすべてを詳細に列挙したり、まとめたりすることが目的ではないので、西洋やその近隣諸国ですでに存在していた知的労働（教養）と肉体労働という区別をするにとどめます。この区別は、長い間社会経済構造を左右するものでしたが、人権に関する教育と科学技術の発展のおかげで、区別の格差は縮まりました。とはいえ、仕事の種類で人を評価する社会階層は残っています。これに経済的な評価が加われば、社会格差はさらに広がるでしょう。それは、いわゆる先進国と未開発・開発途上国との間の貧富の格差、また、それらの国々の中の貧富の格差が広がっているがゆえに起こっていることです。失業や不完全雇用の増大によって、何百万もの人々が地理的文化的に極めて特異な地域から、より良い生活を求めて他の国々に移住せざるを得なくなっていることを考えれば、状況は悪化していると言えます。

キリスト教的な視点から見ると、労働の神学を形成するのは容易いことではありません。旧約聖書では、労働は最初、人間の尊厳の一部として示されていますが（創世記1:31, 2:3参照）、楽園での原罪以降、労働は苦難という否定的な意味合いを持つように

なり（創世記3:16-19参照）、他者に不当に搾取される可能性をも包含するようになります（アモス5:11-12, エレミヤ22:13参照）。新約聖書では、パウロは労働を、怠惰を避け、共同体の負担になるのを避ける手段として示しています（2テサロニケ3:6-8）。イエスは労働を的確に表現され、労働に適正な評価を与え、労働の奴隷とならぬようにと人々を戒めておられます（ルカ9:25参照）。教会の社会教説は、第二バチカン公会議前も後も、労働を極めて霊的なものと捉えてはいるものの、それ以上深い説明をしていません。労働は苦行と償いの手段と考えられています。しかし、第二バチカン公会議は、人間と自然界との間に新しい関係を築き、労働は神の創造的な救いのご計画に組み込まれています。このような視点から見れば、人間は、正義と愛の関係において他者との連帯を表明する時、自己実現を果たすということになります。ヨハネ・パウロ2世はその回勅「ラボーレム・エクセルチェンス」（働くことについて）の中で、人間が働くことの尊厳について、その表現の多様性を尊重し、評価しつつ、完全で一貫性のある体系的な教説を打ち出しています。

初期のフランシスカンたちは、労働の理論というものを打ち出してはいませんでした。彼らはフランシスコと共に、当時の貧しい人々が行っていたのと同じような労働にのみ従事していました。労働の目的は基本的な生活必需品を賄うためであって、アシジの富や栄光に寄与するためではなかったことは、当時のアシジの公文書（1210年）に残されています。彼らは労働が神からの賜物であること、そして労働を通して当時の最も貧しく、最も疎外された人々とつながることができることを知っていました。

現代の私たちは、労働について体系的な理論を持っているわけ

ではありません。しかし、そのような理論を形成することは必要です。さもなければ、労働を自由と人間の願望を実現する手段としてではなく、搾取の手段とする、あるいは単なるモノにしようとする社会を支持する危険に陥ってしまいます。フランシスカンの労働の理論は、自分の生活状態を改善したいと願う労働者の利益に私たちを近づけてくれるはずです。

1. フランシスコの書き物に見る労働

源泉資料のいくつか、特に未裁可会則7章と裁可会則5章を見ると分かるように、兄弟たちは、生活の中で労働の占める位置というものをよくわきまえていました。家の中と外、仕事の種類、彼らの知っている手仕事、働き方（忠実に、謙遜に、慎み深く）、働く目的（生活必需品を得るため）など。これらのことはみな、兄弟たちが働くのに必要な道具を持つことを想定しています（未裁可会則7:9）。しかし、フランシスコは、仕事の種類や働く場所、その目的について述べるほかに、働くにあたって持つべき大切な態度を強調しています。それは、小ささ、謙遜、自分のものを持たないことです。このような態度でいたからこそ、兄弟たちは最も貧しい人々と共に生活し、分かちあうことができたのです。だからこそ、フランシスコは兄弟たちに監督となったり、権威を持つ立場を意味する支配人や他の職務に就くことのないようにと勧めたのです。彼はさらに、「自分の魂を失う」ような務めも受け入れてはならないと厳しく戒めています（未裁可会則7:1-2）。

兄弟たちが行っていた仕事の中でも、特に注目に値するのは次のような仕事です。手仕事、日雇い労働者、病人の世話など。兄

弟会の中に聖職者の兄弟が加わるようになると、仕事の種類は多様になって来ました。ある者は説教に、ある者は靈的指導に、またある者は、ゆるしの秘跡を執行することなどに従事しました。

その後、仕事は一層神秘的・苦行的意味を帯びるようになっていきました。その結果、兄弟たちは靈魂の敵である怠慢を避け、「祈りと献身の靈」を消さないようにして働くべきだと考えました(裁可会則5:2)。とはいえ、フランシスコの仕事は決して極端な禁欲主義やお金を得ようとする極端な欲望に刺激されることはありませんでした。

興味深いのは、労働と施しとの関係です。残された文献を見ると、フランシスコは賃金労働を共同体の維持に欠かせぬ基本的な手段と考えていたようです。彼が、必要を満たすだけの収入が得られない時にのみ施しを求めても良いと言ったのは、その後のことです(未裁可会則7:8)。労働と施しとのこの微妙な関係は、会の中で大きな紛争と対立の種となっています。しかし、フランシスコの考えでは、この両者は何ら対立するものではなく、ただ施しを労働に次ぐものとしただけのことです。

晩年になって、フランシスコは再び自分の手で働くというテーマを遺言20-30で取り上げています。「私はまた、自分の手で働きました。そして今も働くことを望みます」と述べています。働くことを知らない人は、それを学びなさいとも言っています。働くという問題が取り上げられるようになった背景には、1226年に兄弟会が内紛を抱えていたという事実があります。その発端となっていたのは、すでに社会的身分が確立していた知的な兄弟か、働くことを嫌った兄弟たちです。それは、兄弟会が生まれた初期のころのように、主の奉仕の精神に立ち返る時でした。こ

のようにして、仕事はその形態がどのようなものであれ、フランシスカン靈性の中心的かつ基本的な要素となったのです。

2. 会憲に見られる労働

会憲第4章（第76条－82条参照）では、労働に関する主なポイントがまとめられており、それにその他の重要な側面が補足されています。聖フランシスコの精神と模範に導かれた真に貧しい者として、兄弟たちは、労働を神からの賜物と考えるという言葉で第4章は始まっています。兄弟たちはこのことを確信して、どんな仕事にも携わることができます。兄弟たちは権力や特権を求めてはならず、ただ、すべての人に仕えたいとの願いと責務だけを持つべきです。彼らの態度は、人々が少しも怖がらずに近づくことができるようなものであるべきです（会憲76:1参照）。

労働は、兄弟たちが働く習慣を身につけるための務めとも考えられています。つまり、兄弟たちは、肉体労働であれ知的労働であれ、自分の能力と自分が置かれた環境の必要に応じた技能を身につけ、その技能に熟達すべきということです。このようにして労働は、一人ひとりの兄弟が生活の糧を得るための「一般的で基本的な手段」となります。兄弟たちはこの活動に正直に、忠実に（信仰からあふれ出る忠実さ）、献身的に（完全な奉獻をもって）、そして靈魂の救いの妨げにならないように携わらなくてはなりません（会憲76:2, 77:1参照）。すでに引用した会則と共に、会憲は、「労働に対する報酬や他の収入を合わせても、共同体の生活費として不十分な場合」（会憲81参照）という条件付きで、兄弟たちに「主の食卓を頼みとする」ように勧めています。

それと同時に、会憲は、いかなる仕事をも、たとえ長期間かかわっているものであっても、自分のものであるかのように固執してはならないと強調しています。これによって、兄弟たちは新たに必要な仕事を始めるために、すでに定着した仕事を手放す用意ができます。それゆえ、断念と離脱は、独特のダイナミズムで兄弟たちの生活を特徴づけています。なぜなら、断念と離脱によって、既存の仕事にしばられることなく、時代が要請する新たな変化する環境を発見し、それに順応することが可能になるからです。このように、フランシスカンの霊性を特徴づける特別な奉仕（*diaconia*）などないがゆえに、どのような状況にも順応できるのです（会憲 77:2 参照）。

時と場所と必要性、それに兄弟たちが自分の仕事を選ぶ自由とを考慮しながら、兄弟たちの「フランシスカン生活のあかしが輝き出る」ような活動、特に、「貧しい人々との連帯と彼らへの奉仕の側面」が強調されるようなものを選ぶことは重要です（会憲 78:1 参照）。このように、仕事は生活費を得る主な手段であるとはいえ、兄弟たちは無報酬の様々な奉仕ができるようにしておくことも大切です。これは、労働を賜物と考えた結果生まれたものであり、無償の賜物の価値は、その考え方を見事に表現しています（会憲 78:2 参照）。兄弟たちが行う家事労働はお互いに対する感謝の念の表れですが、外部の人に仕事を頼む場合は、公正に国家法の規定を守らなければなりません（会憲 80:1-2 参照）。

仕事を選択するにあたって、修道院及び管区の兄弟的な生活を基準の一つとして考慮しなければなりません。それと同時に、各人の能力への配慮も必要です。仕事にこの兄弟的な側面があれば、兄弟たちは共通のプロジェクトを作り、それに取り組むことがで

きますし、その中で各人は他の人たちと協力しながら仕事をする
ことができます。それだけでなく、兄弟共同体の中でチームとして
働くならば、兄弟たちが個人の労働や年金、補助金、保険金など
によって得たお金はすべて、共同体が得たものであるという事実
を認識し、それを守る意識を育てる役に立ちます。ここで触れ
ているのは、経済的なことに対する透明性の問題であり、その透
明性があれば、兄弟たちは自由と信頼と心の平和において必ずや
成長するはずです。

金銭の使用が許されるかどうかについては、会憲は非常に明確
で細かい指針を打ち出しています。第一の基準は、貧しい人々の
生活です。貧しい人々の生活こそは、兄弟たちが自分の生活様式
を測るにあたって、特に金銭の使用にあたって参考にするべき基
準点なのです。このように常に貧しい人々のことを考慮に入れて
いれば、蓄財に走ることも財貨を無駄にすることもないでしょう。
いくつかの例外はありますが、兄弟たちにとって一番助けとなる
のは、まさに貧しい人々であるということを中心に留めておくこ
とが大切です。

金銭の使用を規定する第二の原則は、兄弟共同体との連帯責任
です。この基準は、あらゆる形の差別が撤廃されるような方法で、
既存の経済構造を変革するよう私たちを励ますものでなくてはな
りません。たとえば、兄弟間や、兄弟共同体の間に、それがたっ
た一つの共同体内であっても、あるいは会全体にわたるものであ
っても、貧富の差があってはならないのです。従って、金銭の使
用にあたっては、透明な会計システムとしかるべき部署への正確
で詳細な収支報告が必要となります（会憲 82:1-3 参照）。

3. いくつかの注意点

これまで述べてきたことから、仕事は、賜物であるという意味で、私たちが神との関係、他の兄弟たちや社会の他の人々、自然界、自分自身との関係の中に位置付けてくれるものであることが分かります。仕事からこの関係性の側面を取り除いてしまったら、仕事は価値を失うか、あるいは、利益だけが絶対の価値を持ち続ける社会で見られるように、単なる支配と搾取と蓄財の道具となってしまいます。また、仕事をこのように理解することによって、道徳的あるいは法律的な罪の代償として課される罰や過重労働としての仕事の概念を捨て去ることができます。

それゆえに、フランシスカンの視点から見た仕事とは、個人や共同体の生活の基本的必需品をまかなう手段であるだけでなく、個人や共同体の持つ多様な才能を伸ばし、開花させる最も適切な手段でもあります。仕事を通して、個人や団体は成長と自己実現を体験します。自由、知性、意志、想像力などは、仕事の中でこそ発揮されるのです。事実、フランシスコと初期の仲間たちは、仕事を通して、自分たちの生きる意味とフランシスカン運動の目的とを発見し、その結果、仕事を識別の基準としたのでした。そのことは、彼らが聖堂を修復し、ハンセン病者の世話をしたことからも分かります。

貧しい人々との関わりを考える時、フランシスカンの仕事は、社会への奉仕ともなります。それは、さまざまな倫理的・精神的価値に触発され、導かれた社会的次元を帯びてきます。そこには、分配可能な当然の報いとしての正義、平等なチャンス、個人の自発性の尊重、最も弱い人々との連帯、これまでとは別のもっと必

要とされる奉仕のために自分の仕事を手放す潔さ、兄弟愛に満ちた協力、感謝と寛大さが含まれます。このような理由づけに基づき、フランシスカンの仕事は、経済的にも社会的にも人々の尊厳を傷つけるようなグローバリゼーションに対しては新たな社会構造へと立ち向かうようにとの挑戦を受けているのです。それは、不正な状況を正し、社会の不平等に挑み、異文化を守り、異なる形の経済的・政治的發展を尊重することを求めるものです。

小さき兄弟としての私たちの主な務めは、働き口をつくり出すことでもなければ、維持することでもありません。むしろ、社会的・司牧的な奉仕を労働者に提供することで、彼らの役に立つことができるのです。私たちは、形を変えた依存状態をつくることなく、これを成し遂げるべきです。それぞれの国の労働法に影響を与えるのは、組織として団結した労働者自身なのです。彼らは、労働と経済が政治や他の社会問題（健康、教育、コミュニケーション、生活の質などの）から切り離されて考えられるべきでないことを理解しなくてはなりません。

フランシスカン的な精神で見るとすれば、すべての仕事は、学問的なもの、芸術的なもの、職人的なもの、管理者的なもの、工業的なものなどを問わず、私たちを創造主である神との直接的で親密な関係に導いてくれます。イエスの救いの御業というレンズを通して見るならば、仕事に関係のある活動はすべて、特別な神の国のしるしとなり、いっそう兄弟的な世界を私たちの間に築くの にふさわしい場となります。

それゆえに、今日フランシスカンとして労働の恵みに与ることは、神の夢と、最も貧しい人々の夢を分かち合うことにほかなりません。最も貧しい人々は、連帯の生活を、それもより人間的で

正義にかなった生活をひたすら求めているのです。このように考えるならば、働くことによって、小さき兄弟たちは尊厳をもって生き、個人としても共同体としても、己の願望をかなえることができます。それは、より正義にかなう社会を築くのを助け、私たちが生きているこの自然界に対する責任を担い、とりわけ、歴史の主とその創造と贖いの使命において協力したいとの願望です。

II-体験の分かち合い

仕事を恵みとして、また、道徳的な務めとして捉える考え方をこれまで紹介してきましたが、このような考え方は、私たちの徹底した貧しさに気づくことから生まれています。私たちの貧しさの現実は、私たちに「肉体的、心理的、道徳的、知的賜物」はすべて神から頂いたものであるという事実を悟らせてくれますし、また、私たちにはそうした賜物をよく調和して発展させる責任があるということを示しています（会憲 127:2 参照）。

会憲がいみじくも指摘しているように、すべての仕事は、知的、芸術的、技術的なものであれ、家事であれ、また、司牧的、管理者的、社会的、兄弟的なものであれ、私たちの靈性の大きい理想と切り離すことのできないものです。これらの理想の中でも、「祈りと献身の精神」は、その力とダイナミズムにおいて際立っており、私たちが行うすべてのことに意味と方向性を与えてくれます。そのほか、私たちの活動を選択し、遂行するための明確でかけがえのない基準である「兄弟性」の理想、いかなる支配をも排除してくれる「小ささと謙遜」の理想、古い場所と職務を離れて、新しいことに取り組むのを助けてくれる「自由」の理想、富

裕化や蓄積の思想の対極にある「無報酬」の理想、貧しい人々の必要にもっと敏感にならせてくれる最も貧しい人々との「連帯」の理想、私たちの生活からあらゆる種類の搾取を取り除いてくれる労働者に対する「正義」の理想、そして、働き方と共同体での金銭の使い方における「正直」の理想、があります。

このように様々な理想は、フランススカンの仕事を兄弟たちの「生計を支える通常のしかも主な手段」とするだけでなく、彼らの能力を伸ばす通常の方法にもしています。それはまた、特に貧しい人々のために提供される無償の奉仕であり、貧しい人々と連帯することによって、より人間的で兄弟愛に満ちた世界をつくりあげることができます。それは、天の国が私たちの中にあることのしるしでもあります。

労働の恵みに関する三つの体験を次にご紹介します。一つ目は、ベトナムで兄弟たちが行っている家事労働です。二つ目は、スペインのバリャドリッドで兄弟たちが行っている貧しい人々との連帯です。三つ目は、アルゼンチンのマルデルプラタで教育に携わっている兄弟共同体の体験です。これら三つの体験のいずれにおいても、労働は尊厳を持って生きるための、養成の過程を続けるための、最も貧しい人々に仕えるための、そして、日々の生活を通して天の国を告げ知らせるための手段と考えられています。

1. ベトナムから「労働の恵み」の体験

ベトナムで私たちは働く恵みをいただきましたが、それは、生計と養成と福音宣教の手段であると考えています。様々な体験がありますが、ここでは、ベトナム中南部の高原にあるダラト司教

区のドゥーシンの修練院の体験をお話したいと思います。聖ボナヴェントウラ共同体は二つの構成単位でできています。一つは、5名の司祭と1名の助祭、それに3名の終生誓願を立てた兄弟たちで構成する修道院。もう一つは、人数が一定していない修練者（毎年8名から12名）で構成する修練院です。どちらも、共同の祈り、典礼、食事、レクリエーションを一緒に行っています。

この共同体は、地元の小教区の世話と、在世フランシスコ会員や修道者に説教やゆるしの秘跡による霊的指導を行うなどの司牧活動を受け持っています。この共同体は修練者たちを霊的にも物質的にも支えています。1990年以来、この共同体は14,000平米の広さの「フランシスカン・フラワーファーム」と呼ばれる花園を運営しており、設備の整った研究所もあって、多品種の最高級の花の苗木を栽培しています。苗木は地元の人々に高く評価されています。兄弟たちは56名の従業員を雇い、そのうち46名は女性です。10名の男性のうち、3名は兄弟たちです。修道院長も取締役の名を連ねていますが、花園を実際に取り仕切り、直接の管理者となっているのはブラザーの兄弟です。私たちは、労働の価値と労働者の尊厳と権利について、教会の社会教説を実践しようと努力しています。苗木を育て、商品となる花を栽培しながら、在世フランシスコ会員と小さき兄弟たちのグループの存在を通して、フランシスカン精神の種を蒔き栽培しようと努めているのです。時々一人の兄弟がすべての従業員に聖フランシスコの生き方と精神についての話をします。花園の収入は次のような目的を達するのに十分なものとなっています。1) 従業員に給料を払うだけでなく、彼らに福祉サービスも提供する、2) 兄弟たちと修練者たちの生計の60パーセントを賄う（残りの40パーセ

ントはミサ謝礼金で補っている)、3) 管区の「養成と福音宣教基金」に寄付をし(利益総額の40パーセント)、司教区の「福音宣教基金」に寄付をする(利益総額の10パーセント)。花園に関する問題については、それぞれの修道院会議で話し合われます。

修練者たちの生活は、祈りと勉強と肉体労働という三つの主な活動で構成されています。彼らは朝(8時から11時まで)働き、洋花とベトナムのランを商品として栽培(1,000平米の広さ)し、他にも自分たちで食べるために野菜を栽培しています。彼らは共同体のために料理をし、修道院の維持のために働きます。日曜日には、何らかの社会奉仕と使徒職活動(病人や貧しい人々を訪問するなど)をしています。5名の入会希望者が花園で半日働いています。それによって得た収入で、彼らは自分に必要なものを買ひ、勉学の費用を賄います。

バリア司教区のビンギアにあるマキシミリアン・コルベ修道院の志願者たちも似たような生活を送っています。彼らはコーヒーの木とコショウの木を2ヘクタールの土地で栽培しています。兄弟たちと志願者たちは経済的に自給自足しています。他に二つ修道院がありますが、それらも「労働の恵み」を活発に育成しています。メコンデルタのロンスエン司教区のキュラオギエンにある天使の聖母修道院には、養魚池があり、牛を飼っていて、田圃もあります。プークオン司教区のソンビーにある勤労者聖ヨゼフ修道院は、30ヘクタールの土地をゴム園と果樹園にしようと植栽を行っています。

私たちの管区は、人口の75パーセントが農業で生計を立てているこの国で、こうしたことを行っていることに大変喜んでいきます。

2. スペインのアランサスで貧しい人々と連帯して働く

スペインのバリャドリードの町郊外の東部に位置するいわゆる「パハリーリョス」と呼ばれる地域に、フランシスコ会の「アランサスの聖母管区」があり、そこの小さな共同体での体験をご紹介します。この共同体は、1960年代から1970年代にわたる工業化の時代に、町にやってきた労働者たちを受け入れるために建てられた施設です。この地域は、長い間町とその周辺の麻薬密売の中心地の一つで、薬物依存症者が絶えませんでした。

1995年からこの地域に兄弟たちが住む小さな修道院があります。この修道院には4名の兄弟がいて、2名は最初から住んでいます。あとの2名は入れ替わっていきます。私たちは常に、その地域を代表する既存の組織や団体、特に自治会と力を合わせて共に働く道を探って来ました。私たち独自のプロジェクトを先に提示するのではなく、できるだけ平等な関係を築こうと努力して来ました。

私たちの生活は4つの柱を中心に回っています。それは、神体験を中心とする柱、兄弟的な生活の柱、小ささの柱、福音宣教活動の柱です。私たちはこれら4つの柱を基本とした一環的な方法で働くように努めています。長年にわたり、私たちは自分の能力と願い、その時々が必要と与えられたチャンスに応じて、さまざまな仕事をしてきました。その際基準としたのは、その仕事が共同体として可能かどうかを識別すること、危険にさらされている人々との接触を続けること、独自の使徒職（学校、小教区、社会活動などの分野で）はなるべく避けること、指導者的な立場をと

らないこと、各兄弟に自分が最も求められていると思うことに専念させること（この点では、社会活動が最も多いように思われる）、契約した賃金労働とボランティア活動を組み合わせること、受け取ったお金を連帯の精神で使うこと（必要な分だけ使って、残りは「連帯基金」に回すこと）、社会活動を地元（青年会の育成や個人への配慮など）やさらに広い地域で（何人かの兄弟は管区委員会のメンバーですし、1名は管区理事です）のより司牧的な活動と組み合わせることです。

現在私たちが活動しているのは次のような分野です。一人の兄弟は、地域の自治会の仕事を継続的に行っています。彼は隣人たちと共に、地域に暮らす人々の生活の向上、問題の解決や予防などのために働いています。時間とエネルギーのほとんどをこの仕事に費やしている兄弟は彼ですが、共同体全体もこれらの仕事に携わっています。この兄弟は、ネットワークを通じて移民たちにも手を差し伸べています。このネットワークは、町でさまざまな修道会が移民の問題に関して取り組んでいる活動から生まれたものです（教育、宿泊所の提供、仕事や法律的な問題の支援、スペイン語のクラスなど）。この兄弟の務めは、それぞれ異なるプログラムが調和的に機能するように見守ることです。別の兄弟は、毎朝同じネットワークを通じて法律相談のボランティアをやっています。午後、彼は赤十字のプログラムで有償奉仕をしています。このプログラムは電子機器を使って高齢者を助けるものです。三人目の兄弟は、バリアドリードの二つの地域で社会支援活動を行っています。彼はカリタスと半日契約を結んでおり、ほとんどはジプシーの家族のために働いています。彼はアランサスの「平和センター」のチームリーダーの一人でもあります。四人目の兄弟

は、黙想会や霊操などの指導をしています。

このような仕事は私たちにとってとても重要です。それは私たちの収入源であると同時に、社会での私たちの独自のあり方を示すものであるからです。それによって、特別な関係が可能になり、賜物である私たちの能力を伸ばすことができ、現実を変革して神の国を促進することができます。それだけでなく、この仕事は不正や対立という重荷を体験するよいチャンスを与えてくれました。これらの体験から、私たちはお互いに支え合い、兄弟愛の絆を強める必要があることを一層深く理解することができたのです。私たちがその方向に動機づけてくれるようなことに対しては、細心の注意を払う必要がありました。私たちは少しずつですが、仕事においてより小さき兄弟となるように、仕事から得るものを受け入れるように、学んでいます。それは、時には満足感であったり、厳しさであったりします。私たちの仕事は最後は常に、「手を差し伸べる場」となっています。私たちは打ちひしがれた人々と歩みを共にして来ましたが、それによって私たちは深く心を動かされ、彼らの中に神の現存を見ることができるのです。神はこうした打ちひしがれた人々を神秘的に支えられ、彼らに特別な配慮のまなざしを向けられます。私たちは自分が神の偉大なご計画の小さく不完全な部分であると感じています。

3. アルゼンチンのマルデルプラタの教育現場で働く

私たちの兄弟共同体は3名の兄弟（40歳、51歳、60歳）で構成されています。小教区の仕事のほかに、二つの学校を受け持ち、合計2450人の学生の面倒をみています。学校の一つ、「フ

レイ・エム・エスキユウ」は中流階級の人々が住む地域にあり、もう一つの学校「サン・ミゲル」は、貧しい家庭の人々が大半の地域にあります。私たちの仕事は二通りあります。司牧と運営ですが、どちらにおいても、信徒の参加を喜んで受け入れています。

司牧的な側面

- 仕事の司牧的な側面は3名の兄弟全員が関わっています。時々教室に顔を出し、学生たちと話をします。職員を交えた養成グループもあります。黙想会やグループ活動、一泊旅行や遠足、連帯運動などにも参加します。これらはいずれも、学生たちや職員、保護者たちの状況を考慮に入れた管区の司牧計画の枠内で行われます。どちらの学校にも、司牧活動のコーディネーターがおり、彼が兄弟たちと一緒にカテキスタの養成と司牧計画の遂行のために働きます。
- どちらの学校も多くの奉仕活動で小教区に協力しています（日曜日のミサや、その他教会や修道会の重要な祝日などのほかに）。ホームレスの人々のために炊き出しが行われています。貧民街の子供たちへの援助も行われています。2週間の冬休みを使った短期の宣教活動が現地人の居住区（私たちの社会で最も疎外された区域）で組織され、それに3名の兄弟全員と学生たち、保護者たち、教師たちが加わり、町のはずれの一地区でその宣教の前段階のようなことが行われています。その費用は、集まって一緒に料理し、それを各家庭に売ったりして協力してくれる参加者の努力によって賄われています。
- 私たちの兄弟共同体のもう一つの重要な活動は、「子供た

ちの権利のための行進」を組織することです。この行進は、毎年10月4日に行われ、自己の権利を公にしかも非暴力の形で要求する学生たちによって活気あるものとなっています。この行事は、芸術活動や体操、掲示板、音楽などを通して子供たちの権利を訴えており、町中のすべての学校がこの行事に招かれています。

- 私たちの二つの学校もこれらの活動を共に行っており、そのお蔭で、社会階層の異なる家族が一つに結び付けられています。

運営的な側面

- 兄弟の一人は法律の専門家として働いていますが、彼が一般の法律家と一緒にいる職務、つまり重要な決断は、兄弟共同体全体の意見を事前に聞いた上でなされています。その中には、人を雇うなどの問題も含まれます。上級管理者となる人材を雇う場合には、例外的な基準が設けられています。上級管理者を希望する人は、1名の兄弟と2名の一般人で構成された管区の学校の委員会による面接を受けます。
- 兄弟共同体の仕事は、教育全般において、福音宣教の職務に対する信徒の共同責任を推し進めることであるということ強調したいと思います。福音を告げ知らせるという任務において、私たちは最も貧しい人々や最も無力な人々（子供たち、高齢者、土着民、ホームレス）を最優先するように努めています。
- 教育活動においては、私たちの霊性のある側面を重視して

います。それは、兄弟性（兄弟たちと一般の人々とのチームと働く）、小ささ（特に疎外された人々と働く）、共同責任、無償奉仕、そして喜びです。

III-実行

個人の養成のために

黙想のために用意されたテキストのうち一つを選び、それを実生活に応用しなさい。次のような質問に答えるのも役に立つと思います。

- 自分が現在行っている仕事は、人間として、また小さき兄弟としての熱意を表しているか。どのような仕事が一番自分に適していると感じるか。どのような分野が一番自分の能力を発揮できるか(身体的、心理的、道徳的、精神的に)。
- 自分自身や神、他者から逃れるために活動に没頭するのを避けるためには、労働の恵みを他の霊的な価値(祈りと献身の精神、兄弟性、小ささ、清貧の生活、福音宣教)と共に自分の生活プランにどのように取り入れたらよいだろうか。
- 自分は毎日仕事にどれくらいの時間を割いているだろうか。
- 自分の日々の仕事の主な目的は何だろうか。
- 従順によって、仕事を変えたり、移動を命ぜられたりしたら、自分はどのような態度をとるだろうか。

兄弟共同体の集まりのために

これらの共同体の集まり(修道院、地域、管区の)には、三つの段階を設けることができます。まず、御言葉を祈りを込めて読むこと、次に、自分の生活を振り返ってみること、最後に、行動、つまりしるしと祈りで締めくくることです。そのためのヒントを

ご紹介しましょう。

A. 御言葉を祈りを込めて読むこと

1. 31)その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、(32)イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。(33)弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。(34)イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。(ヨハネ 4:31-34)

2. (15)この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた。(16)そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。(17)イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」(ヨハネ 5:15-17)

3. (1)さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。(2)弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」(3)イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。(4)わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。(5)わたしは、世にいる間、世の光である。」(ヨハネ 9:1-5)

B. 生活の見直し

1. 兄弟共同体はこの仕事（労働）というテーマについて、修道院会議や静修日などの時に考えてみるとよいでしょう。集まりの前の数日間、院長または担当者は、本書の仕事（労働）に関する箇所を個人的に読んでおくように兄弟たちに勧めます。

2. 集まりの最初に祈りを唱え、歌を歌います。そして、聖書の一節または教会の文書、またはフランシスコ会の資料、あるいは司会者の選んだ箇所を読みます。

3. 司会者を務める兄弟は、集まりの最初にこのテーマおよび関連する体験についてのまとめを簡潔に述べるとよいと思います。他の兄弟たちは、考察を続け、自分の体験したこと、あるいは現在体験していることについて話すこともできます。

4. 共同体としての話し合い：

- 日々の生活の中で、仕事にどのような重要性を与えているか。仕事にどれくらいの時間を費やしているか。
- 個人としてまた共同体として仕事を選び、行う際に、フランシスカン靈性のどの価値を強調しているか。
- 私たちの仕事の最終目的は何か。生活の糧を得るためか。個人としてあるいは共同体として何かを成し遂げるためか。無償で奉仕するためか。養成のためか。福音宣教のためか。他には。
- 通常、現代社会では人はその携わっている仕事の種類で評価され、特に不公平な給料を考える時それは顕著である。このようなことは、私たちの兄弟共同体で起こっていないだろうか。仕事の種類がブラザーの兄弟と司祭の兄弟との関係に影響を及ぼすことはないか。社会差別の形態としての知的労働と肉体労働の差別を私たちは乗り越えている

か。

- 世界のいたるところで、子供たちや若者が、しばしば非人間的な搾取されるような形で、まだ幼いうちから働かされている。これらの現実に対する関心を高め、子供たちや若者が尊厳をもって成長するのを助けるために、私たちはどんなことをしているか。
- 世界のいたるところで見られる移民の理由は、仕事の不足である。私たちは兄弟共同体として、働き口をつくり出すというよりも、家族を残して働きに出る人々や残された家族に精神的に同伴するために、どんなことをしているだろうか。
- 集まりの締めくくりとして、祈りを唱え、閉会の歌を歌う。

C. 仕事（労働）についてのしるし、またはジェスチャー

各兄弟共同体は、家事労働や貧しい人々への奉仕に対するその共同体の献身ぶりを示すようなしるしやジェスチャーを選びます。たとえば、

- 兄弟たちが家事（掃除や、整頓など）に参加できるような兄弟生活を考える。
- 地元の他の組織と協力して、働き口をつくり出したり、強化するのを助ける。
- あらゆる形態の搾取、特に子供たちや若者の搾取を排除することを目的としながら、労働者の権利に対する人々の意識と尊重を高める。

D. 祈り

主よ、働く恵みと共に、
次のような賜物をお与えください。
あなたの創造の御業にもっと情熱的に協力するために
祈りと献身の心を、
奉仕への召し出しを識別し、実現するために
兄弟愛の心を、
あらゆる形の恐れと支配を乗り越えるために
小ささと謙遜の心を、
自分の仕事に執着せず、新たな仕事に取り組むために、
自由な心を、
富を蓄えたいとの欲望を消すために
感謝の心を、
貧しい人々への関心を高め、彼らと共に働くために
連帯の心を、
いかなる形の搾取をも排除するために
正義の心を、
自分たちの財貨を謙遜に、兄弟愛をもって使用するために
正直な心を。
主よ、それは、あなたからいただいたすべての賜物を
労働を通して貧しい人々と分かち合うことができるため
です。
アーメン。

IV-更なる考察のために

聖書から

1. 彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。(申命記 15:10)

2. あなたの手が労して得たものはすべてあなたの食べ物となる。あなたはいかに幸いなことかいか恵まれていることか。(詩篇 128:2)

3. 兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした。(1テサロニケ 2:9)

4. わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。(1コリント 15:58)

5. (3)わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、(4)あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。(5)それは、あなたがたが最初の日から今日

まで、福音にあずかっているからです。(6)あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。(フィリピ¹:3-6)

6. (10)実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。(11)ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。(2テサロニケ 3:10-11)

教会の公文書から

1. 働くことは人間の地上の生存にとって基本的なことでであると教会は確信しています。人類学、古生物学、歴史、社会学、心理学その他人間にささげられる多くの学問遺産の全体を考える時、教会のこの確信は確認され、すべてが反論できない仕方でこの現実を実証するよう見えます。けれども教会の確信の源泉は何よりも神の啓示されたことばであって、知性の確信は信仰の確信でもあります。(ラボーレム・エクセルチェンス 働くことについて 4)

2. 世界の各地で、各国で、国と国の間で社会正義を実現するために働く人の連帯、そしてまた、働く人との連帯のいつも新しい運動が起こってくる必要があります。働く主体が格下げされ、働く人が搾取されたりすることのため、貧困と飢えの地域が拡大していくことのため、このような連帯が求められるときはいつも手

の届くところになくてもなりません。(ラボーレム・エクセルチェ
ンス 働くことについて 8)

3. 労苦は人がみな経験することで、人みんなに知られています。
肉体労働をしている人々によく知られていることです。農業労働
者によく知られているだけでなく、鉱山や採石所、溶鉱炉で働く
鉄工労働者、建築その他の建設業で、働く人々によく知られてい
ることです。知的な作業場で働く人々、学者、社会に広い影響を
持つようになる諸決定をする重い責任の重荷を負う人々にもよく
知られていることです。医師や看護婦にもよく知られていること
です。家庭と子供の養育の日々の重荷と責任を背負っている主婦
たちにもよく知られていることです。すべて働く人々によく知ら
れていることで、働くというのはすべての人への召命ですから、
だれにでもよく知られていることです。(ラボーレム・エクセルチ
ェンス 働くことについて 9)

4. **人間の労働**というものは、神にかたどって造られ、地を支配
しながら、人々とともにまた人々のために創造のわざを継続する
ようにと召されているおのおのの人格から直接に出てくるもので
す。したがって、労働は義務なのです。聖パウロも、「働きたくな
い者は、食べてはならない」といっています。労働は創造主から
のたまものと受けた才能とを大事に生かすことです。(カトリック
教会のカテキズム 2427)

5. 人間は労働をしながら、自分の本性に刻まれた能力の一部を
働かせ、完成させます。労働の第一の価値は、労働の主体であり

目的である人間そのものにあります。労働は人間のためにあるもので、人間が労働のために存在するものではありません。一人ひとりの人間は労働に携わって自分と家族の生計を立て、人間共同体に奉仕することができるようにしなければなりません。(カトリック教会のカテキズム 2428)

6. 就労と就職の機会を男女、健常者と身体障害者、先住者と移住者の不当な差別なく、万人に与えられるべきです。状況によっては、社会としても市民が仕事と雇用を得ることができるように助けなければなりません。(カトリック教会のカテキズム 2433)

フランシスコ会の資料から

1. 主が働く恵みをお与えになった兄弟たちは、忠実かつ献身的に働いて、靈魂の敵である怠慢を避け、聖なる祈りと献身の霊を消さないようにしなければならない。現世のあらゆる物事はこの霊に従属すべきだからである。(未裁可会則 5:1-2)

2. 私はまた、自分の手で働きました。そして今も働くことを望みます。すべての兄弟もふさわしい仕事に従事するよう、切に望みます。働くことを知らない人は、それを学びなさい。しかし、これは働きの報酬を受ける欲望のためではなく、模範を示し、怠慢を避けるためです。働きの報酬が与えられない時には、戸ごとに施しを求めて、主の食卓に頼りましょう。(遺言 20-22)

働くことについての生涯養成

1. 小さき兄弟たちは、物の使用における真に貧しい生活を送ることによって、貧しく謙遜なキリストをこの世に証し、また、すべては神からの贈り物であることを知って、喜びと感謝をもって、「忠実かつ献身的に」働く。

小さき兄弟は、聖フランシスコのように、神の国を建設するため、フラテルニタスを維持するために、自身の手で喜んで働き、そして持っているものを貧しい人や困窮した人と分かち合う。(養成綱領 24)

2. 兄弟や入会志望者たちはその上、自分たち自身を「交わりの霊性」へと養成しなければならない。それは彼らに次の能力を増大させる：

- 各自が主から受けた賜物を効果的に分かち合って生きること、また兄弟たちとすべてを共有すること。
- 「真に困窮している人々」と連帯し、「持っている物を貧しい人々と分かち合う」こと。
- 肉体労働や知的労働、たゆまず、まじめな作業の感覚を養うこと。
- 「何物も自分のものとせずに」生きること。修道院への責任を感じながらも、それを我が物としない。
- 経済財の管理に透明性を保持し、御摂理に対して真の信頼を置く。(養成綱領 81)

3. 職業面での養成は、初期養成と生涯養成を通して、手仕事の、技術的、芸術的、学問的な仕事の十分な能力の獲得を目的とする。

そのことは、小さき兄弟に社会と教会、そして本会のなかで、ひとつの職業かひとつの質の高い活動を果たしつつ、自己の使命を生きることを可能とさせる。(養成綱領 229)

現世においては旅人であり、寄留の身である

—小さき兄弟会会憲第四章に基づく生涯養成のための資料—
ローマ2008年

フランシスコ会日本管区

2011年7月15日 聖ボナベントウラの祝日